392-181

禪とは見ざや

閻宮英宗著

東京 大洋社版

始

特218

帝國圖書館藏

間宮英宗禪師述

禪とは是ぢや

東京 大洋社版

帝國圖書館藏

緒言

世に禪を難了不可解として、之れが參究研鑽を忽諸に附す者あり。這は何に依りて然るか。師家にして解し易く禪を說かざると、其の辭句の佶屈聱牙なるに基くべし。臨濟宗方廣寺派管長間宮英宗老師は、辯舌の師家にして、而かも解し易く、碎けて禪を說くの特長を有せらる。余輩常に同老師の知遇を辱うするを以て、乞ふて其の講話を集め、上梓するに至りし所以は、未だ世の禪を知らざる人の指導たらしむべく、換言すれば宗教皷吹の微衷爰に存するあるのみ。敢て初心の人と言はず、既に參禪辨道して、禪門の鎖鑰に觸るゝの人も亦、本書に依りて、

得るところあるを疑はず。緒言以て然り。

鎌倉圓覺寺老龍窟にて

竹の島人　松田竹嶼

禪とは是ぢや　目次

◇主人公……一

▼瑞巖和尚の自問自答　▼徵兵令は一種の覺醒劑　▼生れて來た本意義を確得せよ　▼金錢に何んの威力がある　▼働く爲に働くに限る

◇那箇本來の面目……一四

▼禪の有難いところ　▼眞理は唯一つ　▼住する所なくして其心を生ず　▼超越的な意味の偈示　▼禪機を全うする所以　▼力を以て爭ふべけんや　▼修行する程恥を知る　▼本來の面目中に活動する　▼結局五尺の飯袋だ　▼誠の力は天地間に響き渡る　▼借金の中へ飛び込む　▼扇子に對しても恥かしい

◇三界城と十方空……六八

▼心は二三あるものではない　▼迷悟不二の好境涯　▼白隱のフン然うか

◇如來の光明……六八
▼心の淨き人は幸なり　▼看る時見えず暗昏々　▼四無量心之れ光明　▼智惠の光明

◇閑不徹と大忙生……八三
▼虛堂和尙の詩句　▼傍人の吟誦で啓發　▼簡禪師と德山和尙との商量　▼明月大空に掛れるが如し

◇何事にも趣味……九三
▼好き嫌ひは我儘の結果　▼悲みの中必ず樂あり　▼世の中には不幸も不平もない

◇一心に照鑑文を讀め……一〇六
▼人間は佛魔同體　▼取捨する能力が大切　▼怖るべき煩惱妄想の賊

◇無相の慈悲……一二五
▼衷心から流露する愛の心　▼水中の月の如く觀念せよ

◇投機の偈……一三
▼機會は隨所にある　▼眞理の大機に投ぜよ　▼悉く私の心の顯現　▼山川草木總て佛祖の賜物　▼宗敎の本當の妙味

◇茶禪一味……一三四
▼法源の古道場　▼六百年來の帆風門　▼幽寂の境涯

◇南無の解……一三九
▼此の世界は諸行無常　▼愚痴は道理に暗いから起る　▼本源に立ち返れば可い

◇碧巖錄より……一五一
▼圜悟禪師のこと　▼雲門の中興雪竇和尙　▼三歩と五歩　▼五歩には須く死すべし　▼虛榮の借着は不可　▼心に錦を着た乞食　▼懷中に爆裂彈　▼精神的大富豪となれ

◇天地と共に喜べ……一七〇

▼佛陀大悲の喜び　▼各階級其々喜ばせよ　▼貴き人生の寶玉　▼喜ぶも喜ばすも可なり

◇懷しき京の町……一八三

▼思へば恥かしい極み　▼鐵眼和尚に睨まるゝやうな思ひ　▼八年目の會見　▼飾りなき所無限の妙趣

◇山窓閑話……一九二

▼我見我執を忘るゝこそ妙　▼其道を進んで往けよ　▼眞淨老師の不撓不屈　▼松の雫　▼信頼する所へ飛び込め

◇直心是道場……二二四

▼童子の心は美しい　▼至る所總て修養の道場　▼火の熱いといふも妄語　▼惡い人でも自分の師匠　▼煩悶は何處から來るか　▼一切の念所を斷ぜよ　▼何處で題目を唱へても同じこと　▼無上の大きな寶　▼心の中の敵に打ち勝て　▼何處でも悟れる　▼心の持ち方一つ

◇十種の禪病……二五五

▼又一般病症である　▼宗教といふ藥　▼自信不及の病　▼自信のない動物　▼自力も他力も同じこと　▼自由を得ざる病　▼我見偏執の病は氣障　▼限量窠臼の人　▼機境不脫の病　▼少を得て足れりとするな　▼他流試合が肝要　▼正傳を尊んで旁宗をいやしむ　▼位貌拘束に捉はるゝな　▼指磨淨盡

◇大悟徹底の人……二九八

▼根本的な宗教的な罪　▼光る素質はある　▼所謂佛作佛行

——（目次終）——

禪とは是れぢや

間宮英宗禪師口述
松田竹嶼編

◇主人公

▼瑞巖和尚の自問自答

『瑞巖和尚、毎日自喚二主人公一、復自應諾、乃云惺々着、諾、他時異日勿レ受二人瞞一、諾々』といふのが、抑も本論の主眼である。瑞巖和尚が、毎日主人公と喚んだけれども、誰も返辭を爲なかつたから、自分自らハイと答へられた。又

『目は覺めてゐるか？』

『ハイ』

主人公

『狼狽するな』

『ハイ』

と自問自答せられた。これと同じく無業和尚は、

『莫妄想』

と唱へ、雲門和尚は

『暫時不レ在、如レ同二死人一』

と喝破せられたのである。

吾が禪宗で主人公といふのは、眞宗の南無阿彌陀佛、基督教神學の絶對眞理と異名同體である。此の絶對眞理、神佛主人公は、貴賤貧富に拘らず、人々各自に具有して居るが、唯氣付かざるのみである。恰も師團に師團長あり、一縣に知事あり、一家に家長ある如くに、一身には主人公がある。

然らば、主人公とは何物であるか、併し主人公といふ一物があると思ふと天地懸隔である。心理學などでも精神は智情意の集合體に過ぎないと言ふてゐるやうに、主人公といふ別物は決してない、けれども無と思へば又學明歴々法界充滿である。

世人が多忙しいといふが、これ皆修養なき人の常習として、多忙なる言辭を以て、直ちに遁辭としてゐるのである。英雄自ら閑日月ありの反證と思へば、寧ろ慚死すべきではないか。多忙多忙と外物に使役せられてゐるのは、自己自身に主人公を輕蔑してゐるのに當りはしまいか。反省一番思ひ半に過ぎん。彼の師團長なき師團の亂雜も、知事なき縣治の亂雜は言はずもがな。主人公なき人は、目に見ては色に迷ひ、耳に聞きては聲に奪はれ、鼻舌身意皆然りで、一兵卒たる歩哨の五官が、指揮の任に當つて居るから、軍隊に等しき一身の修まらぬのも無理ならぬことである。一兵卒たる歩哨が上官を使役するが如く、又一屬官が知事を使動するが如く、五官の鼠賊が掠奪暴虐を擅にするから、實に狼狽至らざるなしである。故に瑞巖和尚は、他時異日人の瞞を受くる勿れと垂示せられた。念の爲めに言ふて置くが、今爰に人といふてあるのは、廣義の意味で、自分に對する森羅萬象一切の外界を、假に名付けて人と言はれたのである。

意志未だ定まらず、血氣に逸る青年時代に於ては、層一層五官の歩哨は亂れ勝ちである。だから慾望の爲めに捕はれ、本能の爲めに奪はれて、人間の價値本領が、其痕を隱して認得することが能きぬ。唯外界に現はれたる五慾等を以て律しやうとするばかりでなく、尙且つ主人公をも瞞着せんとするの愚を演ずることが往々である。古人も

吾心とらまへにくし春の山

と歎じてゐる。財、色、食、名、睡等一度眼前に羅列せらるゝや、精神は顚倒妄想の結晶體と爲り了るから、愼まねばならぬ。一齊先生も

春やいかに秋やいかにと問ふ人に
答へず眠る月花の主

と言ふて居られる。

▼徵兵令は一種の覺醒劑

吾々の心は、何處に何を爲てゐるか、目で見、耳で聞いては、直ちに外物に逐ひ廻されるばかりで、內に向つて反省することを怠るから、主人公は何處だ、吾は何物かと問はれては、憮然として自失する外はない。此主人公我れなるものは、七千餘の一切經を繰り返しても、古今東西の哲學書を究め盡しても、到底見當らぬから、自己自身に向つて獲得する外に方法はない。

或る時、鎌倉圓覺寺の洪川和尙が、鳥尾得庵(小彌太)居士に向つて、

『汝の心を持ち來れ』

と言はれると、其時得庵居士は手に鐵如意を持つてゐたから、直ちに突出して、

『此の如し』

と答へた。すると洪川和尙が、

『それは鐵如意である。汝が心を持ち來れ』

と言はれると、得庵居士は冷汗背を濕し、逡巡躊躇して答ふることが能きず、爾來益々研鑽したといふことであるが、全體人間は言語や、學問や、耳目聲色を以て、主人公と思ふ否な主人公とするから、得て間違ひを生じ易い。耳から入れて口から出すだけならば、蓄音器喇叭手と擇ぶ

ところはない。即ち師團長なくして、口耳の歩哨や、聲色の喇叭手が跋扈するやうでは、蛙鳴蟬噪の烏合の衆に外ならぬ。迚も奮鬪努力の大戰功は得難い。だから瑞巖和尙は、靜座して主人公と呼ばれた。若し在鄕軍人にして、毎日一度佇宛在鄕軍人なりと呼んで見ては什麼ぢや、果して在鄕軍人の眞面目を保ち居るや否なやと、警醒したならば、大に益するところがあらう。又時には二三日の强行軍や不眠臥の演習でも爲たならば、嘸愉快であらう、平素は天下無敵を氣取りながら、一朝動員令を手にするや、顏色靑褪めて、意氣銷沈するに至つては滑稽も亦甚だしいではないか。それは多く富貴の子弟だといふことだが、是等は平素放縱生活且つ飽食暖衣で、極言すれば修養不足であるからである。其處に至ると、寧ろ貧乏人の方が淡しい程で、冷靜で平素の困苦が生む副產物として、結局戰時を以て、平時よりも安樂と思ふ連中がある。これに依つて見れば、徵兵令は、富豪の子弟には、一種の覺醒劑といふて差支がない。

▼生れて來た本意義を確得せよ

往時庄屋といへば、農民は維れ命維れ從ふで、生命に代ふる實印さへ預けて置いて必要な都度自由に捺印して貰つたといふことであるが、現今は然うでない。縱令市長村長であらうが、曲つたことがあれば、それを糺彈すべき權利がある。國民たるものは、秩序を正し、威儀を嚴にして、陛下の大御心を體得し、主人公の亂走を愼まねばならぬ、主人公が泰然自若でないと、意馬心猿が何處まで狂ひ出すかも知れない。要するに吾々は何故に現世に生れて來たかの本意義を確得せねばならぬ。

往時或る所に、一人の阿呆小僧が居つた。主人から一本の阿呆杖を貰つたので、天下無二の阿呆と評されたが、數年の後主人病床に臥し、命旦夕に迫つた。時こそ來れりと、阿呆小僧問ふていふ、

『旦那樣、貴方は死んでから何處に往きますか？』

『私はそれは知らぬ』

と主人が苦しい息と共に、漸く答へると、小僧は又も問ひを發した。

『死ぬ旅行の用意は出來てゐますか？』

『未だ出來て居らぬ』

『一體案内者は誰れで、御持ちに爲るのは、何のやうな品で、目的方法は什麼でございますか？』

『私は其麼總て知らない』

と主人が答へた。すると阿呆小僧は呵々と打ち笑ふて、これ恰も外出するに方つて、往く先と要務とを知らざるものと同じで、天下これ以上の阿呆はなからう。依つて先きに頂戴したところの此杖を返さうと言ふたさうであるが、實に肉を刺すの訓詞ではないか。今健康者に向つて、

『君は死ぬぞ、明日死ぬかも知れぬ。死の覺悟は什麼だ？』と言ふたならば、其の問はれた健康體の人は、必ず

『何死ぬものか』と平然として答へるであらう。けれども人生は無常である。老少は不定であるから、何時何處で死ぬかも分らぬと切實に感じたならば、一刻も猶豫は能きぬであらう。ところが何人も對岸の火災視するのは、免れ難き凡情の常である。衲は日露戰役の時旅順攻圍軍に從軍僧として參加し、始終天幕内に起臥したが、砲彈の飛び來るのは勿論である。それでも野原では

安心が能きぬものが、天幕内に居ると安心のやうな氣がした。思へば愚な話である。恰も死の砲彈を、健康體といふ天幕位で安心して居りはせぬか。死刑を宣告されても、尙且つ知らざるものに類しはせぬか、併しながら死の問題には何人も眞面目に爲らざるを得ない。死は最大威力を有するからである。

憶ふに、死は早晩の問題であつて、何時かは免れ難い。諸行無常是生滅法、誰かは其の範圍を脫却し得べき。何故ならば死は必然の到來であるからである。だから死の心配よりか、我が本分は何か、人間の眞價は如何と究め去り究め來れ。然らば免る可からざる死の來るは來るに任せて、電光影裡春風を斬る底の大襟度も生じ、其處に人生の大活躍は試みられ、眞意義は果されん。爰に至つて吾人は眞の愉快を感ずるのである。

▼金錢に何んの威力がある

抑も人は何故に生存するかとの問ひに對し、甲答へて曰く

『働く爲めに』

と。然らば

『何故に働くか？』

と問ふに、

『金錢を得んが爲めに働く』

と答ふ。愚なる哉金錢に何んの威力がある。金錢にて長命し得べきか、將た安心し得べきか、否な之れが爲めに父子兄弟も爭論し、殺害する。明教大師は

『利は夫れ亂の本か』

と道破せられた。彼の守錢奴と爲りて齷齪せんよりは、清貧にして安樂なるに孰れぞや。京都五條橋下を家とする父子の乞食があつた。時は臘月三十日の大晦日で、橋上は往さ來るさの大混雜で、人の足は空を飛ぶやうな折柄、提燈提げた一町人は西の方から、そして兩刀を帶した立派な武士は東の方から來て、橋上で礑と出會ふた。ところが町人は此武士に貸金があつて、其の返却が延引してゐたから、嚴しく催促した。武士は平身低頭して延期の追願を乞ふたが、人の上位にある武士として其の狀の見苦しさといふたらなかつた。其の時橋下の乞食の子が言ふには、父よ世人は斯くの如きであるのに、吾等は洵に安樂であると。父は其の安樂は誰れの御蔭と思ふか、親の恩だと忘るゝなと言ふたさうであるが、何んと面白いではないか。見よ天下取つても盥で飯は喰へず、起つて半疊、寢て一疊に過ぎない。其の上に一物を增せば、一累を增す道理である。けれども敢て消極に安んじて、金錢を無用視し、衣食住等を非認するのではない、唯囚はるゝ勿れ、最終の目的物にあらずと誡むるのみである。

又問ふ、

『何んの爲めに働くか？』

乙答へて言ふ、

『名譽の爲めである』

と。

名譽も向上發展の鼓舞策としては必要であらう。けれども位人臣を極むる人でも、出入に護衛

を付けて尙ほ危險なことがあると聞くが、農工商などに免職の惧れや、ピストルの心配が何處にあるか。併しながら誤る勿れ、金錢を儲けやうとか、偉人に爲らうとすると、多少の無理と誤解とを招くが、儲かつた金なら、百億圓尙ほ辭せず、天下の財寶も敢て多しとせず、偉人と爲つたのなら總理大臣は愚か大統領も過ぎたりとせぬ、何故ぞ、宇宙の眞理自然の大道であればである。畢竟するに金錢の多少、身分の高下、名譽の有無等も關するところ大なれど、根本は主人公の確否に因つて決する。望むべくんば精神と物質との兩全にあれど、已むを得ずんば、名利より寧ろ主人公の確立こそ最尊最貴である。世の名譽利益といふのは、小兒が一箇の饅頭を爭ふに異らぬのである。飜つて饅頭屋の店頭には、山程も積んである、無盡藏の主人公を確得するならば、他物は輻輳するであらう。

▼働く爲めに働くに限る

重ねて問ふ、

『何んの爲めに働くか？』

丙答へて言ふ、

『働く爲めに働くのである』

と。最も然り、働く爲めに働けば、一點の汚穢なく、其の事業は親切であり、其の心事は皎潔である。我れに於て疚しからず、人以て妬まず、八面玲瓏であり、十方無礙である。古人も

此秋は雨か風かは知らねども
今日の務めに田草取るなり

と歌はれ、又正受老人も『其の日ぐらし』といふのを書いて、今日唯今の仕事を疎略にせぬやうに誡められた。來ん秋の風雨旱濕は拘はるところにあらず、草取るべき時に草を取り、耕すべき時に耕すに外ならぬ。利害得失毀譽褒貶に關せず、全力を注いで奮鬪し、我が爲すべきことを爲すならば、其處に娑婆即寂光淨土、凡身即佛身の境界が現ずる、換言すれば隨處爲主立處皆眞で、行くとして可ならざるなく、爲して是ならざるはない、結果や果報は期待せずして、好運は來り、福德は得らるゝ。這裡に宗意安心は包含せられてある。

畢竟するに社會日常の出來事は、主人公の影坊子に過ぎないのに、其の影坊子を主人公と誤認して拘泥するから、無意味な人生を送らねばならぬやうに爲る。瑞巖和尙の親切は、爰に主人公と爲つて現はれた。願はくば主人公を獲得せよ。主人公の働くところに人生の眞意義がある、主人公の勇躍するところに、天地宇宙が隨順し、歸向し、靈動する、即ち天地と共に起き、宇宙と共に臥するのである。人生の快事も爰に至りて極れりと言ふべきである。

◇那個本來の面目

▼禪の有難いところ

往々人は口を開いて言ふ、

『私は常に多忙しいから、宗教を信ずることが能きない。宗教は坊さんが鉦を叩き、木魚を鳴らし、法衣を着て、お經を讀んでゐれば可いので、宗教は閑人が仕方なしに義太夫を聞きに往くか、謠曲でも唸るといふ意味で信ずるもので、多忙しいものは、宗教を信ずる必要がない』

と。之れは甚だ間違つた言ひ事であつて、宗教は其麼ものではない、多忙しい人程、宗教的の興味を以て心を休めるのが可いのである。

宗教といふものは、決して吾々僧侶の玩具ではない。若し佛教なるものが、吾々僧侶の玩弄物であり、吾々僧侶が生活の費用を集める爲めの佛教であるといふならば、疾く之れを廢滅して了ふが可い。ところが然うでない。社會の人達が之れに由つて力を得、之れに由つて興味あり、趣味ある生活をして居るので、世の中に宗教なるものは是非なくてならぬものである。

學者でも、隨分座禪をやつてゐられる人があるが、衲は先づ近重博士のやうな座禪をして貰ひたいと思ふ。先年或る博士と、電軍の中で一緒に爲つた。博士曰く、

『僕は十何年振で、近重博士の所へ行つたところが、頭から痛棒を喰はされた。君は一體物をやる氣でやるからセカ〳〵して、コセついて不可ない。ものは遣る氣で遣つては不可ぬなどゝ、友人の間柄だけに、遠慮なく言はれた』

と大笑ひをされた。又其の博士曰く、

『僕は座禪を遣つて見たいやうな氣がするが、實は峨山老師の臨濟錄の提唱を聞いたことがある。臨濟和尙といふのは、あんな和尙か知らといふやうな感じがした。什麼も座禪を遣るなら、確乎遣らなければ駄目だと思つたことがある』

と。其處で衲が答へて、

『貴方がたは、これは遣らぬ方が宜しい。座禪を遣ると、唯さへ貴方のやうな我慢の强い人は、一層我慢强く爲るから』

と言ふたら、

『嘉納先生でも然う言つてゐる。高等學校時代に柔道を遣りたいと先生に言つたら、お前のやうな我慢の强い者が柔道を遣つたら、甚麼ものに爲るかも知れないと言はれた。近頃座禪を遣りたいが、遣らずに置く』

と其の博士は言つて笑はれた。

什麼も座禪を遣ると、之れと似たやうなことに爲つて來る。ところで此禪といふものは、唯難かしいものといふことに、一般の人が考へてゐるやうだから、衲は又出來得るだけ、解り易く話をして見やうと思ふ。衲のやうな話をしたら、往時の頑固な禪僧は、頭を叩くかも知れぬが、水を飲んで、冷暖を自知するといふならば、何處まで饒舌つたからと言つても、水を飲まぬ人に分る筈はない。結局水を飲んで、冷暖自知と言はゞ、非常に宜しいから、大和尙と爲つて氣張り込む時に、

『和尙さん、禪宗のお悟りとは、甚麼ものでありますか?』

『水を飲んで冷暖自知だ』

『水は何處にありますか?』

『水を飲んで冷暖自知だ』

水は何處にあるものかといふ位は敎へても可からう。白隱禪師以後――中興以後といふものは、吾が禪門は、其の弊害に陷つてゐる。餘程然ういふ弊害に陷つてゐる。

『私は禪を遣つて見たら什麼でございませう?』

『水を飲んで冷暖自知だ』

これでは詰らぬ。水は水道の栓を捻ぢれば出るとか、何處其處には味の好い清水が湧いてゐるから、それをコップに注いで、そして口へ持つて行つて飲んで見るといふ迄は言へるだらうと思ふ。

『水は何處にあるか？』

『水を飲んで冷暖自知だ』

『堀抜井戸にありませうか？』

『水を飲んで冷暖自知だ』

恁ういふ弊害が往々ある。衲は水といふものは、水道の栓を捻つて、逆り出る水をコップに受けて、飲みさへすれば、其の水の冷暖は分る。若しくば堀抜きを堀つて見たならば、甚麽所でも水が出る、井戸を汲んだならば水が出る、それを飲んで見るはお前の力だ。恁う言ふ工合であるぞと言ふところまでは、指圖をしても差閊ないものであらうといふ自信を有つてゐる。

難かしいといへば、此位難かしいものはないけれども、解り易いといへば、此位解り易いことはない。これは決して大學者でなければ、悟りが開けんだの、何も知らないから遺れんのといふものではない。若し大學者でなければ、座禪が能きぬといふならば、それ程座禪が難かしいものであるならば、座禪程世の中に厄介なものはない。これは甚麽大學者でも能きぬと言へば能きぬし、能きると言へば、一文不知の輩にでも能きる。此處が即ち禪の有難いところだと衲は思ふ。

▽眞理は唯一つ

禪宗は難かしくて、南無阿彌陀佛が容易いと能く言ふが、南無阿彌陀佛といふのが何んで容易いか、南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經などゝ、何も考へずに容易さうに言ふから、容易さうに思つてゐるけれども、何處が容易い、南無阿彌陀佛と言つて、解つたやうな顏をして居るが、其の實解つてゐるのではない。南無阿彌陀佛とは甚麽ものであるか、南無妙法蓮華經とは、什麽いふ意味であるか、本當のことは解つて居りはしない。禪宗が難かしいと言ふけれども、南無阿彌陀佛でさへ、本當に解つて居るものはない。言ひ易いから、南無阿彌陀佛といふが、實際は解つて

居らない。それだのに南無阿彌陀佛は解り易い、禪宗は隻手の音といつて、却々難かしいなどゝ言つてゐる。碧巖に『一處通ずれば、千處萬處一時に通る』と言ふことがあるが、南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經又は基督教の神といふものゝ本體が、本當に解つたならば、『那箇や是れ本來の面目』といふ位は、朝飯前に解る筈である。基督教の牧師で、神を見たといふ力で、本來の面目が解らなかつたら、それは本當の神を見た人ではない。妄想をかいたに過ぎぬ。神を見たの、神に御目に懸つたのと言ふけれども、さて神様は、甚麼顔付をして居らるゝかと訊いたら、何んと言ふか。油繪に描いた雲のやうな形をして居るといふやうなことを言ふ。結局それは妄想をかいてゐるのぢや。眞に此本來の面目が解つて、始めて基督教の神が解つて來る。基督教の神が解つたら、本來の面目が解らぬことはない。神の本體が解つたならば、南無阿彌陀佛の本體が解らぬことはない。南無阿彌陀佛が解つたならば、南無妙法蓮華經の解らぬことはない。南無妙法蓮華經が解つたならば、南無遍照金剛の解らぬことはない。何れから來ても、眞理は一つに極つてゐる。符牒が違ふのに過ぎぬ。

▼住する所なくして其心を生ず

『本來の面目』といふことに就いて話すが、これは達磨大師から六代目の慧能大鑑禪師が唱へ出された言葉である。生花や繪畫などでも、誰れそれの衣鉢を繼いだといふ事があつて、繪畫に南畫北畫といふことを言ふが、これは矢張六祖大師から出たことである。此六代目の祖師に爲られた慧能大鑑といふ方は、最初は俗人であつた。皆生れながら坊主といふものはない。生れながらの坊さんは、門徒宗のお上人さんばかりで、最初は皆俗人に違ひないが、此慧能大鑑禪師は字を一字も知らぬお方であつた。ところが始終金剛經を敎へて貰つて、往來を讀んで歩行かれた。大變親孝行なお方で瞬時も金剛經を手離さず、用事があつて何處かへ行くにしても、歩行きながら讀まれた。それで此經文にあるところの『應に住するところなくして而かも其の心を生ずべし』といふ言葉に由つて、豁然として大悟された。心が何物にか執着して居れば、聞けども聞えず、見れども見えず、何物にも住する所なくして其の心を生ずる、即ち本來無一物に爲つて居れば、アッと言へばアッと聞え、カタンと音がすればカタンと聞える。何等の執着も持たぬ。即ち應に

住するところなくして、其の場其の場で其の心を生じて來る。道元禪師が此意味をば、恁ういふ工合に和歌に詠まれてゐる。

水鳥の行くもかへるも跡絶えて
　されども道は忘れざりけり

應に住するところなくして而かも其の心を生ずべし。却々味ひのある言葉である。これは常に道場で、參禪をして、禪といふものを味はつて見なければ、鳥渡解り難いがこれを能きるだけ、解り易く說明して見やう。

『應に住するところなくして而かも其の心を生ずべし』と言ふのであるから、衲が恁うして話をして居ると、それを聞かうといふことを意識して聞いてゐる。ところが彼方で妙な老爺の聲がする、ヤーとかハーとか言ふ聲が聞える。それが衲の話を聞きながらも、彼方で言ふてゐる話聲を、矢張聞かうと意識せずして聞いてゐる。ポンと手を叩けば、叩くといふことを別段見るのでなく、叩く音を聞かうと思はずに、矢張無意識で聞いてゐる。衲の話を聞いてゐながら、衲の法衣が黑いとか鼠色をしてゐるとか、手に珠數を持つてゐるといふことは、別に見やうと意識せずして、矢張其の心を生じてゐる。譬へば話を聞いて居りながら、頭に塵がかゝると、頭から『鳥渡拂つてくれ賴むぜ』と言つて來ないでも、手はちやあんと應に住するところなくして、而かも其の心を生ずで、頭に手を遣つて塵を拂ふ。腹が空ると食堂へ行く、今箸を持つた。椀を持つた。それから食物を口へ入れた、咽喉を通る。化學作用に由り、血液が循環したといふことを考へて居る譯でなくして、ムシヤ〳〵と遣る。即ち應に住するところなくして茶漬を浚ひ込む。甚麼に慌てゝ喰つても、鼻へ飯を入れる人もなければ、襟の中へ茶漬を入れる人もない。便所へ行くにしても、どちらの足を何う跨がねば、禮式に適はぬといふのではない。出て來ると無意識に手を洗ふ、應に住するところなくして手を拭いてゐる。斯くの如く三度の食事を無意識にして、何等の粗忽を仕出かさず、便所に行つても無意識に用を便じて、平氣でゐるが如く、親に對し、君に對し、商業の上に於いて一生懸命に遣る。三度の飯を喰ふに困つたといふ人があるものではない。晝飯を喰ふ、困つたといふ人はない。又便所へ行きたい、困つたといふ人はない。天下の一大事

といふ程の一國の興亡に關するやうな大問題に出會つても、腹の空いた時に、食堂に行くが如く、何等住する所なくして其の心を生ずべしぢや。『水鳥の行くもかへるも跡絶えて、されども道は忘れざりけり』ぢや。

船に乘つて何處かへ行く場合、何時頃目的地へ着くだらうか。そんな心配は無駄なことである。船が覆へらうと、暗礁に乘り上げやうと、何時頃目的地へ着かうと、それは船長や、機關長に一任して置けば可いではないか。自分一人クヨ〳〵心配しても仕方がない。汽車に乘つてから、衝突することはないか知ら、そんな心配をしても何んにもならぬ。乘つた以上、機關士に任せなければならぬ。自分が儲かると思つて遣つた仕事が、狙ひが外れて損をしても、それは仕方がない。少し位儲かつたとて、どれだけ信用が高く爲るものか、恁ういふ調子で、毎日事を遣つて行けば可い。即ち斯くの如き意味である。此一語に依つて慧能大鑑禪師は、豁然として大悟された。それから五祖弘忍大滿禪師の所へ行かれた。其の時は七百人からの雲水僧が居つたといふことぢやが、此間の話をすると、本來無一物の妄想をかいた話をしなければならぬ。

▼超越的な意味の偈示

本來無一物といふ偈示をかゝれた爲めに、『菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃』といふ偈示が所謂禪宗である。今傳はつてゐるところの禪宗である。それから『身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃』といふのが神秀禪師の偈示で、此人は後北宗の宗祖と爲られた。七百人の雲衲がゐたけれども、弘忍大滿禪師の氣に入る偈示を書く人はなく、神秀禪師唯一人が、身は是れ菩提樹、心は明鏡の臺の如し、惜しい、欲しい、憎い、可愛の煩惱妄想を抖擻しなければならぬといふ意味の偈示を書いた。『六祖法寶檀經』を見ると、『衲が理會した眞理に對する觀念は、恁うでございます』と言つて、弘忍大滿禪師の前へ持つて行つて、若し恥をかゝせられては詰らぬからと此偈示を書いて、內密で廊下へ貼つた。そして剝いでは又貼つたりしたけれども、什麼考へても、外にないものだから、それを書いて置いた。外の雲衲は、皆神秀に讓つて了つて、誰れ一人書く者もなかつた。釋迦如來から傳へられたところの金襴の袈裟と鐵鉢（これを衣鉢といふ）此衣鉢を傳へる

ものは神秀の外になからうと信じてゐた。すると『應に住する所無くして而かも其の心を生ずべし』といふ金剛經の一語に由つて豁然として大悟した六祖大師即ち慧能大鑑が、米搗小屋で米を搗いて居つた。能く此處を繪に描いてゐるが、此人は身體が小さかつたから、腰に石を附けて米を搗いた。其處へ外の坊さんが來て『身は是れ菩提樹、心は明鏡の臺の如し、時々勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れ』と神秀の偈示を讀んだ。すると之れを聞いて居つた慧能は、

『それは一體誰れが書かれましたか？』

と問ふと、

『お前のやうな無學なものが聞いたつて、解るものか』

と恬で莫迦に爲切つて相手にしない。でも慧能は熱心に、

『是非聞かせて下さい』

『それ程に賴むなら聞かせるが、これは神秀と言つて、吾々七百人の雲水僧の頭をして居る人の偈示だ。什麼だ解るかい。此偈示で、釋迦如來から傳はつてゐる衣鉢を御受けになるのだ。お前達が聞いても解るものではない』

と言つた。

すると、目に一丁字ないといふ魯鈍な慧能が、

『それぢや私も、それと同じやうなことを作つたから、御面倒ぢやが、鳥渡書いて下さらぬか』

と、字を知らぬものだから、其の坊さんに書いてくれと賴んだ。

『どうせ不足言ぬことだらう』

『でも是非書いて下さい』

『それぢや書いて遣るから、何んとでも言つて見ろ』

其處で書いて貰つたのが『菩提本樹無し、明鏡亦臺に非ず』の偈示であつた。菩提といふものは樹のやうなものでない。心といふものは鏡のやうなもので什麼するか、心は元來そんなものでない。本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん、心があれば曇りが來るだらう。樹でもなければ鏡でもない、本來無一物だから、惜しい、欲しい、憎い、可愛もないではないか。恁ういふ超越

的な意味の偈示ぢや。

書いてくれと頼まれた坊さんは、何んだか理由が解らずに書いた。

『これを彼處に貼つて置いて貰ひたい』

『莫迦ッ、這麼ものが何に爲る』

『イヤ是非貼つて置いて貰ひたい』

『貴樣は物好きな男だなあ』

と呆れて了つた。

▲禪機を完ふする所以

話は種々に爲るけれども、學問がなくつても、這麼偈示は言はれる。恁ういふ壁語が難かしく思へるのは、それは日本人の眼からである。これは支那人平生の言葉で、支那人に取つては、別段難かしくはない。作麼生とか恁麼などいふことは、禪の問答に能く出る言葉で、如何にも難かしさうであるが、文字を知らぬ支那人でも、這麼ことは平生言つてゐる。作麼生といふから難か

しいので、『どうぢや』と言へば何んでもない。これは元來『どうぢや』と言ふことである。皆大抵そんなものである。で然ういふ工合に、『本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん』といふのも、然う難かしいことではなく、超越した意味を持つてゐることが解るであらう。

或る老爺が、娘を嫁に遣る時に恁う言つた。

『汝嫁して、愼んで善きことを爲す勿れ』

と。娘は此意外の言葉に驚いて、

『嫁入つた先きで、善いことをするなと仰有るならば、惡るいことをするのでありますか?』

と言つたら、其の父嚴然として曰く、

『善すら尙ほ爲すこと勿れ、況んや不善に於てをや』

善いことすら爲すなと言ふのだから、況んや惡るいことに於てをやだ。況んや煩惱をや。極樂さへ覓めない、況んや地獄をや。恁う行かなけりや嘘ぢや。『本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん』恁ういふ調子に行けば、煩惱することはない。善いことを爲て褒められやうと思ふと、褒

めてくれなければ落膽する。けれども愼んで善を爲すこと勿れ、況んや不善に於てをや。これ禪機を完ふする所以なりといふ訓戒であるが、鳥渡した善いことでも、愼んで遣らうと思ふと、然ういふことに爲つて來る。此說明は此位にして置いて、さて五祖弘忍大滿禪師が、廊下へ來て見られると、二つ貼つてあるから、

『これは誰れが書いたか？』

『それは神秀和尙が書かれました』

『其次のは誰れぢや？』

『米搗きでございます』

『然うか』

と弘忍大滿禪師は言つて、其場では知らぬ顏をして居られた。

『六祖法寶檀經』を見ると、禪師が米搗き小屋へ往つて、

『米は搗けたか？』

と言はれると、

『未だ搗き上りませぬ』

と答へると、禪師は何んとも言はずに、臼を三遍叩かれた。恁う書いてある。これは態と神秘的に書いてあるものであらうが、實際然ういふ譯ではなかつたらう。

『今夜三更に來い』

鐘が三つ鳴つた時分、即ち皆寢靜まつた頃に忍んで來い。外の奴に見られると、蒼蠅いから、密に來いといふことであらう。それを臼を三遍叩かれたのは、三更に來いといふことぢやと言ふてゐるが、それは餘り氣が利き過ぎてゐる。それから夜の三更に、弘忍大滿禪師の部屋へ忍んで行くと、禪師が言はれたには、

『汝は衲が意に適つた。實に本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん。釋尊の御精神といふものは、全く此本來無一物といふ所にある。此金襴の袈裟と鐵鉢とは、汝が本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんといふ、これ實に釋尊より以心傳心、正法眼藏、微妙法門を傳へられた其の原理

が解つたのだから、其の證據として汝に與へる。外の者は皆頭は圓くても、心は四角な奴が多いのだから、俗人の汝が、外の坊主達を出し抜いて、衲から此衣鉢を傳へられたとあつては、物議を起すに相違ないから、今の内に遁げて行け、精出して釋尊から傳へられた所の正法眼藏の法門を後世に傳へてくれよ。』

此親切なる禪師の囑を受けて、米搗きの魯鈍者は、釋尊から傳へられたところの衣鉢を受け、人目を忍んで其場を遁げた。

▽力を以て爭ふべけんや

翌朝に爲ると、誰れが全體衣鉢を受けた。誰れもない。神秀和尚も受けてゐない。昨夜の中に米搗が居らぬやうになつた所を見ると、彼奴が貰つて行つたに相違ない。俗人の分際で、吾々を出し抜いて、釋尊より傳へられた法を授かるとは怪しからぬと言ふので、八方に手を廻はして、何んでも彼の米搗きを捕へて來て、衣鉢を取り返さねばならぬといふことに爲つた。

弘忍大滿禪師の所に、明上座といふ僧がゐたが、此明上座が、其の時大庾嶺の方へ行くと、米搗の魯鈍者が、禪師から授かつた袈裟と鐵鉢とを風呂敷に包んで背負ひ、向ふの方へ行くのを見た。明上座は身の丈七尺もあらうといふ大男で、從つて腕力も強かつたが、それに引き代へ米搗は小男であつた。捕まつたら最後、迚も腕力の抵抗は能きなかつた。

明上座は、蹤から逐ひ駈けて、

『こら貴樣は呆しからぬ奴ぢや。神秀和尚が受くべき釋尊から傳はつた大切な衣鉢を、貴樣如き、無學文盲の俗人に取られては、吾々の面目に拘はる。素直にそれを返せ』

と言つて迫つて來た。

然ういふ大男に迫られたのであるから、どうせ敵對は能きない。其處で米搗の魯鈍者は、突然風呂敷に包んであつた衣鉢を、傍の盤石の上に捨てゝ言ふには、

『此衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや』

と。これも一番汗を絞つて見ないことには、眞の味は解らぬ。此袈裟といふものは、信仰の力を表してゐる。威力、腕力を以て、爭ふべきものでない。お前さんが、之れを欲しいと言ふなら、

勝手に御持ちなさい。威力で持ち歸れると思ふなら、持つて見るが可い。其處で明上座は得たり賢しと、取らうとすると、何んぞ圖らん、盤石の如くにして持ち上らなかつたといふ事である。

其麼莫迦なことがあるものかといふ人があるに相違ない。什麼して之れが持ち上らなかつたか、『此衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや』と云ふ此言葉に、力を添へて見たら、什麼しても持ち上げることは不可能である。

『あんな小ッぽけな、經驗も何もない奴が、大學を卒業して威張つて居やがる、呆しからぬ奴だ。貴樣卒業證書を寄越せ。』

と言つて、奪つて見たところで、何んにもならぬ。これは『信を表す、力を以て爭ふべけんや。』此一語といふものは、全く嚙めば嚙む程味ひのある面白い語である。銘々水を飲んで、冷暖自知すべき妙味のある言葉である。白隱禪師は、能く鐵鉢を描いて力を以て爭ふ可からずと讃をして居るが、實に味ひのある言葉である。實際人間は唯此誠心誠意――誠を以て行く時には、甚麼にしても此誠を奪はうとしても、奪ふことは能きない。『此衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや。』

それ程難かしい事でも何んでもない、扇子の骨は赤い、赤いことは誠だ。如何なる大學者が見て、それを黑いといつても、黑に爲る譯はない。幾ら口の先きで、赤を黑と言つても、赤は矢張り赤である。力を以て誠の赤を黑くする事は能きない。『此衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや』

大盤石の如く動かなかつたといふのは、什麼して動かなかつたか、之れに關しては却々面白い公案もある。

太宗皇帝が或る時、鉢の木を持つて來て、鳥渡斷つて置くが、此鉢の木は、六祖慧能大鑑禪師が授けられた袈裟や鐵鉢に、何等關係はなかつたが、忠國師が參內した時に示して、

『忠國師、これは大庾嶺で、明上座があるだけの力を出して、取らうとしたが、什麼しても持ち上げることの能きなかつた鐵鉢だが、これ此通り、掌の中に入つてゐるが什麼ぢや？』

と言つた。すると國師曰く、

『それは什麼も、貴方は豪いお力でございます。貴方でなければ、それは迚も手に持たれませぬ。四百餘州を治めて行く貴方なればこそ、恁く輕く持たれるのであります。』

と、實に可い挨拶をしたものぢや。これは餘計なことであるが、這麼話もあるといふことを示したまでぢや。

さて明上座は、米搗きの魯鈍者から一本參つて、大に恥を知つたのである。此恥を知るといふことは大切である。衲が峨山老師の侍者をしてゐた時ぢや、或る人が『知恥』の二字を書いて戴きたいといふ注文であつたから、其の事を老師に言ふと、峨山老師は、『人間の顏をしてゐながら、恥を知るといふのは何事ぢや。人間の顏をしてゐるのが、既に恥を知るといふことぢや、人間の顏をして居つて、恥を知らぬやうでは駄目ぢや。禪宗の修行は外でない、恥を知る修行である。』と言はれた。實際然うである。禪學々々といふけれども、眞の禪學といふものは、總て恥を知る所の勤めである。全く此恥を知るといふところに味ひがある。

▼修行する程恥を知る

衲は、此峨山老師に丁度前後十年餘り厄介に爲つてゐて、居眠り半分に御經を讀んでは叱られたり、托鉢に行つたりして世話に爲つたが、盲蛇ものに怖ぢずで、二十歳や二十一の生意氣盛りには、程々な知つたか振りをして、話をしても、唯『然っぢや〳〵』と言つて居られたが、さて八年九年參禪をして、頭を叩かれ、小言を言はれて後を振り返つて見ると、成程坐禪の修行は、恥を知る修行だと言はれたが、能くあんな不足言ぬ駄法螺を吹いて、張り倒されなかつたことやら、至當らしい顏付をして、能くあんな生意氣なことが言へたものだと、全く慚愧に堪へぬことが愈々ある。

眞宗の坊さんは、八歳位の時から、說敎をやらされる。口傳へに說敎を遣らされるので、丁度小學校の一二年の生徒が、話方をやるやうなものであるが、聞いてゐると時々可笑しいことがある。『私の若い時には……』など丶遣る、衲ども丶實際然うであつた。盲蛇ものに怖ぢずで、隨分饒舌つたが、能く叱られなかつた。一年修行すれば一年恥を知り、二年修行すれば、二年恥を知る。此の餘計恥を知つた人が、本當に修行の出來た人である。

明上座といふ人は、全く豪かつた。『此衣は信を表す、力を以て爭ふべけんや。』といふ所で、ブル〳〵慄へ上つた。此一言で以て恥を知つたのである。其處で明上座が、

『衲が遙々此處へ來たのは、鐵鉢や袈裟が欲しくて來たのではない。法を求むる爲めであります。願はくば衲が爲めに、其の道を開き、其の道を示し給へ。』

と懺悔したといふことである。

其時、六祖大師が言はれた。

『善をも思はず、惡をも思はず、生與麼の時、何箇か是れ明上座が本來の面目』と。善をも思はず、惡をも思はぬ時、明上座お前の本來の面魂は、甚麼面をしてゐるかといふ意味である。恁う言ふと、惘然したやうな面附をしたのを『本來の面目』といふ人もあるが、それこそ毆打つて遣れ。善をも思はず、惡をも思はず、明上座本來の面目、爰に於て、唯此一言で以て、明上座は豁然と悟つた。そして懺悔の涙に咽んだのであつた。

で、此の本來の面目といふことは、此時から起つたのである。これ以來本來の面目といふことが、世間の人の耳に入つて來た。そして禪道を修行しやうといふには、本來の面目―、恁ういふ最初の公案に由つて、其の問題に入る人もあり、又は雙手の聲といつて入つて來る人もあり、種々である。

▼本來の面目中に活動する

此の『本來の面目』であるが、これは宗旨專門のことゝして、衲が何處まで說明しても、それは思ふ樣に行かんで、矢張り水を飲んで、冷暖自知しなければならぬけれども、坐禪を爲ないでも、『本來の面目』は、必ず持つてゐるものである。僕は禪學は嫌ひだといふやうな人でも、『本來の面目』のない人はない。皆此の中に活動してゐるのである。其處で、これは寧ろ『本來の眞面目』と言つた方が、通俗の話として解り易からう。『本來の眞面目』、言ひ換へれば『本來のマジメ』、眞面目といふことは、矢張り善をも思はず、惡をも思はずでなければならぬ。苟くも眞面目といふ限りは、喜怒哀樂の情があつては不可ぬ。それが露はれて居つては、最早眞面目といふことは能きぬ。善をも思はず、惡をも思はぬ時、心其の儘の面魂は、どんな面をしてゐるか、什麼もこれは幾ら追究して見ても仕方がないが、此の『本來の面目』は、坐禪をするせぬのことは偖措いて、最う一つ疑ひを起して見やうと思ふと、疑ひを起す方便は幾らもある。又釋迦如來

は能く然ういふ説明を爲して居られる。恁ういふ面白い例がある。

▽結局五尺の餡袋だ

廣い野原を一人旅行をして居つた。最早日も暮れたので、今夜は何處へ泊らうかと思ひつゝ途方に暮れてゐた。すると向ふの方に窟のやうな物があるので、彼處で一夜を明かさうと其處へ入つてゐた。暫くすると、赤鬼が人間の屍體を擔いで來た。これは什麼も飛んでもない所へ入つたものだ。困つたことに爲つたと思ひながら、恐怖見てゐると、蹤から今度は青鬼が、空手で入つて來た、青鬼の言ふには、

『オイ赤鬼、貴樣は什麼も酷いぢやないか。俺が見付けた屍骸を横取りするとは呆しからぬ』

『何を言つてるのだ、俺が持つて來たのだから、俺が喰ふのが當然だ』

『其麼ことはない。俺が見付けたのだから、俺が喰ふ』

といふので、揖つた揉んだで、口論を始めた。ところが其内に妥協が整つた、青鬼が言ふには、

『赤鬼然う怒るな、怒ツたツて仕樣がない。幸ひ今夜は、此處に生きた人間が泊つてゐるから、彼奴を引ツ張り出した上、仲裁をして貰はうぢやないか、持つて來たものが喰ふのか、それとも見付けたものが喰ふか判斷して貰はう』

『それが可からう』

と話が極つて、什麼して知つたものか、小さく爲つて隱れてゐた旅人を摘み出した。

旅人は怖しさに慄へながら、

『情願生命ばかりは御助けを……』

『生命を取る取らぬよりか、先づ貴樣に仲裁をして貰はなくツちやならない。此の屍體は俺が今夜拾つて來たから、俺が喰はうと思つたところ、青鬼がそれは俺が最初見付けたのだから、俺が喰ふのが當然だといふのだ。これはどツちが本當だらう。見付けたものが喰ふのが當然か、拾つて持つて來たものが喰ふのが當然か、貴樣一つ判斷してくれ』

旅人は困つたけれども仕方がない。

『では捌きを付けて上げませう。それは骨折りをして擔いで來たものが喰ふこそ當然でせう、即

ち赤鬼さんが喰ふのですねえ』

と言つた。之れを聞いた青鬼が怒つたの何んのといふたらなかつた。

『矢鱈に人間なんぞに仲裁なんか頼むから、偏頗な捌きを爲やがるのだ……。可し赤鬼貴樣が死人を喰ふなら、俺は生きてる此の人間を喰ふ』

と青鬼は言ふより早く、旅人の右の腕を引ッこ抜いて、バク〳〵喰ひ出した。之れを見て赤鬼も喰ひたさうであつたが、自分に最負してくれた恩義があるので、喰ふ譯に往かなかつた。其處で、先きに拾つて來た死人の右の腕を敏捷く引ッこ抜いて、旅人に附着けて遣つた。すると旅人は附着けて貰つた右の腕が、恰も自分の手のやうに動いた。

『こりや奇態だ』

と思つてゐる内に、今度は青鬼が、旅人の左の腕を引ッこ抜いて喰つた。すると赤鬼は又死人の左の腕を附着けてくれた。旅人は一二を遣つても、附着けて貰つた腕が自由に動くので、

『これは妙だ』

と不思議がつたが、其内には身體全體を喰つて了はれるだらうと恐怖がつてゐると、今度は青鬼が右の足を引ッこ抜いて喰ふ。すると赤鬼は直ぐと、死人の右の足を取つて附着けてくれた。矢張自由に動く。續いて青鬼は左の足も喰つて了つた、又赤鬼が附着けてくれる。次に青鬼は、旅人の首を拔いた。アッといふ叫びの聲は、青鬼の口の邊りでした。赤鬼は早速死人の首を附着けてくれた。其處で旅人は考へた。

『左の腕も、右の腕も、又左の足も、右の足も、俺の四肢ではない。頭も亦然うだ。此の窟へ泊つて鬼の仲裁をした俺といふのは矢張俺だ。然うすると俺は何んだらう』

と、宛るでお伽噺のやうであるが、味ひのある面白い噺である。俺は全體何んだらう。俺、吾輩など丶威張つてゐるが、全體俺は何んだらう。本來の面目といふものは何んだらう。此の身體が本來の面目だらうか。こんなものは斬れば血が出る、飯で漸く保つてゐるに過ぎぬ。全く三度の飯の御蔭だ。貴樣は何者ぞ、俺だ。飯を五十日も喰はずに居つたら什麼ぢや。本來の面目は何か、

『本來の面目は腹が空つてなア』といふやうな話で、そりや慘めなものである。甚麼に豪らさう

な顔をして居ても、五十日も飯を喰はずにゐれば、ヘト〳〵に爲つて了ふ。『業平も飯喰ふてから燕子花』ぢや。業平が如何程風流人でも、飯を喰はずに和歌が詠める筈がない。

ひもじさと寒さと戀とくらぶれば
　耻かしながらひもじさを知る

で、腹一杯喰つてからでなければ、戀は出來ぬ。『本來の面目が何んぢや？』と言ふたら、『三度の飯ぢや!!』『汝何者ぞ？』『握飯!!』『貴様何者ぞ？』『飯櫃!!』ぢや。何んのかの萬物の靈長など〻威張つてゐるけれども、結局五尺の飯袋だ、飯袋に衣服を着せたり、羽織を着せたり、洋服で包んで見たりするのであるが、結局飯袋を包んで、鹿爪らしく固まつてゐるに過ぎない。ムカ腹を立て〻怒るのも、要するに飯のお蔭ぢや、飯を喰はなかつたら、可哀想なものである。東京の下谷から本所邊の貧乏町へ往つて見ると、飯の代りに薩摩芋を嚙つてゐる『貴様は何者か？』『薩摩芋でござる!!』で、鳥の目白よりも劣つた話ぢや。

▼誠の力は天地間に響き渡る

併しながら爰に面白いのは、吾々は飯の御蔭に違ひない。今のお伽噺のやうなのは何かと言ふたら、釋迦如來は非常に例話が上手だつたが、何故恁ういふ例を說かれたかといふに、吾々は出る息、引く息、引く息、出る息、物質變化の道理に由つて、變り通しに變つてゐる。死に通しに死んでゐるから、恁うして生きてゐるのであるといふことを示されたのである。實際、刹那消滅、無常變遷、急激なこゝをば、恁ういふお伽噺のやうに、青鬼が取つて喰ふの、赤鬼が死人をくツ附着けるのと言ふのではなくとも、三度の飯が血に爲り、肉に爲り、小便に爲り、大便に爲り、始終變り通しに變つてゐる。畢竟死に通しに死んで居る。鬼に喰はれ通しに喰はれるも同じことぢや、腕が附着いたといふと、大層なことぢやが、一口宛喰つて行くのは畢竟死んで行くのである、宛るで豚のやうなものである、早く肥えれば、早く殺されるのである。唯其の死方が餘り激しいものだから、『吾輩』などゝ言つて威張つてゐるが、『吾輩』と言ふまでには、何十遍死んで居るか分らない、刹那消滅、死方が非常に激しい、變り通しに變つてゐるから、それが分らないと言ふまでぢや。『汝何者ぞ？』多くの元素が集つてこんなものが出來てゐる、恁う爲つてゐる。

これが乃公の身體だなんて言つてゐるけれども、一遍生き返へると什麽ぢや『誰でも都合の好いやうに』といふことに爲つて了ふ。實際言へば麥飯の袋見たやうなものぢや。甚麽おいしいものを喰ふても駄目ぢや。一つの飯袋に過ぎぬ。俺の顏は白いなどゝ威張つて居ても、結局飯色である。顏色が黄でも、白でも、要するに飯の色をしてゐるのぢや、不足言ぬものである。

ところで此の飯袋は、何んの價値もないものであるが、此の飯袋の中に、呼べば應へ、褒めれば笑ひ、誹れば怒るものがある。これは飯櫃でない、これは飯でない、什麽もこれが油斷の能きぬものである。

白隱禪師が始終話されたといふことで、其のお弟子さんが書かれた法語がある。少々尾籠な話だが、それを示さう。

乃公が和尙の白隱和尙は、他處へ行くと大變長尻で、松蔭寺の前に長者があつて其の家へ殆んど毎晩のやうにお話に行かれた。主人と乃公が和尙とは、大變仲善で、話が合つたが、下女が聞いても其の話は解らぬ。ところで夜更しをして、主人と興に入つて、話をしてゐる內に、下女はお客人が歸るのを待つて、戸締りを爲なければならぬのので、寢ずに控へて居らねばならぬ。つい話が難かしいものだから、睡氣がさして、大きな身體で、山の搖るぐやうにグラリグラリと居眠りをする。その中にブーと放屁をした。そして放屁をすると目を覺まして、エヘンと咳拂ひをした。實に面白い、其處で白隱さんが言はれた。

『下女は好い心持で、何處かへ旅へ行つてゐたに違ひない。お留守で放屁をしたから、主人が戻つて來たのだらう。エヘンと咳拂ひが聞えた。ブーと放屁をしたが本物か、エヘンと咳拂ひをしたが本物か、此奴却々曲者ぢやわい』

と。實際ブーと放屁をしたのが本來の面目か、エヘンと咳拂ひをしたのが本來の面目か、實に什麽も此奴は油斷が能きない。吾々の此の身體は、物質變化の道理に依つて、始終變り通しに變つて行く、鬼に腕を喰はれ、鬼に死人の腕を附着けられるが如く、變り通しに變り、變り通しに變つて往くけれども、此のブーと放屁をする、エヘンと咳拂ひをする。何某と言へばオ、と無意識に返辭をする。腹を立てれば目に角立てゝ怒り、褒めれば莞爾と笑ふ、此の眞面目こそ、此の本

來の面目こそ、此の眞精神こそ、切れども切れず、燒けども燒けず、天地に充滿してゐるところの吾等お互の本來の面目であるとすれば、這麽身體は、三文の價値もない。實に此の身體は飯櫃であり、飯の袋であるけれども、此の飯櫃の中に居つて、呼べば應へ、毆れば彈く、これが正しい道に依つて行つて往くならば、毎日此の廣い世界に活きた歴史を書き、好い歴史を書いて、呼べば應へ、怒れば腹を立てる此の理由の分らぬ自己本來の面目なるものが、神に對し、佛に對し、俯仰天地に愧ぢざるところの行ひを遺つて往くならば、これこそ百代後に至るまで、尊重すべく、二百年の今日に至る迄、盛んな法要を勤むるやうな立派な本來の面目を發揮して、今尚多くの人に信仰せられるので、お互は此の單なる飯櫃に止まらないで、米櫃の主人公の主人公と爲つて、本來の面目を發揮して往くことが大切であらうと思ふ。叩けば首の飛ぶやうな頭を振り廻はし、突けば見えなくなるやうな目玉で本來の面目と言つたら不可ぬ。實際然ういふことから往くと、今納が、眞精神を以て本來の面目を發揮し、眞面目を發揮して、『扇子!!』と出した此の扇子は、要を解けば毀れて、何時かは朽ちて了ふけれども、『扇子!!』と出して置いた此の本來の面目ばかりは此の眞精神ばかりは、此の誠ばかりは、此の誠の力は、天地の間に響き渡つてゐるに違ひない。恁ういふと禪を行つてゐる人は、扇子を持つて來て、本來の面目爰にありなんて言ふだらうが、それは不可ぬ。

禪宗一流の禪門の意義、昔から口傳へに爲つてゐるところの禪門の本來の面目は分らなくとも、恁くの如き考へを以て、日常總ての上に從事して往つたならば、婦人に例を引くとして、三度の飯を炊くのは不足言ぬことである、毎日掃除をするのは不足言ぬことであるけれども、一遍掃除をしたといふことかける、座敷を掃除する、全く不足言ぬやうなことであるけれども、毎日障子に拂塵をは、其の翌日其處に埃がかゝつても、昨日掃除をしたといふ其の力、其の誠意といふものは、永久に朽ちぬ。昨日炊いた飯は、食ふて了つてなくなツて居つても、確に飯を炊いて食はせたといふ此の眞精神、此の誠だけは、什麽しても抹殺することは能きない。歴史家が證據不充分だからと抹殺する、第一史料にもなければ第二史料にもないからと言つても、其麽ことは問題でない。誠意を以て一擧手一投足の裡に爲して置いた力といふものは、如何なる人が抹殺しやうとしても、

抹殺することは能きない。長く〳〵光明を貽して往くものとすれば、一擧手一投足の上に於て、何んとも言へぬ強き力を以て、それに向ふことが能きるだらうと思ふ。あゝすれば詰らぬ、恁うすれば詰らぬと言ひ、此の事が濟んでから、あの事を行らうと云ふのでは不可ぬ。其場〳〵に眞精神を注ぎ、自己本來の面目を發揮して、自己の力のあらん限りを注いで往くならば、大なる間違ひはない。縱令んばあつたとしても落膽することはない。恁うすれば可かつたと女々しく追懷することは、決してない。這麼仕事は不足言ぬから、仕麼でも可い。最う些と大きい問題が起つた場合に、眞面目に爲る、眞劍に爲るといふのでは不可ぬ。甚麼小ひさいことにも本來の面目を發揮し、自己の眞精神を注ぎ、眞面目を發揮して、力のあらん限り誠意を以て、僅か半紙一枚取扱ふにも、眞精神を注いで行くといふ魂でゐて貰ひたい。これが濟んでから、僕は眞面目に爲らうといふのでは、眞面目に爲る時はない。今年はこれで可いから、來年から眞面目に行るといふのでは、終世行る時がない。實に此の眞精神を注ぐといふことは、手當り次第に眞面目に行らなければならぬ。

▼借金の中へ飛込む

先年の十二月末に、愛知縣へ往つて、樫山の常林寺といふのへ泊つた。枕頭に四ツ手の洋燈が點けてあつたが、一と眠りして眼を覺すと、何んだかブブブといふ音がするから、訝しく思ふて見ると、虻が一匹四つ手洋燈の中へ入つて、ブブブと鳴きながら、口金のところを廻つてゐた。夜通し火が點つてゐるものだから、口金は手の付けられぬ程燒けてゐる。其中をブ、、と遣つてゐる。羽を焦してはブ、、、足を燒傷してはブ、、、苦しみの世界の中へ飛び込んだのがブ、、、最う暫くしたら樂に爲るだらうブ、、、幾らブ、、言つてゐても結局駄目だと思つてゐる內に、ブーンと鳴いて死んで了つた。すると其の後から又一匹遣つて來て、ブーンと鳴いて飛び込んだ。此奴は豪い、飛び込んだ勢ひで、火の中へ入つて死んで了つた。苦しいと思ふ暇がないと、納は覺えず首を擡げた。時は維正に師走の二十五日、人間といふ大きな虻も其の通り、ア、一月にあんな衣物を買はずに置けば可かつたブ、、、、二月にあんな立派な帶を買つたのが惡るかつた。試驗前に遊んで落第するよりか、始めから勉强して置けば可かつたにブ、、、什麼も急に忙し

く爲つて困つたブ、、、と言つて焦躁つてゐる。學生ならば、

『なあに僕は一と月位學校を休んでも構はない。友人のノートを借れば大丈夫だ』

と言つてゐたのが、試驗前に爲つてブ、、、、世帶を持つてゐる人ならば、年度末にブ、、、、今年は仕方がないが、來年は樂に爲るだらうブ、、、、何時までもブ、、、言つて苦しまねばならぬ。四つ手の洋燈に飛び込んだ奴が、結局ブ、、で死んで了ふ。それよりか火の中へ一氣に飛び込んで了つた方が可いではないか。借金なら借金の中へ飛び込む、借金の言譯が厭やだと言つてブ、、言ふよりか、裸に爲つて謝りに往けば、未だしも早く話が濟む。謝りもせず大きな面をして世間體を繕つて往かうとするから、四ッ手洋燈の中をブ、、廻るやうなもので、彼方此方から苦しめられる。今日は寒いからと炬燵へ入ると、出る時がない。寒ければ素裸に爲つて、水の中へ飛び込むと、暫くの内に暖く爲る。今日は暑いからと言つて涼しいところを撰んで歩くと却て暑い。暑いのを辛抱して、燒瓦の上に坐つて見る。暑い所にゐれば、却つて涼風一陣涼しさを感ずる。けれども今日は寒いからブ、、言つて炬燵へ入る。今日は暑いからと言つて怠惰ける。春は花が咲いてブ、、、、秋は紅葉でブ、、、、これでは年が年中ブブブ言つて居なければならぬ。萬物の靈長ともあるものが、四ッ手の洋燈の中へ飛び込んだ、二度目に飛び込んだ虻にも劣るやうでは、迚も本來の面目どころではない。最う少し先へ行つたら、本來の面目を發揮する、本來の面目は來年からといふよりは、今日唯今から發揮することに爲たら、日常萬事の上が愉快に行けるのである。

▽扇子に對しても恥かしい

小學校の修身教科書にも掲げてあるが、納は若狹の有名な子守綱女の墓に參詣して、其時深く感動した。修身教科書には、綱女を十五歳位に書いてあるやうだが、附近の古老の談によると十三歳位であつたといふことである。漁師の女で、教育も何もなかつたが、此の綱女が松見武太夫といふ庄屋の家へ、子守奉公に往く時、其の母親が、

『松見樣の御子樣に怪我をさせぬやう、大切にお守りを爲なければならぬぞ』

と懇々言ひ聞かせた。十三歳位で何等教育のなかつた綱女は、母親から言はれた此の一言を能く

守り、義賢といふ五歳に爲る男の子の守りをしてゐた。半年程經過してからのこと、綱女は義賢の手を引き、山を越えて使ひに往つた、(教科書には遊んでゐたとしてあるが、古老の談では使ひに往つたといふことである)。その頃病犬が出て、人を嚙むといふ噂であつたが、果して其の病犬が唸りながら現はれた。綱女は縱令自分は嚙みつかれても、大切な義賢に怪我をさせては濟まぬと思ふたから、其の身代りに爲つて、自分の足を出し、手を出し爲て、二十何ケ所嚙まれた。其處へ通りかゝつた人があつて病犬を撲殺して、二人を救ふた。義賢は擦疵一つなかつたが、綱女は二十幾ケ所の重傷を負ふてゐたので、戸板に載せられて松見の家へ運ばれた。此の女にして此の母ありで、綱女の母親が下賤の者に似合はず、豪い婦人であつた。早速松見の家へ見舞に來て言ふには、

『女が飛んだ御心配を掛けまして恐れ入ります。坊様の御身體には御怪我はございませんでしたか？』

『いや〳〵坊は、綱の働きで擦疵一つ負はなかつたが、綱に酷い傷を負はせたのは、何とも氣の毒ぢや』

『什麼致しまして、御守に上つてゐて、坊様にお怪我をさせたとあつては濟みませぬけれど、お怪我をさせずに、自分が御身代りと爲つて、嚙みつかれたら、これ程嬉しい事はございませぬ』

と母親は健氣にも言つた。松見夫婦は、母親の心根にも深く感じ、醫者を幾人も呼び、出費を厭はず、あらゆる療法を加へたけれども、其の甲斐もなく、生命危篤に陷つたが譫言にも、義賢の事を言ふので、聞く者、綱女の主思ひの眞心に感じて泣いた。これが目に一丁字ない無教育の未だ十三歳の少女である。松見夫婦もそれを聞いて涙に咽んだ。愈々臨終といふ時、義賢に禮服を着せて、綱女の枕頭に座らせた。義賢が、

『綱や、切ないか？』

と言ふと、綱女は目を開いて見て、夢現の間も忘れることの能きない義賢が、禮服を着て、枕邊に座つてゐたから、其の歡びといふたらなかつた。義賢の手を取つて吾が額へ當て、

『坊様、情願お父さんやお母さんの言ふことを肯き、怪我を爲ないやうにして、大きく爲つて下

さい。妾は今死にましても、坊様のお守をして居りますから』

と言ひながら、莞爾笑つて瞑目した。

此の事を領主酒井若狭守が聞いて、身分は賤しい漁師の女で、而かも十三歳の少女でありながら、主人の子供の爲めに身代りと爲つて一命を捨てたとは、何んといふ感心な娘か、吾が領分から斯る忠義者を出したのは、酒井藩の名譽であるとて、自ら筆を執つて『忠烈綱女之墓』と書き、そして名ある人に碑文を書かせ、高さ六尺餘りの立派な碑が、其の墓に立てられ、三日三晩の間各宗の僧侶を招いて、懇に供養し、後に至るまで香華の絶えぬやうにといふので、其の親は生涯免租にするといふ墨付を下付された。今では若狭の教育會で、之れを保存することに爲つて、玉垣抔が作られてあるし、先年松平侯が來られて、其の當時の彼女の健氣さを追想し、暗涙に咽ばれたといふことである。

彼女の墓は、道路に面してゐるが、教育のない車夫馬丁でも、これが忠義の爲めに死んだ子守の墓であるといつて、冠り物を脱り禮をして通り過ぎるし、若狭の小學校の生徒は更代で香華を絶やさぬやうにしてゐる。衲は此の綱女の墓に詣でゝ思ふた。人は百萬の財産家に爲つたら、それが成功と言はれるだらうか。又從何位勳何等何爵に爲つたら、それも成功と言はれるだらうか。縱令位は人臣を極めても、誠意がなく、本來の面目を發揮して居らなければ、富み且つ貴き地位を得てゐる人よりも、衲は教育のない漁師の娘で、賤しい子守であつても、忠と義の爲めに、病犬に嚙まれて死んだ綱女に滿腔の敬意を表するのである。綱女は十三歳で死んだ。百九十五六年前に死んだ綱女は、最早影も形もないかと言へば、彼女の靈今尚ほあるが如く、從何位勳何等の松平侯爵ですら、其の墓に向つて頭を下げられる。此の力、此の大なる力は何處にあるかと言へば、至誠天を貫き、地に徹し、宇宙に充ちてゐるところの自己本來の面目をば、綱女は綱女として發揮して死んでゐるからである。それが爲めに今尚ほ光明を放ちてゐるのである。此の一眞實は、力を以て爭ふことも能きないし、如何なる暴威を以ても奪ふことは能きないし、如何なる口達者が出て來て、抹殺しやうとしても、到底抹殺することが能きないとするならば、これ以上教育があり、これ以上智識があり、これ以上歳長けて、世の中に經驗を有する人が、綱女の如

き、尋常小學校の四年生の教へて貰ふやうな、あんなあり觸れたことでも、吾々は綱女の墓に對しては、大いに恥かしく思ふ。綱女ばかりでない。扇子でさへ眞面目を發揮して開けば風が出て來るし、珠數は珠數として其の用を爲すのである。然らば萬物の靈長たる吾々人間は、何れの邊に對して眞面目を發揮したら可なるか、何處から本來の面目を發揮したら然るべきか、扇子に對して恥かしいことはありませんか、珠數に對して忸怩たることはないか。柱は縱、敷居は横と、朝飯前に何んの造作もなく言ふけれど、縱なる柱、横なる敷居に對して、吾々は愧死しなければならぬ程に、本來の面目を失つて居りはせんかといふやうなことを反省すると、悟りなどゝ言ふ難かしいことを聞く前に、先づ人間に爲つて、それから佛に爲るといふことが必要であらう。

◇三界城と十方空

▼心は二三あるものではない

迷故三界城　悟故十方空

本來無二東西一　何處有二南北一

『捨てはてゝ身はなきものと明日はなる。覺悟の眼にも世の中の、戀は曲者惡業に、落つる時節が行先へ、十七八の島田髷、姿も意氣な處女の出立ち……』

斯る一瞬時に、鐵石と共に堅固なりし四十七士の一人に加名すべき小山田庄左衞門は、遂に迷ふて三界に籠城して言ふ、

『噫世の中といふものは乙なものだ。同じ世界に同じ人で、節季知らずの琴三味線、面白さうに遊んで暮し、美人揃ひの喜見城、それに引かへ此の方は、月日重ねた此の辛苦、大願成就といふ日になれば、討死するか、腹を切るかと、明日明後日に定まる生命、夢に喩へた一生も、分けて果敢ない夢だなア』

と憮然自失した時、既に天魔に囚はれと爲り了つて、見聞覺知一一良心の呵責に遭ひ、本具圓成の天眞佛に叱咤せられ、日夜心の安楽な時なくして生涯を終り、汚名を千載の後に歌はるゝに至つた。

實に三界は城であつて、迷へば魔軍に包圍せられて、容易に一線の活路を求め難いのである。一線の活路とは何んであるか、悟る故に十方空である、四方八面遮欄を絶して、本來東西なし、何れの處にか迷ふと言ふの南北あらん、然らば悟りとは如何なるものであるか、豈に迷ひの外に悟りなるものがあらうか、『澁柿の其儘甘し吊るし柿』『田の草を取りて其儘肥料かな』『盜人を捕へて見れば吾子なり』淫怒痴是れ菩薩の淨土であり、淫怒痴即ち悟りである。

然らば邪淫妄語瞋恚愚痴等の煩惱が、其儘佛であり悟りであるならば、凡聖龍蛇の差別はなからう。如何か迷悟を證せんといふ疑問が起るであらう。即今汝が、疑問する心は、女を見て、女と見る心と、佛に對し念佛する時の心と、心が二つも三つもあつて、個々各別の心の簞笥から引出して來るかと言ふに、決して心は一三あるものではない。必ず一つであらう。『白露の分けてそれとは降らねども紅葉に置けば紅の玉』である。白露の玲瓏一點の曇りない自己の本眞佛が、紅葉に置けば紅である。綠に置けば綠と爲る。けれども決して其の色に汚染はせぬ。昔目蓮が妄想執着した爲めに、維摩の室中で、天女の雨下せし花が、顏や手や體に、ベタ〳〵附着して、大衆の面前で大耻を搔いたのも、畢竟小山田庄左衛門が夢に喩へた一生も、分けて果敢ない夢だなアと迷ひ出したのも同じ事である。美人が一人此處を通るとして、衆人が美人と呼ぶ程の美人であるならば、幾分かは必ず艶麗であらう。而かも見る人が悉く庄左衛門のやうに迷ふて、愛着の念に絆纏せられ、擧手下足を打ち忘れて、ぼんやりする程の莫迦青年は幾人もあるまい。又美男子を見ても、婦人が然かく美男子と見て、愛執妄念を起す程の浮薄な婦人は幾人もあるまい。上野墨田の花を見ても然うである。正可目蓮が愛執の妄念を以て、天女の花を見るやうに見る野暮もあるまい。然れば思へ、吾々が迷ひといふも、悟りといふも、生死も、煩惱も、涅槃も、元一つの天眞佛であつて、陽明は萬象森然たる時も亦沖漠無朕、沖漠無朕は即ち萬象森然である。沖漠無朕は一の父（根本の義）であつて、萬象森然は精の母（根本より生出した境界）である。一中に精あり、精中に一あり、心外に物なし、吾心に一念を發して、親に孝するが如く、即ち親に孝するのは是れ物である。といふたのが是ぢや。

▼迷悟不二の好境涯

然らば曲眉豊頰清聲にして、便嬋外に秀で、中に衷あり、輕裾を飄へして長袖を翳し、粉白黛綠の佳人を見て、却つて沖漠無朕の根本良知を豁然大悟する人もあるだらう。顏色憔悴、形容枯稿して洛外に呻吟逍遙しつゝある古の卒塔婆小町を見て、萬象森然中の沖漠無朕を忽然大悟するもあるだらう。琴曲絃歌綠竹の妙音聲も、田夫野老の放歌放吟する蠻聲も、何れか迷故の三途にあらざらんやぢや。迷ふといふも悟りならば、悟りといふも必ずしも悟りではない。

陽明の主一は、吾禪の萬法歸一と是れ同か是れ別か、主一といひ、沖漠無朕といひ、良知といふ、畢竟何物を指して名付けたのか、言語文字を藉らずして端的に呈示して見よ。慕直に說與して、吾れに話頭を回へし來れ。這裡に至つて自在であれば、陽明と手を取つて共に行く底の人である。十方空の眞空を證得した人といふべしぢや。難いかな悟得、危いかな迷路。

昔秦人逢氏なる人の子に、迷罔の病あつて、人が快とする歌を聞いて却つて慟哭し、人の悲しむのを聞いて却つて笑ひ、白きを見て黑しと爲し、甘きを嘗めて以て苦しと爲し、香を嗅いで臭しと爲し、非を行ふて以て是と爲し、意の之く所、天地四方水火風雨寒暑と悉く倒用錯認せぬはなかつた。友人が其の父に告げて言ふ、

『魯の君子術藝を多く知ると聞く、或は令息が迷罔の病を治療全快せしむるであらう』と。其父教へに從ふて魯に往き、陳に過ぎて端なくも老子に面會して、迷罔病の治療を訊いた。

すると老聃子答へて言ふ、

『天下の人悉く皆是非に惑ひ、利害に昏く、汝が子と同病者ばかりである。予がそれを憐んで、火は自ら熱きものぞと說與し、水は自ら冷やかなるものぞと敎へ、毎日日は東に出で西に沒し、山は高く水は流るゝものであると敎誨治療の法を施すけれども、一人も未だ悟るものはない。且つ一身の迷ひは一家を傾くるに足らず、一家の迷ひは一鄕を傾くるに足らず、一鄕の迷ひは一國を傾くるに足らず、一國の迷ひは天下を傾くるに足らず、天下悉く迷ふとすれば、孰れか之れを傾けんや、天下唯一人迷はねばとて、毒にも藥にも爲りはせぬ。天下の人をして其の心悉く汝が子の如くならしむ。天下の人が悉く水を火と迷ひ、是を非と迷ふて居る。それを汝が一人吾子のみが迷ふてゐると思ふは、汝が却つて迷ふたのである。哀樂聲色臭味是非、孰れか能く此の

迷ひを正さんや、且つ吾れ悟り餘に、汝に語るの一言も、又迷ひの一言ぢや』

と。然れば迷ふといふも悟るといふも、畢竟又迷ふと言はざる可からず。本來の面目といひ、趙州の無字といひ、隻手の聲といふも、又悟りの初めであつて、大なる迷ひの初一歩である。

昔釋尊在世の頃、渾然として自己の全身を亡失せし者があつた。狂氣の如く吾身を尋ね求む、傍人慈悲心を垂れて、

『咄、這箇是汝の鼻ではないか。這箇是汝の眼である。這箇は汝の口である。這箇は汝の耳である。這箇は汝の兩手である。這箇は汝の兩脚である。咄々這箇はそれ汝が全身である』

と指示した。今迄は手足の疲れも知らず、頭の痛みも知らず、自己の美醜も知らず、苦も樂も、悲しきも喜ばしきも知らなかつたに、全身是我なることを知りて、寒さを凌がん爲めに衣を欲し、飢餓を凌がんが爲めに食を欲し、遂には衣服の好惡に迷ひ、食物の味不味に迷ひ、是に迷ひ、非に迷ひ、寧ろ自己の全身是我なることを知らず、死人のやうであつた時の境涯が懷しく爲つて、始めて身心大捨の妙道に入り、斷常の二見を超越して、有に即して無なる事を知り、無に即して有なる事を悟つたといふ。然れば有無共に絶して本來無東西、三界城中即ち十方空なる事を徹見すべし、然らば無一物無盡藏、有レ花有レ月有二樓臺一と絶叫して、迷悟不二の好境涯に至るを得るのである。這箇の境涯に到達すれば、近世白隱禪師の如き忍び難きを忍ばるゝのである。

▼白隱のフン然うか

白隱禪師が、東海道原の松蔭寺に在職中、雲衲も二十人から隨身して居り、一般の歸依も厚かつた。或る豪農の主人は、殊に歸依深く、時々和讃供養などしたが、何時の間にか、一人の女が夫のない兒を姙娠した。父が怒つて何人と不義の交りをしたかと叱責したところ、娘は苦し紛れに白隱禪師の胤だと一時遁れに答へた。父は烈火の如く憤怒して、其の分娩するを待ち、乳兒を抱いて松蔭寺に往き、罵詈讒謗して言ふ、

『咄、這野狐精、表は虫も殺さぬ殊勝な面付をして、俗人も恥とする不義不倫の亂行を爲し、よくも大事の娘を瑕者に爲居つたな』

と、無念の涙はら〳〵と流し、憤れ乳兒を禪師の膝に投げつけて立ち去つた。

禪師は從容として、

『ふん然うか』

と一言答へられたのみで、千佛は造り易く、一命は拾ひ難しとて、衣の袖に其の兒を包み、人の門戸に立ちて、乳を貰ひ歩行きなどして撫育された。

隨身して居つた夥多の雲衲は、此の有樣に愈々見損つた賣僧の白隱だと、左右を辭して東西に離散する者多く、檀信徒の者も殆んど出入する者とてはなく、洵に平居里巷相慕悅せし者も、徵逐せし道友も、皆反眎して相識らざるが如く、恰も陷穽に落つれども、手を引いて救はず、反つて之れを擠し、又石を下すといふ慘憺たる境涯に至られたが、禪師は更に怨言を洩らさず、人に逢ふては破顏微笑して、偏に古敎照心の悟後長養に餘念なく暮された。嬰兒の母なる娘は、之れを見ると、慚愧に堪へずして、妊娠するに至りし其の實を父に懺悔したので、父は天を仰いで慟哭し、走つて禪師の下に行き、涕淚悲泣して、身の大罪を懺悔陳謝した。禪師は又、

『ふん然うか』

と從容笑はれた。迷悟不二の境涯に到達するといふのは、最も大切なる修養である。落第にも、落選にも、大損害にも、及第當選及び大利害にも『ふん然うか』の一言で、社會萬般の公案因緣を痛快に裁斷し、亂れに亂れた麻糸を、快刀を以て切斷するの大力量は、如何にして得らるゝか、努力一番先づ這箇生死の三界城を打破して、本來無二東西一、何處有二南北一と親見證得、水を飲んで冷暖自知せんことを要す。縱令五車の書を讀了するとも、西哲の垂涎を討究するとも、元是れ畫餅にして吾が餓を醫するに足らぬ。蒼褪めたる頰、喰ひ縛りたる唇、握り詰めたる拳を以て、我れ徹見せりと斷然言ふ事能はざる者は、到底這箇三界城の包圍を解脫する能はず、空しく老猿の金鎖を打つて啼くが如く、又窮鳥の徒らに竹籠を數ふるに似て居る。南北東西差路いよいよ多く、切に奮勵せんことを望む。然らずんば仁義といふも、忠孝といふも、如何に巧妙に之れを口にし、筆にするとはいへ、結局俳優が舞臺面の一の假面に過ぎない。笑ふべきかな。

◇如來の光明

▼心の淨き人は幸なり

靜岡縣清水の鐵舟寺の近くに、田村といふ人が隱棲してゐた。これは以前村井商會が煙草を盛んに製造して居つた當時に、其の支配人を勤めた人であつて、一時基督敎の牧師に爲らうと志した人であつた。米國人に村井商會を賣らうといふ問題の起つた時、其身は基督敎信者であつた爲めに、非常に煩悶した。何うして此の解決をつけやうかといふことに就き、一と方ならず苦心をした。それで基督敎の經典を披いて見ると、

『心の淨き人は幸なり。神に逢ふことを得べければなり』

といふ句がある。此の神に逢ふ心、淨き心といふは、何ういふ心であらうか。此の心の淨きといふのは結構であるが、神に逢ふといふのは、何うしたら逢ふことが能きるだらうか、これに心を移して、行き詰つて了つた。そこで京都の建仁寺の竹田默雷禪師の許へ行き、心の淨きとは、何

ういふ事であるかを尋ねた。すると禪師は、

『心の淨きそれは何んでもない。心といふものゝ綺麗な穢い其心を持つて來なさい。其の綺麗な心はどんなものか、其心を鳥渡持つて來なさい』

と。それで半年の間苦心して、遂に默雷禪師の敎へを受け、初めて『心の淨き人は幸なり、神に逢ふことを得べければなり』といふ聖書の妙味が分つた。それで遂に基督敎を止めて、後納のところへ來て、熱心に研究し、納が鐵舟寺に一年半ばかりゐる內に、每日やつて來て坐禪をし、一心不亂に普門品を讀誦した。普門品を唱へて、財產を拵へやうの、名譽を得やうといふやうなことはなく、唯一心に普門品を讀み、さうして熱心に坐禪する。始終吾々に向ひ、

『禪宗の修行をして見んことには、基督敎の聖書の有難味は、本當に分らぬ。基督敎を知らんと欲せば、先づ此の坐禪を行らねばならぬ』

と言つた。

納が每月行く名古屋の不徹會にも、然ういふ人があつた。伊勢の四日市の山中萬次郎といふ人

で、多年傳道師までやつたが、何うも基督教では『天に在す神よ』と言つて、教へてゐるけれども、果して神は、何れの所にあるかといふ事に爲ると、胸中穩かでない。如何にしたならば、神と對顏し得るかといふ事に對して、至れり盡せりの說明をする人は、先輩の中にないではないが、眞に神は此處にありといふ傳道師は、日本中で、三本の指が折れない程である。切望これから不徹會の會員に爲るから、宜しく傳へてくれと言ひ、衲が同會に行く毎に、四日市から熱心に通ふた。

で、此の宗教といふものは、必ずこれでなければならぬといふことはない。同じ飯でも、硬いのが好きな人があれば、柔かいのが好きな人もある。衲の講話を聞いて、何うも禪宗は善いと思ふ人もあれば、念佛が良いと考へる人もある。又今迄は宗教といふことに就いて、何とも思つてゐなかつたが、彼の和尙の講話を聞いて見ると、あれなら一つ行つて見ようかといふやうな人がないとも限らぬ。それで衲は決して何教を信じなさいとは言はぬ。『大道無門千差別あり』で、南無阿彌陀佛可なり、南無妙法蓮華經亦可なりである。法然上人は、如來の光明を徹見すると、算盤持つても、如來の光明が拜まれる。鋤鍬持つても、如來の光明を拜し見ることが能きる。此の森羅萬象皆悉く光明徧照十方世界念佛衆生攝取不捨といふ德がある。それは南無阿彌陀佛を信ずるといふ誠を信得する力がなければ、眞の光明は分らぬ。が知つても知らなくても、光明は十方世界を普く照らす。竹篦一本にも、如來の光明といふものがあるぞよと言はれた。して見ると、法然上人の如來の光明の說明と、禪宗一流の光明の說明と、殆んど一致してゐると衲は思ふ。唯違ふやうに言つて見るだけで、自力といふ流儀で言ふか、他力といふ流儀でいふかだけの違ひである。

▼看る時見えず暗昏々

雲門禪師は『人皆悉く此の光明のあるあり。看る時見えず暗昏々』と言はれた。人々皆光明を備へてゐる。では何處にあるぞと言ふと、『看る時見えず暗昏々』で、眞暗で分らぬ。『作麼生諸人光明』、さア何うぢや、光明があるか、どんなものぢや。金剛石の指輪のやうに、ピカピカ光つてゐるか、頭の禿げたやうに、光つてゐるか、これは寺での問答で、多勢居たけれども、

一人も之れに答ふる者がなかつた。すると雲門禪師は、『僧堂佛殿庫裏三門』、向ふに僧堂があるぞ。此方に佛殿があるぞ。此處には庫裏があつて、彼方には山門が建つてゐる。法然上人は『光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨』といふ御說明に、『森羅萬象皆此德あり』、僧堂や、佛殿位ではない、天にも、地にもそれが備つてゐる。竹一本にも如來の光明があるぞよといふ御示し。雲門禪師の方は、意地の惡るいお父さんが、子供にものを敎へるやうに、『作麼生諸人光明』、分らんかッ、面倒臭い奴ぢや。それ彼所に僧堂がある。此方に佛殿がある。此處に山門があるといふやうな形である。法然上人の流儀は、やさしいお母さんが、子供に敎へるやうに言つてある。それで之れを自力ぢや、他力ぢやと、種々言ふけれども、其中へ入つて了へば、自力も他力もない。光明といふことは、恁ういふ說明で、大抵分るであらうと思ふ。

又大宋の湖南の長沙招賢といふ人は『盡十方世界之れ沙門の眼』といつた。沙門といふのは天竺の語で、漢譯すると『勤息』といふ。『善事を勤めて、惡事を息める』といふ意味を現はしたものである。然うして見れば、强ち坊さんばかりのことではない。併し和尙といふ語は違ふ。こんなことを說くと、佛敎學校の一年生に敎へるやうであるが、日外或る學校で、大和尙と書いてあるのを見て『ヤマトナホ』といふのは、何んのことかと問ふたさうであるから、念の爲めに說くが、此の和尙といふのは、矢張天竺の語で、支那の語に直すと『力生』といふ。力生とは、『師匠の力で、弟子の力を生ずる』といふ意味である。然うするとお父さんの力生は、親の力で、子供の力を生ずる。父を生ずる、母を生ずる、其處でお父さん和尙、お母さん和尙と言はなければならぬ。單に衲どもばかりが和尙ではない。沙門といふのは、善事を勤めて、惡事を息める。で、これは吾々僧侶ばかりが、善事を勤め、惡事を息めるのでは不可ぬ。矢張呉服屋沙門、米屋沙門、左官沙門と、皆沙門にならなければならぬ。決して法衣を着たものや、敎育家ばかりを賈むべきものではない。それでお父さんや、お母さんが、自分達が、朝寢をして居りながら、子供衆に向つて、朝起きを八釜しく言つても、何んにもならぬ。

招賢禪師の言はれた沙門は、僧侶のこと、殊に吾々禪宗僧を指したものである。

盡十方世界之れ沙門の眼

盡十方世界之れ沙門の家常語
盡十方世界之れ沙門の全身

これに依ると、柱の立つてゐるのも私の身、敷居の横はつてゐるのも私の身、電燈の光りも私の身である。といふても障りはない筈である。

盡十方世界之れ自己の光明
盡十方世界光明の中にあり

招賢禪師は、此の光明といふことに就いて恁う言ふ御垂示がある。併しながら此の光明の長短方圓、光明の綏嚴自在なることを知らうといふには、禪宗一流でいへば『隻手の聲を聞く』なり、『本來の面目』を見るなり、天地眞闇にならぬことには、本當の光明は分らぬ。淨土宗でいへば、『尼女房たらん身は、何の樣もなく、一心一向に深く賴み參らせて』といふ、馬鹿正直に南無阿彌陀佛を唱へるやうにならねば、十方世界の光明の光りといふことは分らぬ。如來の光明といつて、それはこんなものだと取出して說くことは能きぬ。眞に如來の光明といふものは、之れを徹見しなければならぬ。淨土一流の光明は、南無阿彌陀佛を一聲唱へるところに於て、此の光明を徹見しなければならぬ。禪宗一流の光明の徹見は『人々皆悉く此の光明のあるあり、看る時見えず暗昏々』である。然らば其の光明はどんなものぢやと言ふと『僧堂佛殿庫裏三門』……『ハヽア成程それなら分つてゐる。東京なら電車で吳服橋を渡り、東京停車場に往き、然うして汽車に乘れば大阪へ行ける』。却々そんなことではない。

▼四無量心之れ光明

文豪で、そして大學者と言はれた彼の支那の韓退之の如きも、此の光明といふものは、本當に分らなかつたらしい。

唐の憲宗皇帝が、御舍利を內殿で供養された。すると佛舍利から瑞光を放つた。それで百官は、之れは陛下の御聖德に依つて、國家が彌が上にも治つて行く瑞祥であると賀辭を奉つた。ところが韓退之一人のみ御祝ひを申上げぬ。そこで皇帝は、

『何事にも先んずる韓退之が、何故此度のみ賀表を出さぬのであらうか、韓退之を呼べ』

と命じた。韓退之が御前に召されて、

『總ての役人が皆祝賀を言つてくれるに、何故其方だけが言つてくれぬか？』

と御下問に爲つた。すると韓退之は、

『佛の光明は、青黄赤白に非ず』

と御答へした。

ところが憲宗皇帝は却々豪い。

『然らば佛の光明は、青黄赤白でないと申すか、それならば如何なるか之れ如來の光明、如何なるか之れ佛の光明。どんなものが如來の光明か？、朕に說明してくれ』

と仰せられた。すると『韓退之答へなし』とあるから、默つて了つた。

これを曹洞宗の開山道元禪師は、

『韓退之は、あれだけの大學者でありながら、如來の光明は、青黄赤白に非ずといふことは知つて居つたが、如來の光明は又青黄赤白の外には無いといふことを知らなんだ』

と批評されてゐる。『如來の光明は、青黄赤白ではない。』それならば如來の光明は、どんなものかと言ふたら、青黄赤白の外に、如來の光明といふものは、何にもないのである。即ち電燈の光りに依つて、如來の光明を知り、太陽の光りに依つて、如來の光明を知る。青黄赤白の力に依つて、如來の光明を知らなければならぬ。即ち韓退之は、青黄赤白の外に、如來の光明のなきことを知らなかつた。尤も青黄赤白といへば、五色を意味するもので、此の五色から、總ての色が現はれるのであるから、五色以外に、外の色はない譯であるが、韓退之は此の返答をすることが能きなかつた。其處で道元禪師は、

『惜い哉韓退之、青黄赤白の外に、如來の光明の無き事を知らざりし』

と言はれた。此處が大切なところである。

如來の光明は、青黄赤白に非ずといふことを知つてゐるのは、信仰を得た人も、得ない人も皆同じ事である。けれども『青黄赤白の外に、如來の光明は無い。』といふことは、淨土流でいへば、信心獲得して、安心を得た人でなければ解らぬ。禪宗一流で言へば、大悟徹底したる人で

なければ解らぬ。『悟りても栁は同じ綠かな』で、悟らぬ前も、悟つた後も、柱は矢張堅である。此處である。解つた人も、解らぬ人と同じやうな顔をして差支ないけれども、併し水を飲んで冷たいと知つてゐるのと、說明だけを聞いて、水は冷たいものだと知つてゐるのとでは、大分違つてゐる。如來の光明は、此處を知つて貰ひたい。又曹洞宗の大學者面山禪師は、如來の光明の働きを示されてゐる。

『諸佛の一大事因緣は、一切衆生を照徹する四無量心之れを光明といふ』

佛の一大事因緣は、一切衆生を照らすところの四無量心……四無量心といふのは、慈無量、悲無量、喜無量、捨無量……捨無量といふのは、善をも捨て、惡をも捨て、兩者共に捨てるといふ捨である。此の四無量心が、佛の光明であるといふ。恁う親切に說明されてゐる。

▼智惠の光明

さて如來の光明は、して見ると、青黃赤白の外には無いが、此の光明を徹見し、此の光明を見屆けるには、如何にしたらば能きやうか、佛のことは先づ措いて、親の光明ですら、却々見られぬものである。又現在眼の前にゐる主人の光明ですら忘れてゐる奉公人が、割合に尠くない。之れは智惠の光明さへあれば、結構見えるのである。主人の光明さへ拜まれぬ奉公人があれば、奉公人の光明ですら、見損つてゐる主人が、世間には幾らもある。其位だから如來の光明は容易に拜まれない。一軒の家でも、奉公人の四つの眼よりも、主人の二つの眼の方が光ることもある。實際主人たる人が、智惠の光明が曇つてゐると、一軒の家に、由々しき事が起つて來る。

或る所に、隨分多勢の奉公人を使ふ家があつた。其處の主人が死亡したので、未亡人が戶主と爲つた。すると二年ばかり年々收支が償はず、喰ひ込んで行くばかりだから、『これでは堪らぬ。何か行き屆かぬことがあるかも知れぬ』と心配し出し、何うしたら可からうかと思案の果、其の附近の山中に、仙人のやうな智者が隱棲してゐるのを、態々尋ねて行き、『實はこれ〳〵の次第だが、何うしたら可いか、敎へて戴きたい』と賴んだ。すると其の智者が言ふには、

『俺はそんなことの世話をやくのは厭やだが、折角尋ねて來て賴むのだから、まア敎へることに

爲やう。此處に不思議函といふものがあるが、此の函を貸すから、一年經たら必ず返へさねばならぬぞ。此の函を持つて、毎日晝夜三回宛、家の中を廻ると、必ず無駄な費がなく爲るのだ。洵に不思議な德を備へた函であるが、併し決して中を開けてはならぬ』

と。未亡人は恁う言はれたので、有難く其の函を自宅に持ち歸り、言はれたとほり、直ぐ其晩から、函を持つて家の中をズーッと廻つて行つた。すると臺所で、女中が三人、明日客に出さうと用意して置いた肴を、突ッついて食ふてゐた。未亡人は何んとも言はず、函を持つたまゝ、それを見て見ぬ振りをして、番頭どもの部屋へ行くと、酒樽からドシ〳〵酒を出して、頻りに飲んでゐた。それから他の部屋へ廻つて見ると、平素片付けてあるべき道具類が、亂雜にしてあつた。恁うして見廻はるのが一年續けられると、最う目に觸るゝやうなことがなくなつた。然うして年末に計算すると、前二ケ年の損失を補塡し得られる程の利益と爲つてゐた。そこで未亡人は、大いに喜び、澤山の禮物を持ち、智者の所へ禮に行き、

『洵に此の函は不思議でございます。妾に御譲りは願へませんでせうか？』

と言ふと、

『たツた一つより外ない函だから、與ることは能きぬが、中に入れてあるものだけを與らう』

と智者が、函の蓋を開けて出したのを、未亡人が見ると、一枚の白紙であつたと。

これは何も不思議はない。唯主人の智惠の光明、二つの眼の光明が、行き渡らなかつたから、然うした損害があつたのである。即ちこれが其の如來の光明の一部である。けれども智惠の光明を、餘り使ひ過ぎると、飛んだ失敗を來たすことがある。

或るところに、夫婦二人棲んでゐた。丁度午餉時に爲らうとするから、妻女が夫に向ひ、

『貴方副食物を何にしませう？』

『何も要らないぢやないか。ほら御聞き、隣りで山芋汁を摺つてる音がするだらう。今に持つて來るに違ひないから、溫く飯を炊いて置きなさいよ。ほら〳〵アの通り、山芋汁を摺つてる音がするぢやないか』

『では直ぐに、麥御飯の柔かいのを炊いて置きませう』

妻女は甲斐々々しく襷を掛け、直ぐに麥飯を炊いて、夫婦顏を揃へて、隣から山芋汁の來るのを待つたが、却々來ない。

『貴方大變お腹が空いて參りましたが、お隣りから山芋汁を持つて來るでせうか？』

『大丈夫持つて來るとも』

其內に一時半と爲り、二時を過ぎた。そして隣家の擂鉢を摺る音も止んだが、未だ山芋汁を持つて來ない。夫は業を煮やして、

『エー怪しからぬ。最う隣家とは交際をせぬ。人を馬鹿にしてゐる。こんなことなら、擂鉢を摺る音なんかさせぬが可い。音をさせるから、此方は持つて來ると待つてゐるのだ』

と豪く怒つたといふことである。後隣家に訊いて見ると、天氣が良いから、着物に糊を附けやうと、擂鉢で糊を摺つたのであつたと。智惠の光明が映じ過ぎると、こんなことに爲るものである。

或る商家で、隣りで儲けたからと、直ぐ其の眞似をして、飛んだ失敗をした人がある。糊を摺る音を、山芋汁と間違へた位は、二時間ばかり腹を減らせば濟む、飢じい時に不味いものなしで、それも偶には可いが、隣人の儲けた眞似をして、失敗した時には、大きな損失をせなければならぬ。商賣上の智惠の光明は、儲けやうといふ考へばかり、眼前にちらついて來ると、決して儲かるものではない。仕入れべき時に仕入れ、賣るべき時に賣るといふやうに、正しく行かぬと、本當の利益を得るのは難かしからうと思ふ。此の光明は、如何なるところにもある。商業にも光明あり、智慧の上にも、光明がなければならぬ。又德の光明といふのもなければ不可ぬ。

◇閑不徹と大忙生

▼虛堂和尙の詩句

雲在二嶺頭一閑不徹　水流二磵下一大忙生

此の二句は專門道場に入つて、幾度か苦吟して充分に境涯を錬磨し、自ら徹見するところがないと、容易に日用三昧に應用する事は能きぬのである。幾度か苦吟し、幾度か吟味して、橫に咬

み、縱に嚼みて、細嚼翫味すればする程妙味が湧き出して來るところの、實に有難いとも面白いとも、口に言ふことの能きぬ啞子の好夢を見たやうな妙趣妙味の功用を得ることの能きる語句である。

全體詩と言ふものは、講釋の能きるやうなものでは、妙味もなければ餘韻もない。恰も文人畫の名畫に對するやうなもので、これが松だの、これが櫻だのと一々指點することは能きぬ。けれども幾度眺めても、幾度床の間に掛けて見ても、何時も清新の趣味が津々として、實際を寫した山水や寫眞や花鳥を見てゐるよりも、甚深なる妙味を感得するものである。禪僧の詩は恰も文人畫の名畫を玩味すると同じ味ひがある。況んや這般の兩句は、彼の有名なる宋朝時代の徑山虛堂和尚の唱へ出された辭句であるものを。

▼傍人の吟誦て啓發

序に虛堂和尚の略傳を紹介しやう。和尚は四明山下象山縣の陳氏の子で、光宗皇帝紹熙元年に誕生せられた。丁度日本の後鳥羽天皇建久元年に當るから、西行法師が寂滅せられた年で、又源頼朝が戰爭も濟んで、近衛大將に爲つた年に當る。或は一年位相違してゐるかも知れぬが、大差はない。

十六歲の時、普明寺の師薀に就いて出家せられたが、或る日杜工部の詩集にある天河の詩で、

常時任二顯晦一　秋至輙分明　縱被二微雲掩一　終能永夜清

と傍人が吟誦するのを聞いて、忽ち啓發するところがあつて、それから大奮發して、親を辭し、鄕を辭して、行脚に出懸けられたといふことである。

偖、天河の詩に、如何なる妙があつて、奮發せられたかと言ふに、天河を賢者の明智に喩へ、微雲を小人の讒言に喩へて、杜工部は作つたものだが、和尚は天河を佛性の靈光に比し、微雲を妄識の亂想に比して、礙と手を打つて啓發した。成程勇猛の衆生の爲めには成佛一念にありぢや。

『雲晴れて後の光りと思ふなよ本より天にありあけの月』ぢや。宜しく妙奢摩他、三摩鉢提、禪那の修行に依つて無始劫來無明の微雲に掩はれてゐるところの、本來自性清淨の天眞佛が能く永夜に清からんことを願求せられたのである。十六歲の若年にして、此處に氣が付いたのが、既

に尋常の天才ではないといふことが解る。それから運庵禪師に參じて、有名な古帆未掛の因緣といつて『葛藤集』にもある彼の公案に依つて、殆んど二ヶ年も刻苦參究せられ、終に能く永夜に清しといふ本來自性の光明を徹見せられ、それから疎山壽塔の因緣に依つて、最後に又大嶺古佛光りを放つ底の大妙處を徹見せられ、凝滯浮然として脫洒自在の境涯を得て、それより諸方を歷參せられ、四十歳の時、嘉興府の興聖寺に勅請を以て住持せられたが、實に南宋孝の紹定二年にして、理宗皇帝の歸依に依つて住山せられたのである。それより報恩寺、顯光寺、瑞巖、延福、寶林、育王、柏巖、淨慈、徑山と何れも大地名藍から勅詔若しくば知事の懇請に依り、緣に隨つて轉住して居られる。四十五年間に十ヶ寺も轉住して居られるから、席の暖まる暇がない程の大活動である。其間には寶林寺で說法敎化されたが、既に宋朝の末で、時々蒙古の兵が襲來するやら、金の兵が諸州を寇略するといふ戰亂の最中でも、數百の雲水と共に艱難せられた。

寶祐四年、和尙六十五歳の時、又轉じて育王山へ拜請せられたが、此の育王山在住中に、吳制相が小人の讒言を信じ、和尙を恥かしめ、其の德を損せんとして、種々惡計を運らしたから、終に囚徒の取扱ひを受けらるゝ程の悲しい淺間しい憂目に遭はれたが、和尙は常に怡然として自若たるものであつた。

實に其の境涯が有難いではないか。邪は正に敵することが能きず、和尙は皇帝の聖旨宣諭に依つて釋放せられた。其時の奉謝の偈頌は、氣なしに字面の通りを鳥渡見れば何んでもないやうであるが、和尙七十歳の老體に爲つて、法の爲めとは言ひながら、不足言ぬ小人輩の讒言に依つて、囚人同樣な辛い憂目に遭ひながら、一點他人を恨む氣もなく、平然として育王山に歸り上堂せられて、

去時曉露消二衲暑一　歸日秋聲滿二夕陽一
恩渥重々何以報　望二無雲處一祝二天長一

と擧揚せられた。和尙の當日の胸中を數百年後の兒孫たる吾々が拜察するばかりでも、涙が零れる程有難く思はれる。其後理宗皇帝崩御の時には、和尙は禁內へ召されて、神靈に對して說法を乞はれ、皇太后並に度宗皇帝から、特に優渥なる勅詔を賜はり、七十七歳で又もや徑山へ轉

請せられたが、終に徑山で遷化せられたから、世に徑山虛堂和尚と稱するのである。

遷化の時が八十五歳で、咸淳十年十月七日である。日本の文永十一年十月蒙古の兵三萬餘人が、對馬、壹岐、筑前へ襲來した年で、日蓮上人が佐渡から赦免されて、身延山へ久遠寺を開かうといふ年に當るのである。

▼簡禪師と德山和尚との商量

這般の大德にして而かも大學者である徑山虛堂和尚の言句である前掲の兩句十四字は、報恩寺を退山して、顯光寺へ移錫せらるゝ時の偈である。原文を左に示さう。

擧。高亭隔江見德山一便乃橫趍而去。後來開法承嗣德山一。師云。高亭只見錐頭利一不見鑿頭方一。當時若過江來豈止住院。有人會得。柱杖子兩手分付。雲在嶺頭一閑不徹。水流澗下一大忙生。

擧すといふのは、人天大衆の爲めに、提唱擧揚せられた樣子である。

昔高亭院の簡禪師が、初めて行脚の時、德山和尚が、江岸の頭に坐禪してゐられたところを、簡禪師は江を渡つて膝下に往き、親しく相見もせずに、四五丁隔つた江河の向ふ岸から合掌問訊した。すると德山和尚は扇を以て、來い〳〵と招かれた。妙なものである。扇で來い〳〵と招かれたところを見て、忽然として本有圓成の天眞獨朗なる光明を徹見契悟した。これだから公案古則に依つて心掛けてゐる者は出息、入息の瞬間も、擧手下足の束の間も、油斷なく正念持續工夫することは大切である。學藝にしても其通り、政治家にしても然うである。何んでも一意專心に國家を思ひ、君恩を思ひ、學術のことを思ふてゐると、意外なところで、其道の光明を徹見することがあるのである。簡禪師も意外な所で、拾ひもの同樣の悟りを得たので、歡喜雀躍して、橫趍すると書いてあるから、橫飛びに飛び去つて、啞子の好夢を見て喜ぶ有樣で、遂に江岸を渡らずに、德山名物の棒も喰はされずに、高亭院に返つて、住持して了つた。而かも勝手に德山の法系を繼嗣したのだから、師云くとこれからが虛堂和尚の大禪定より拈出せらるゝ道力の光明である。

師云く、高亭も却々すさまじい靈利にして且つ敏捷な手早いところで、德山の肝膽を見拔かれ

たが、併し高亭は只錐頭の鋭利にして、煩惱も菩提も一串に穿却して、佛魔凡聖一時に刺し殺すといふところのみを見て、鑿頭の方にして、又一層便利な、佛も作れば、凡夫も作る、猫も杓子も自由に作爲するといふ、差別微細の至極重寶な道具のあることを見徹せずにゐるぞ。其の當時江を渡つて來て、親しく德山に逢はゞ、高亭に住院する位ではない。モツト〳〵嬉しい芽出度い拾ひ物があつたらうにと、恁う云ふてあるが、併し迂濶に江河を過ぎ來つて、德山に相見したならば、無論三十棒位の御馳走に極つてゐる。高亭の慌て者も、僥倖にして屈棒を喰らふ災難を遁がれたが、併し是非とも又此處で三十棒の目に合はねば、一人前ではない。若し此の味ひが了解出來れば、虛堂の柱杖子も、兩手に分付せんといふて置いて、最後に今の雲在嶺頭閑不徹、水流磵下大忙生と唱へ了つて、退出せられたのである。かゝる言句を短かい舌では說き盡されぬが、それかといふて獨り良がりでも、下化衆生の慈悲に反く譯であるから、字面の意味だけは述べて見る。

▼明月大空に掛れるが如し

閑不徹、大忙生と雖も、浮雲流水の境涯であれば、閑も忙も、常に無心の境涯である。これは無論退山の上堂であるから、老僧今日報恩寺を退山して、又縣光へ進寺するといふは、如何にも著忙に似て居るが、元より緣に應じて擊石火、閃電光の如く大忙生でも、其の實は、閑不徹であるといふ境涯である。東奔西走中元も正月も、生死の一大事も、一時に來たやうな大忙生でも（生は助字だ）赤壁の文にある通り、夫の水と月とを知るや、逝く者は恁くの如くなれども、而かも未だ嘗て往かず、盈虛する者の彼れが如くなれども、而かも卒に消長なし。蓋し將に自ら其の變ずる者よりして之れを觀れば、則ち天地曾て以て一瞬することも能はず、其の變ぜざる者よりして、之れを觀れば、則ち物と吾と皆盡ることなし、又何をか羨まんやである。洵に無一物中無盡藏、有レ花有レ月有二樓臺一である。

閑といふ語は、ヒマとかムダとかいふ意味で、靜の字とは餘程違ふ點がある。不徹といふのは閑をきつく言ひあらはしたので、透る通る同義であるが、閑不徹とは、寂然不動にして須彌の如く、ミヂンも動かぬ有樣である。又肥杓柄の柄の取れたやうに、手も付けられぬ更に無用の物で

あるかの如く、社會人事と沒交渉にして、大海中の崔屹たる大盤石の如く、千萬丈の大白浪が、滔天の勢ひを以て、大忙生にドブンドブンと忽忙に嚙みつくとも、世上の紅塵飛べども到らず、深山雪夜草庵の中といふやうな境涯である。

閑の字に就いては『譯文筌蹄』に面白い語が引いてある。閑は忙字の反對にして、張籍の詩に、

因下過二竹院一逢レ僧話上又得二浮生半日閑一

と云へる句を以て、佛印に對して、東坡が吟じければ、佛印曰く、

學士閑二了半日一老僧忙二了半日一

といふやうな逸話もある。兎も角閑不徹の三字は、大寂定中天地一指萬里一條鐵の如く、少しも世界の毀譽褒貶にも動着せず、利害得失にも心を動さず、宛然明月の大空に掛れるが如き境涯をいふたのである。

人々此雲在二嶺頭一閑不徹といふ堅實なる寂然不動山の如き大信念を獲得して、其の又不動山の如き境涯の閑不徹の處から、臨機疾きこと風の如く、紅塵萬丈人事匆忙の世の中へ躍り出して、努力活動すれば、流水の澗底を自由自在に流るゝやうに、落葉を潜り、岩石を廻りて、方圓屈曲羊腸の如き人世の谷間をドシ〳〵と流れ走るが如く、如何なる複雜な劇務も、一種微妙な趣味を以て、處分して往くことが能きるのである。それには根本大智の雲在二嶺頭一閑不徹といふ錐頭の利なるが如き大禪定の光明を徹見して、始めて鑿頭の方自在の了簡應用をする事が能きるといふものである。先づ然ういふ心持を以て、這般の兩句に參得して、晨に吟じ、夕に吟じて、此の兩句の文字以外言語以外に興味のあることを深く信じて、修養するが宜しい。

◇何事にも趣味

▼好き嫌ひは吾儘の結果

何事にも好き不好きがある通り、宗教にも矢張り好き嫌ひがあつて、佛教に緣なき者には、此の圓頂黑衣といふ姿が既に嫌ひで、其の說法には耳を傾けやうとも爲ない。基督教に對しても、念佛に對しても、孰れも然りで、緣なきものは仕方がないのである。併し佛教と耶蘇教とを問は

ず、宗教はある方が可いか、ない方が可いかといへば、無論ある方が可いのである。唯其處に好きと嫌ひとがある。

趣味とは何んぞや。碁の趣味、挿花の趣味、讀書の趣味、繪畫の趣味といふが如き、人々に依りて、趣味も異つてゐるが、要するに念佛信者の唱ふる念佛も、法華信者の唱ふる題目も、父母に孝、君に忠といふことも、趣味がなければ不可ぬ。趣味は趣き即ち有樣を味ふので、眼に見て心に味ひ、精神的に興味を持つといふのが眞の趣味である。

又趣味とは、事物を美的に判斷する主觀的能力ともいひ、眞に物を體得して、心から嘆美して事物を味ふ、これを趣味と稱するのであつて、心で嘆美する働きがない人は、如何なる膏粱八珍の美味を面前に並べられても、何んの味もないのである。花に對して、心で嘆美する能力のない人は、何んの風情もないのである。音樂も然り、繪畫も然り、趣味なくては、馬の耳に念佛である。而して心で嘆美するには可成高尚に味ふやうに爲なければならぬ。南無阿彌陀佛を唱へても然うである。題目を唱へても然うである。題目念佛に趣味を持つてゐれば、縱令一と聲でも、天地を貫く概がある。厭や厭や唱へてゐるのでは、何んの効もない。事物を美的に主觀的能力を以て判斷して往かなければならぬ。所謂趣味がなくては不可ぬ。

一つの仕事をするにも趣味がなくては、仕遂げられるものでない。岡山の或る田舍に、郵便配達夫が山を越えて、タッタ一枚の端書を持つて往く所があつた。或る時例の通り、其の配達夫が、僅か一枚の端書の爲めに、遠い山越えをしやうと、郵便局を出懸けた時、途中で其村の老婆に出逢ふた。老婆は一枚の端書の爲め、此の職務に忠實なる脚夫を、遠い山路に使役するのを憐み、

『妾が持つて往つて上げますから、お前さんは御歸んなさい』

と言つた。配達夫は

『御親切は有難うございますが、此の端書は彼の村に棲む獨りの母に、滿洲に出征してゐる子息さんからの便りで、吾子は什麼暮してゐるかと明け暮れ心配してゐる母御の許に、無事に生活してゐるといふ子息さんの消息一時も早く知らせ遣りたく、配達して讀んで聞かせて、喜ぶ母の顏が見たいのです』

と言ふたとの事である。此の話を聞いて、村中の青年が皆改悛したといふ美談がある。これは事物を心から嘆美して、主觀的能力を發揮した好箇の適例である。

正月元旦の雑煮は、昔の大名貴族に民百姓の困苦を忘れぬやうに、皮の付いた芋菜などを入れて上げたものである。水戸光圀が元旦雑煮を食はうと箸を取つたところが、侍臣が汁を入れるのを忘れてゐた。左右の者は大いに恐縮し、責任者は早速進退伺ひを差出した。すると光圀は、

『一椀の雑煮といへども、皆民百姓の辛勞した賜物である。汁がないから食へないなどいふのは豪奢の沙汰である』

と言ひ、

汁一つなくても飯は喰へるなり
よろづ事足る始めなりけり

と和歌一首を詠じ、更に侍臣を咎めなかつたといふ事である。

心で嘆美すれば、汁がなくてもそれが一種の妙味を生じて來る。元來物を好き嫌ふといふ事は、吾儘の結果である。多數の人がゐるから、好き嫌が出來るのであつて、廣い世界に唯一人だけだとしたら什麼か、夕暮に鳴く鴉でも、外に相手がなければ、無二の朋友である。朝に晩に鳴く其聲が慕はしく爲るであらう。往昔仲の惡るい兄弟を、嚴冬廣い座敷に、火鉢一つを間に座らせて置いたに、遂には寄り添ひ、互に火鉢を擁して、從來の仲違ひを悔い、睦じく爲つたといふ話もある。好き、嫌ひは總て吾儘勝手から出るものであるから、大いに反省せねばならぬ。

▼悲しみの中必ず樂あり

衲は以前煙草が大好きであつた。數島が日に二つあつても三つあつても足りなかつた。けれども今は斷然熄めた。努めて爲さんと欲せば、如何なる事も出來ないことはないのである。斷じて決心すれば、好きが嫌ひに爲り、嫌ひが好きに爲る。

衲は子供の時には、頗る魚肉が好きであつた。ところが九歳の時出家して、三島の龍澤寺に往つた。龍澤寺は白隱禪師に由緒ある寺で、山岡鐵舟居士抔も參禪に來たこともある。其頃十七八人の雲水が居たが、飽食であるから、顔色も蒼褪めてゐた。味噌は在家から貰つて來たが、殆ん

ど腐敗つたものに鹽を混ぜて喰ふといふ有様で、師も精進、弟子も精進、開山忌でゝもなければ、米飯は喰へず、二六時中塩粥ばかりであつた。今までは魚肉がなくては、飯が喰へなかつた自分が此の有様なので、密に泣いたこともあり、暗い豆洋燈の下で、無點本の四書を讀んだこともあつた。或は夕方西へ太陽が入るのを望んで、遙に父母を慕ひ、思はず時間を過ごして、歸つて來て、毆打られたこともあつた。足掛け十年、十八歳の時久し振りで鄕里に歸ると、魚肉が出された。けれども什麼しても喰へない。あれ程、好きであつたお前がと母は驚いた。爾來今日に至る迄四十年間菜食で押し通して來た。如何に好きでも、趣味を轉換すれば、恁くの如きである。三度の食事でさへ恁うである、況んや一身の大事をや。奥床しい味ひある修養をするといふ事は、大なる必要でなければならぬ。

先年大坂から京都へ、汽車に乘つた時、何か祭禮でもあつたか、非常の乘客で、滿員であつた爲め、衲は餘儀なく車掌室へ入れて貰つた。其時車掌が、

『私共は、恁うして働いてゐるが、睡眠の不足の爲か、休養の不足の爲か、身體が甚だ疲勞し、時には思はぬ失敗もする。加ふるに生活難は益々甚だしく、實に遣り切れませぬ』

と零すから、衲は

『それはお前が不可ない。人間は無駄がなく働けば、生活難は決して起らない。衲は現在の所では、二等に乘車しても決して差支ない者だが、若い時分から、隨分難儀をして來たから、三等室の床に座つても困らない。甚麼寒い時でも、足袋を穿かぬ習慣があるから、敢て穿かなくとも濟む。お前は酒を飲むか、必要のないものはドシ〳〵止めた方が可い。五六人友達が集り、酒を飲んだり、愚にもつかぬ空談で、遂に夜更かしを爲て、休息時間を減ずるから、翌日眠い思ひをしなくてはならぬことに爲る。それよりも集つたら、修養談でもして、慾を減ずる相談でもし、必要以外には早く寢て熟睡し、充分に疲勞を脱するやうにし、然うして大活動を爲なくてはならぬ。安息するべく家に歸るべきに、却つて外を飛び歩行きなどするから、疲勞は倍に爲る。能く注意しなければならぬ。何んでも簡易な生活をして往けば、如何なる艱難に出逢ふても平氣ぢや。仕事に趣味を持つて、不平なく、能く眠り、能く働き、兀々として倦まなければ、何んの生活難な

どに脅かされやうぞ』

と種々の方面から、話をしたら、懇ろに感謝したことがあつた。

趣味といへば、女の兒が、座布團を背負ふて、遊んでゐるのを能く見かけるが、座布團には眼もなく顔もない。けれども之れに趣味を有てば、立派な人形である。竹馬木馬も亦此の類で、乘馬趣味である。怎ういふ風に考へて來ると、即ち此の森羅萬象を心から嘆美して見れば、さらさらと軒を打つ時雨も、病葉のハラリと落ちるにも趣味はある。

山東京傳は面白いことを言ふてゐる。京傳の書いたものゝ中に、八里四方もある武藏野に、外から移住して來た獨りの男があつた。一日働いて、家に歸つて來て、これから麥飯に澤庵で腹を肥さうと、七輪に火を起し、湯を沸しながら、倩々吾身の上を考へると、嗚呼莫迦々々しい、一日働いて歸つて來れば、僅に麥飯に澤庵だ。嗚呼不足言ないと思つてゐると、晝の疲れで、ウトウトと眠つて了つた。ところが其處へ平素懇意にしてゐる人が遊びに來て、これから二人で旨いものを拵へて喰べやう。先づ味噌汁を作らう。其處で豆の種を朝鮮から取寄せ、鍬を東京から肥

料は大坂から取り寄せて、裏の畑で、丹精して豆を作り、出來たところで、豆打は名古屋、箕は作州津山から持つて來て仕上げ、味噌を作り、備前の岡山から來た擂鉢で、擂古木は熊野山中で採つた山椒、播州赤穗の鹽を混ぜ、佐野の鍋で煮、安藝の宮島のしやもじを準備し、汁の實は尾張の宮重大根の種子を蒔いて取り入れ、石州の濱田から、薄刄を、俎板は岡山から、杓子は高口山の產、椀は能登の輪島と、怎ういふ風に丹精を抽んで、精根を竭し、遠い處の人々の粒々辛苦を集めて漸く味噌汁と飯とが出來上り、二人でそれを喰ひながら、一粒の麥、一啜りの汁も、實に容易の事でないと思ふ內に、夢は破れて、眼が覺めた。

其處で獨身者は、ア、勿體ない。麥飯だ澤庵だと、今迄は疎略に思ふたが、此の一粒の麥も故鄕の父が血と汗の塊だ。此の一切れの澤庵も、故鄕の母が、心を籠めた情の賜物だと、今の夢から思ひ合せて、今迄のことを耻ぢ、古びた澤庵をも美的に判斷して心から讃嘆隨喜し、舌鼓を打つて、思はず數杯を傾けたといふ話がある。これ事物を美的に見る主觀的能力、心の嘆美のよい適例である。

所謂高遠なる趣味に活きて行く人は、悲しみの中に必ず樂あり、日々好日で、人の幸福を羨まず、喜んで暮して往くことが能きるのである。無趣味の人には、如來此處に百萬の經典を說得するも珍紛漢である。花の淨土に棲んで居つても、心なければ、地獄のドン底に居ると同じことである。

▼世の中には不幸も不平もない

靜岡縣の或る富豪の妻君は、家付きの獨り娘で、若い時良緣あつて、養子を貰ふことに爲つたが、其時土地の者が、彼の喧しやの家に、聟が何人來てもをさまるものではない、今の養子も、早晩離緣に爲るに違ひないと噂した。これを聞いた娘は、世間で其麼噂をするならば、什麼かして圓滿に添ひ遂げて見せやうと、一生懸命に良人に仕へ、家道を守り立て、世間惡罵の聲が善智識と爲つたので、夫婦仲睦まじく、家も益々榮えつゝある。人の惡罵も、心で嘆美すれば、大善智識の數百千言にも勝るのである。

鎌倉圓覺寺塔頭の黃梅院の義道周信が、節季に七人の雲水に粥を遣りたいが米がない。

兄弟不レ嫌風味尠、夜更嚙レ雪迎二梅花一

恁ういふところを見ると、世の中に不幸や不平はない筈である。雪を嚙んで梅花を迎ふ。實に面白い句である。これが即ち趣味徹底であらう。言ふに言はれぬ一種の宗教味を見出すことが能きる。雪を嚙んで梅花を迎ふ此の心懸けを充分に味ふことが能きれば、幸や、不幸や、不平など一切消滅して、眞に有難く現世を送ることが能きるのである。

總て人は、心懸け一つである。書物は讀まずとも、天地間の萬象盡く修養の具たらざるなく、何を見ても開發することが能きる。衲共も何か氣が結ぼれて、厭やな心持に爲ることがあるが、其時不圖座布團の友禪染の達磨大師を見て心機一轉し、氣分が大に爽快に爲つたことがある。達磨大師は身王門に生れながら、衆生濟度の爲めに萬難を嘗められ、今に至りて或は子供の玩弄物と爲り、或は座布團の繪模樣と爲つて人の尻に敷かれて居られる。衲の如きものが面白くないとか、不平だとかいふのは、勿體ないことであると感じたことがある。

元來不平は、相手を見るから不可ない。相手といふものを立てゝ、それに心を引き付けるから、

不平が起るのであつて、萬端を心で味つて往けば、窮窟の中にあつても大なる自由、大なる光明を見出すことが能きる。

鐵にも種類がある。電車の踏段に使用してある鐵は、萬人に踏み磨られて光つてゐる。或は海中に沈沒した鐵は、永久に世に出でず、錆び朽ちてゐる。人は踏まれて光つた方が可いか、海中に空しく朽ちた方が可いか、寧ろ踏段の鐵と爲つて、世益を計るべきであらうと思ふ。心で嘆美して、趣味を有つて來れば、如何なる職業、如何なる事務も面白くないものは一つもない。如何に踏段の鐵が、人に踏まれても、世の爲め、人の爲めといふ興味津々たる一種の趣味は、何者も對ふことの能きない偉大なるものである。

解脫上人は、常に味噌汁樣とか、南瓜樣とか、朝夕の食物に敬稱を付して言つたさうである。

或る時小僧が

『上人は、味噌汁や、南瓜を樣付けにして、何故私を呼び捨てになされまする？』

と訊くと、上人は答へて、

『お前は人間でゐながら、人間らしくないから、呼び捨てにするのだ』

と言つたといふことがある。

苦痛が來ても、それを此方で迎へるやうに、飛び込んで往けば、即ち心で嘆美して樂んでそれに赴くやうにすれば、苦も必ず樂に爲る。納は一週間斷食をしたことがあるが、總てものは人から頼まれて遣るやうでは不可ぬ。自分が進んで遣らなければ出來るものではない。自分が喰はぬと極めたら、誰れが喰へと言つても喰はない。喰はないといふ其者に興味を持つて來る。喰はぬことが一種の趣味と爲る。

趣味にも、惡趣味と善趣味とがある。惡趣味と氣が付いたならば、それを轉換して猶興せずに改めて往くが可い。惡い趣味は、惡い習慣から起るのであるから、その惡習慣を斷ち切つて了はなければならぬ。

上杉謙信が言つたことに、何か爲たいと思ふ時には、辛抱して一事宛を遣り、厭やで堪らない時一事宛を爲れば、物事は自然に完成するものであると。恁ういふ工合に、心で嘆美して萬事を

觀察して往けば、强ひて宗教などに依らずとも、手近の所にあるものが、皆修養の具と爲るのである。

◇一心に照鑑文を讀め

▼人間は佛魔同體

吾々の手一本でも、種々に使用される。握れば拳と爲つて、他人を毆打る手と爲り、開けば愛兒を撫でる愛の手と爲つて使はれる。握るか開くか、此處に活用の分岐點がある。同じ聲でも、愛語と爲り、憎語と爲る。人間は佛魔同體である。一つのものが人を救ひ、人を殺す。救ふか殺すか、此處に互ひの修養の必要があり、內外妄想の群魔を顚滅し、調節するの一大事があるのである。

總て人を怒る力も、愛する力も、力のなくなつた頃に、やらうか行ふかでは價値はない。力の溢れてゐる時に、行るか止めるかといふところに力がある。これが修養の價値といふのであらう。

自分の厭やな食物でも、厭やなものを無理に食して行けば、何時の間にか、味が良く爲る。厭やなところを押通すので、苦痛もあれば、樂みもある。泥棒でも三度もすれば、止められぬといふ。

或る盜人が、八回も盜みをして、刑務所に入つてゐたが、出獄の後、僅五錢を盜んで、又もや刑務所に舞ひ戻つた。看守が、

『お前僅五錢ばかりで、又刑務所に來ては、不足言らぬではないか。何故もつと大仕事をしなかつたのだ?』

と笑ひながらいふと、其の盜人は

『泥棒も、魚釣りのやうなもので、かゝる時と、かゝらぬ時がある』

と答へたと。慣れて了へば、盜みするのも、魚釣りの如くに考へるのである。

藝術家が、山川草木の自然を描くにしても、單に見たまゝで描いては力がない。生命の流れがない。太陽の光線でも、彼のプリズムを透して見れば、七色の光りと爲つて、美しく見えるやうに、繪畫にしても、自己の靈妙の力を通じて表現すれば、美しく見えるのである。見たまゝを總

て描くのが繪畫であるならば、一羽の鷄を描くにしても、羽の毛一本も違へず、本當其儘にし、糞までも描かねばならぬが、これでは繪の價値は零である。其處に取捨撰擇が必要で、描くべきところ、描くべからざるところの鑑識は、其の畫家の力に依りて、定めねばならないのである。更に言葉を換へて言へば、畫家としての修養の力用に依ることである。

納が或る繪畫展覽會に行つたところ、一方に一羽の雀が描いてあるのが賣價五百圓、又他の方に出てゐるのが、五十羽ばかりの多くの雀が描いてあるのに、賣價僅に十五圓の札が付いてゐた。後進の畫家の繪であらうが、此處に取捨撰擇の必要があることも、想像能きると思つた。勿論其の蘊奥に達してゐない畫家では、致し方がないが、描くべきか、描くべからざるかと一點一劃、筆の行くところに、繪畫は美しく活きるのである。

▼取捨する能力が大切

社會一般のことも皆一樣である。吾々の慾望には限りがなく、見たものが欲しく爲つたり、美味いものと見れば、食ひたかつたり、美しい衣服と見れば、着たく爲つたりして行けば、常に心に樂しい滿足は得られないのである。見たもの、聞いたもの、心の欲するところに、常に取捨して行く能力が大切であつて、此處に修養の面白味があるのである。心に種々の慾望や、妄想が起つて來た時には、先つ照鑑文中の『內外妄想の群魔を斷滅し』と唱へるのである。

狐が僧侶と化けても、猫が美人に化けても、本當の人間に爲つて了はぬと、常に內心の惡魔が、心の隙を窺つてゐるのだから、今日人間の狐は、刑務所に繫がれるのである。

又彼の『鳩翁道話』の中に、猩々が酒に醉ふて、捕へられる話がある。

此の話は、酒を海邊に置き、そして其傍に草履を置いておくと、猩々は其の酒を飲み、醉ふて其の草履を穿き、踊つて踊り疲れて、倒れるのを捕へるといふのである。

猩々が海邊に來て、酒の香を嗅ぎ、

『まア何んといふ佳い薫りだらう』

と鼻をピク〳〵させる。

併し俺が酒が大好きだから、酒で俺を釣つて、捕へるのではあるまいか。こりや迂濶に近付い

てはならぬと、氣は付いたが、元來大好きの酒のことだから、立ち去り兼ねて、素敵に佳い薫りだ。遠くから薫りを嗅いでゐるなら大丈夫だ。いや少し位近付いても可からう。成程近く寄れば、尙一層佳い薫りがする。最う一と足位近寄つても大丈夫だらう。二歩、三歩位、なアに一間位は可からうと、次第に酒樽に近寄つて、淡黃色の酒の色を見ると、愈々堪らなく爲り、鳥渡甜める位は可からう。と、初めの内は、一本の指を酒に浸して甜める。二本位で甜めても可からう。三本四本も構ふまい。次には掌で掬つて、一杯位飲んでも可からう。二杯位は大丈夫だらう。なアに幾杯飲んでも醉はなきや大丈夫だ。醉つたからとて、彼の草履を穿かなきや可からう。草履を穿いたつて、踊らなきや大丈夫、踊つても倒れなきや大丈夫だと思ひ〳〵してゐる内に、遂に踊り拔いて打ち倒れ、そして人に捕へられたといふ話である。人間が惡に近づき、男が女に、女が男に近付いて墮落するのも、又此の猩々と同じである。

演劇や、淨瑠璃で名高い梅川忠兵衛の物語も、恁うした迷ひから、生じて來たのである。吾々はなアに一寸位といふが、其の一寸位が、既に奈落の底へ陷ち込んでゐるのである。少しでも心の傷みを感じ、良心のさゝやきがあつたならば、早く解決しなければならぬ。早く本心に從はうではないか。早く良心の命に潔く從はうではないか。心の傷が多く爲れば、最早永久に救はれない。傷は小ひさい内に、早く治療せねばならぬ。

無限に續出する吾々の妄想煩惱も、其の芽の小ひさい内に、早く切り採らねば、永久の幸福は來ないから、常に内外妄想の群魔を、斷滅せんとの誓願が必要である。人間である以上、穩いものよりも美しいもの、不味いものよりか美味いものを欲しがるのは、人情の常であるが、これを壓抑へて行くところに、修養があるのである。見たものを欲しがつては、畵家が見た通り糞までも描いた鷄同樣、何等の價値もないのである。一般の國民教育を受けた人ならば、取るべきものか、捨つべきものかの判別はつく筈、慾望の動くまゝ、生ずる儘に心が動いてはならぬ。これは唯に、これから世に出て行く靑年處女のみに必要ではない。大人も亦心懸くべきことで、内外の妄想の群魔の爲めに、身を滅し、家を滅してはならぬ。

▼怖るべき煩惱妄想の賊

或る相當の家の妻女が、夜店を見に行つた。すると種々の布切を賣つてゐる露店があつた。氣に入つた小切れがあつたから、それを一圓五十錢で買ひ、五圓の紙幣を出すと、生憎商人に剩錢がないとのことで、近處へ兩替に行つた。妻女は其時、並べてある小切れに目がくらんで、一と筋袂に隱して、素知らぬ顏をした。其處へ商人が歸つて來たから、妻女は胸の皷動を抑へつゝ、剩錢を受取り、愴惶として立ち去らうとした時に、商人は

『小切れはお忘れなさらぬやうに』

と意味あり氣に答へた。妻女は此の一言が、ギツクリ胸に釘を刺されるやうに强く感じた。

妻女は自宅へ歸ると、良心の苛責に堪へられず、其晩臥床に入つても、夜明けまで眠れなかつた。翌日に爲ると、前夜の露店の男が尋ねて來た。妻女は胸を聽かせ、そして顏色を變へた。これは前夜のことに違ひない、夫に知れてはならぬと、直ぐ密に十圓を渡し、內密にしてくれと賴んだ。男は其日はそれで歸つたが、其の翌日再び尋ねて來て、

『商賣上の都合で、是非とも五十圓要るから貸してくれ』

といふ。妻女は二十圓よりか持合せがないからといふと。これ程の家に棲まひながら、五十圓位の金がない筈はないと强持にいふ。妻女は仕方なく、夫の金を盜み出して其の男に渡したのであつた。そして妻女は、夫に秘密にしてゐる心の苦悶は、日と共に增すばかりであつた。寧そ夫に事の始末を白地に打ち明けて、懺悔せんかと、幾度も心に思はないではなかつたけれども、今と爲つて打明けもならず、自ら絢ふた繩で、自らの心身を縛して行くばかりであつた。例の露店の男は、常に彼女に蛇の如く、附き纏ひ、妻女が言ふことを肯かなければ、其の筋に訴へると脅迫しては、無理難題を持ちかける。遂に彼の女は、其の男の爲めに、貞操すらも穢さるゝに至り、自責の念の爲め、遂に身を河に投じて了つた。

人間は小ひさな躓きが、遂に身を滅し、家を滅すことに爲る。妄想煩惱の賊は、常に隙を狙ふてゐる。實に怖るべきものである。一つの煩惱を消滅すれば、一歩菩提の道に近付くのである。常に人間は神明を識り、佛陀を念じて、自己內心の妄想煩惱の賊を滅さねばならぬ。

小罪を輕んじて、罪とせぬ間に、雨垂れの力で、石に穴の堀れると同じく、決して油斷は能き

ぬ。其々教育機關が完備してゐる現代であるから、學校に於いても、質實剛健なれと、教へられはするが、通學の途中では、右も左も、惡魔が甘心を買はんとし、其の慾望を擅に滿足させやうと、種々と魔手を擴げてゐる。其中で唯一人、輕佻浮華の思想風俗より離れて、質實剛健と爲るのは容易でない。常に能く內外妄想の群魔を叱咤し、斷滅し、質實剛健ならんことを念じて行き、假令每日三分間でも可いから、照鑑文を讀み、自己を猛省して貰ひたい。

尙ほ世の智識あり地位ある人々は、宗教的言語動作を以て、自己の家庭を天國とし、己れの隣人を淨化せられよ。君等は吾々より數段高き人格者にして、君等の一擧一動は、一市、一町、一村と、滿天下に影響あることを誠愼恐懼せらるべきである。地位あり、智識ある人格高き君等は、現代社會の活ける人々の模範であると、深く自信して、愈々敬虔なる信念を以て、進まれたいと念ずるのである。

終りに臨み、未熟ながら衲が謹撰した照鑑文を左に記して置く。

○謹んで皇祖皇宗の國恩と、父母師長教養の恩德を感謝し奉る。

○謹んで神明佛陀の照鑑と、因果の應報あることを誠愼恐懼し奉る。

○謹んで內外妄想の群魔を斷滅し、質實剛健ならん事を宣誓し奉る。

◇無相の慈悲

▼哀心から流露する愛の心

無相の慈悲といふことは、『維摩經』にある意味のことであつて、無相といふことは無形といふ意味に似てゐるが、全く形の無いといふことゝは大に趣きを異にして、寧ろ時間と空間を絕して、終始渝らぬ、宇宙の本體といふ意味にも當るのである。又無爲實相といふ意味に爲り、又寂滅といふ意味にも當る。『金剛經』には實相とは無相なりとあるが、有形有相の本體は、結局無相といふことに爲るのである。

慈悲といふことは今更改めて說明するにも及ばぬが、梵語で『摩訶昧怛里也莎訶』といふ陀羅尼がある。摩訶は大といふこと、昧怛里也は慈悲といふこと、莎訶は成就と譯する。此の陀羅尼

は、觀音菩薩を拜する時に能く唱へるが、即ち大慈悲の本體の觀音菩薩に對して、摩訶昧怛里也莎訶即ち大慈悲成就せしめ給へと、自分が自分の本心の大慈悲心を喚起して、怒りの心、そねみの心を消散するの方便修行としては、洵に有難い意味が籠つてゐる。肇法師は、彼の衆生の長苦を憐れみ、自身を計らず、積むところの衆德を以て、一切に與へんことを願ひ、人を先きにして己れを後にする、是大慈悲の行ひなりといふてゐる。又生法師は、夫れ苦を拔かんと欲すれば、己れの樂を捨てゝ以て、之れを濟ふにありと註釋してゐる。語を換へて言へば、相手の人の聲色や、音聲の姿形に愛執の念を起さずして、吾が妻の有形の艶麗なる有相の妻を愛するでなくて、色も香もかはらぬ無相眞實の愛を垂れよといふことである。無相にして眞實なる子供を愛せよといふのである。

『維摩經』の觀衆生品に、

『爾時、文殊師利、維摩詰に問ふて言く、菩薩如何が衆生を觀ぜんや。維摩詰言く、譬へば幻師が所幻の人を見るが如くすべし。菩薩衆生を見ること應に此の如く爲すべし』

と云つて、左の如く說いてある。

『智者水中の月を見るが如く、鏡中の面像を見るが如く、熱時の炎の如く、呼聲の響の如く、空中の雲の如く、水の聚沫の如く、水上の泡の如く、芭蕉の堅の如く、電の久住の如く、乃至、十三入十九界の如く、菩薩の衆生を觀察することは、應に此の如くなるべし』

と。殆んど吾れに對する相手の人、吾の交はれる夫でも、妻でも、子でも、父でも、母でも、あれども殆んど無なるが如き、水中の月だの、空中の雲だのといふ喩を以て對機の衆生を觀察すべしと、維摩居士は文殊菩薩に答へた。これでは吾が妻を以て、空中の雲の如く思へ、吾が夫を以て、水上の泡の如く觀念せよ。吾が子を以て、鏡中の形像の如く思惟せよ。といふことは、少しく不道理に思はれるが、併し此處に妙味がある。

其處で、文殊菩薩は、維摩居士に詰問せられて曰く、

『其の答へは一應道理に似て居るが、一切の人をあれどもなきが如く觀念思惟したならば、菩薩として吾々が一切の人に對して、社會の衆生に對して、父母妻子に對しても慈悲の施し方がない

ではないか』

と。其時維摩居士が、衆生をして、人をして將に斯くの如く觀念せしむるも、既に慈悲の說法であるし、又人に對して慈悲を行ずるならば、無相にして眞實の慈悲でなければならぬと答へて、三十二通りの無相の慈悲を說いた。これが衲の言ふ無相の慈悲の根本である。

悲は說文に痛むなりとある。春女は陽氣に感じて悲しみ、秋士は陰氣に感じて悲しむ。其の物化に感ずるなりといふやうな古語もある。左傳に『慈者愛出二於心一恩被二於物一也』とあるが、洵に解り易い說明である。畢竟慈悲とは、衆生を自分の妻と同樣に感じて、衷心から流露する愛の心があらはれて、物に恩惠を及ぼすといふ事に爲る。併しこれが無相の慈悲であるから、世間一般の可愛女であるから慈悲して情をかけて憐愍するといふならば、無相の慈悲ではない。容貌艶麗である彼の男を婿に貰つて愛するとか、縹致が佳いから、妻にしてそれを慈悲するとか、彼れが吾輩にやさしく柔順であるから、彼れに恩惠を施すといふならば、これは皆凡夫の偏愛にして、無相眞實の終始變らざる慈悲とは言はれぬ。それは皆有相の愛執である。敵をも愛する、順の人にも、逆の人にも、慈愛の念を以て、愛護を施すといふが無相の慈悲である。

▼水中の月の如く觀念せよ

人間一生涯といふものを、五十年七十年と思ふから、油斷をしたり、毎日の職業にも退屈したり、人にも不實に爲るものであるが、夫婦、親子、主從、朋友の交りも、未來永劫今日の有樣で暮せると思ふから、夫は妻に、妻は夫に、上は下に對し、下は上に對しても、彼の人は六ケしい人だとか、氣に入らぬ長官であるとか、氣に入らぬ部下であるとか思はれて、三度に一度は、心にもなき無慈悲な輕蔑なことも口に發したり、分にあるまじき不平も起るのだが、今日の生活を維摩居士が文殊菩薩に答へたやうに、眞實に水上の泡の如く、水中の月の如くに觀念して、今日限りに明日は再び逢ふて共に語ることの能きぬ刹那の時間の交際であるとすれば、腹の立つことも、三度に一度は愼まれる。不平があつても、今日只今の一時間だけであるとすれば、笑つて職務にも忠實に竭される。人は心の持ち方で、雪隱掃除や、靴磨きをして一生を暮してゐても、又大臣に爲つた處が、不平不滿で、一生暮す人よりか、愉快に一生を暮すことが能きるのである。

無相の慈悲心を確信して、無相の慈悲心を體得して見ると、彼の謠曲にある山姥の如く、寒林に骨を打つ靈鬼の泣く〳〵前生の業を恨んだり、深野の花を供する天人の如く、前生の修善を悦ぶといへども、無相絶對の慈悲心から見たら、元より善惡不二であるから、何をか恨み、何をか悦ばんやである。

萬箇目前の境涯、懸河渺々として、巖の峨々たる又無相の慈悲の權化ならば、春の夜の一時を千金にもかへ難しとて、花の清香、月の影を喜ぶも皆慈悲心の光明である。一洞空しき谷の聲、無聲音を聞くたよりもがなといふ事もある。此の一洞空しきといふ、虛心平氣の無相にして、而かも山姥即ち自己本地の風光なる吾々が、共同生活の世の爲めに自性を變化して、一念化生の鬼女ともなり、種々さま〴〵の姿を目然に現はして、日夜忠實に活動してゐらるゝのも、又元より邪正一如と、無相の慈悲を徹見すれば、色即是空共儘に、一味平等共儘に佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もありて、山姥なる自己所在本地の精神が、慈悲の爲めには人に嫌はれても、憎まれても、社會の爲めには莫迦に爲つて、愚の如く、魯の如くなりて、山賤の樵路に通ふ花の蔭、休む重荷に肩を貸し、月諸共に山を出で里まで送る時もありて、恰も吾々が如何に多忙を極むる時でも、說敎して田夫野人を導くのも、即ち慈悲の修行である。

誰れしも此の心懸があれば、厭やな仕事も、愉快に趣味を以て爲される。趣味とか、信念とかの妙味を以て、毎日執務すれば、何んの苦痛もなく遣つて行かれるし、多忙の中にも亦一點の閑寂な境涯を練磨することが能きる。

永嘉大師の證道歌中の

『無相は空も無く、不空もなし、即ちこれ如來の眞實相、心鏡明かに鑑みて碍りなし、廓然として瑩徹して沙界に周ねし、萬象森羅影中に現す。一顆の圓光內外にあらず』

といふ一語は、無相の慈悲心を、韻文に書いたと云つても宜しい程の妙味がある。要するに、無相の慈悲にあらざれば、總て不實に爲つて、總てのことに安心して、樂んで面白く今日一日の職務を完全に勤むることは能きぬ。そして無相の妙諦から覺悟してする仕事には、失望も落膽もな

くなるのである。

◇投機の偈

▼機會は隨所にある

此心一了不二曾失一　利二益人天一盡未來
佛祖深恩難二報謝一　何居三馬腹與二驢胎一

此の詩は微妙大師の投機の偈である。投機といふ言葉は、東京なら蠣殼町、大阪なら堂島、其の外各地の米穀取引所で、常に使用してゐる言葉で、畢竟文字の示す通り、機に投ずること、言ひ換へると、良い機會を捕へて、それを逃がさないやうに、其處へ乘り込むことで、禪宗では投機といへば、機々投合の義で、多年修行の結果、或る機會に觸れて、大悟徹底して佛祖の大要大機に契合するのを言ふのであるが、各地の米穀取引所で言ふ投機なるものは、單に金儲けの爲めに、好き機會に乘ずるといふだけのことに止まつてゐる。何れにしても此の機會といふものは、

多くの人は稀れに起る一瞬時のことゝ認めてゐるやうであるが、實は機會は何時でもあるし、どんな所にもある。こちらに平素それだけの用意と、修行さへあらば、何物も又何事も、常に開悟の機會と爲り得ないものはない。それだから曉の明星ばかりが、大悟の機會と限つたものではなく、桃花を見て悟つた人もあれば、擊竹の音で悟つた人もある。或は泥濘で、辷つて轉んで悟つた人もあれば、雀はチユウ〳〵、烏はカア〳〵で悟つた人もある。機會は何處にでもある。一切萬事が眞理の表現であるから、隨處皆機會ならざるはないのであるが、如何せん衆生顚倒已れに迷ふて、物を逐ふが爲めに、機會の中にありながら、吾々は機會に投ずることを得ないのである。それで機會がない、機會がないと愚痴ばかり言ふてゐるのは、恰も水中に在りて、渴を叫んでゐるやうなものである。之れを要するに、何人でも眞面目に信仰を得たいとて、其の準備に怠らないならば、必ず何處かで眞理の機に投ぜられる。本當に煎じ詰めて、大死一番の境地に至れば、誰れでも必ず常機に投ずることが能きる。例へば金儲けに就いても、錢は何處にでもある。併しこれを吾物として儲けるには、機に投ぜなければならぬ。紙幣には、どの紙幣にも、何某と

記名したものは一枚もない。それを默つて取ると泥棒に爲るが、儲けて自然に取れるやうにすれば可いのである。其の金錢の機に投ずるのが、唯茫然してゐたのでは、得られないと言ふだけのことである。米穀取引所で、投機をする人の中には、儲ける人もあれば、損をする人もある。儲けた人は、其の機に投じたのであるし、損した人は、其の機を逸したのである。此頃世間で、不景氣〳〵といふが、不景氣で儲けてゐる人もあるし、景氣が好くて困る人もある。不景氣に投入して、金錢の大機に投ずる人であつて、おつき合ひに、不景氣で困る〳〵と言つてゐる人もある。

▼眞理の大機に投ぜよ

或る獵師が獨身で、貧乏であつたが、毎月或る僧に讀經を賴み、二錢宛布施を出してゐた。すると或る日二錢の金の持ち合せがなかつた。僧はそんなことゝは知らず、例に依り、讀經に來た。其處で獵師は困つて、豫て山から捕へて來て、飼養してゐた狸に、『實はこれ〳〵だから、濟まぬが鳥渡二錢銅貨に化けてくれ』と賴むと、狸は早速承諾して、どうせ化ける位なら、二錢銅貨などゝ、ケチな化け方をせず、五十錢銀貨に化けてやれと、見る間に五十錢銀貨に化けて了つた。獵師は之れを僧に布施したが、程なく狸が脂汗を流しつゝ歸つて來て言ふには、

『今日位苦しいことはなかつた。あの坊さんの家を出るや否なや、袂の中に手を入れて、毎も二錢しきや布施をくれぬが、今日のには緣にギザ〳〵があるのは不可思議しい。五十錢の銀貨をくれる筈はないが、ハテ二錢銅貨だらうか、それとも五十錢銀貨かと、捻り通しに捻られて、私はこんなに脂汗をかきました』

と閉口したといふ。これはホンの座興の滑稽話に過ぎぬが、味はふと一つの眞理が籠つてゐる。獵師が『今日は生憎錢がありませぬから待つてくだされ』と正直に猶豫を乞はなかつたのが惡いし、又狸が五十錢銀貨に化けたから不可なかつたのである。私は馬鹿だから何事も知らぬといへば、別段恥をかく事はないけれども、怜悧振る爲めに、思はぬ恥をかく人がある。併し幾月も家賃を滯らせて置いて、私は金がないと平氣でゐられては困る。こんな風をしてゐては、世間の人に笑はれるからと、內々で金を借り、身分不相應な事をする。そして次から次へと借金しては、愈々益々窮して來て、果は脂汗だらけに爲るのである。世の多くの人は、兎角物質に憧憬れてゐ

るが、淨裸々赤洒々の丸裸に爲り、眞理の大機に投じたならば、未來永劫破産はないのである。これが即ち前記の詩の起句の『此の心一度了して曾て失せず』である。世人が此の心靈の財産家になられんことを欲する。

▼悉く私の心の顯現

次には、自分一人ではない、承句の『人天を利益す盡未來』で、泥棒が盜んで來たものを、好きな女に與へやうとするから、更に物が欲しく爲る。自分一人なら、然う金も物も要らぬ。のみならず金が欲しいと思ふたら、木札か紙切に、欲しいだけの金額を書いて置けば可い。燒けたら又書き直す。一體心は何處に在るか、腦にあるとか、頭にあるとか、否な胸にあるとかいふて、種々に唱へて議論はするが、何處にあるとしても、此の書くのも、讀むのも皆心である。天地萬物皆悉く私の心の顯現したものである。これが本當に解つたならば、失ふことは能きない。本當に解れば、人天を利益せずには置かれぬ。盡未來救ひ通さう。助けつ助けられつするところに、妙味があるのである。

▼山川草木總て佛祖の賜物

前記の詩偈の轉句に『佛祖の深恩報謝し難し』とある、これに就いて說くことゝする。豐後國速見郡鶴見村に、一人の老婆があつて、何んでも佛祖の御恩であるといふ。飯を炊き損つても、佛祖の御恩だといふ。或る時誤つて、熱湯の中に手を突き込んで、火傷をした時にも、あゝ有難い佛祖の御恩で、地獄の釜も恁うあるぞと敎へられたのだと喜んでゐた。又或る時、道路を步行いてゐて、石に躓き怪我をしたが、其時もあゝ有難いことだ。世の中には危いこともあるぞと御敎へになつたのだといつて、手を合せて禮拜したといふことである。

こんなに恩德を感謝したならば、此の世の中に有難くないものは、一つもないのである。併し物質的には滿足であつても、精神的には滿たされない人が多い。金は幾ら澤山あつても、自動車や、汽車や、電車がなかつたら、鳥渡何處へ行かうと思つても、步行かねばならぬ。

或る所に豪い金滿家があつた。俗に鼠算といつて、鼠は子が子を生み、其の又子が子を生み、增殖することは一と方ならぬ。金も亦其の通りで、增加えると爲つたら、利が利を生み、其の增

すことは一と通りでない。

『こんなに金が増加えては、何うにもならない。ドシ〳〵使はねばならぬ』

と、圓タクに乘つて、百圓紙幣を出すと、

『恁う澤山戴く理由はありませぬ』

と九十九圓の剩りをくれる。

『ア、困つたなア、何うかして金を減らす工夫はないか知ら、然うだ何處か花柳界へ遊興に行かう。兎角遊里へ行くものは、金を湯水のやうに使ふといふから、幾らでも消費へるだらう』

と。其の金滿家が花柳界へ行つて、遊興を盡して、イザ勘定と、澤山の金を出すと、

『こんなに澤山金は要りませぬ。御勘定はこれだけです』

と豫期したよりも安い。遊里へ遊興しても、金は減らない。では一番米相場をして、ウンと損をしてやらうと遣つて見ると、損するどころか、豫期に反して儲かつて仕樣がなく、金は益々増加えるばかりである。相場も恁う儲かつては駄目だ。切めて泥棒でも入つてくれたら、說教强盜でも何んでも構はない。ウンと金束を背負はせて歸してやるがと期待してゐると、或る夜果して泥棒が入つた。占めたと金を澤山出して、さア持つて行つて呉れと頼むと、恁う澤山は持つては往かれないと、其の幾分かを持つて往き、數日の後、先日御貰ひした金で、一かバチかで相場をやつて見たところ、ウンと儲かりましたからと、其の泥棒が、持ち去つた金に數倍した金を持つて返しに來た。ア、又金が増加えたと困り、それからすること爲すこと、運拙く？金が増加えるばかりで、遂に金の置きどころもなく、山と積んだ金の中で、のたれ死にをしたといふ昔噺がある。金を多く有つてゐても、これでは困る。これが即ち物質的には滿たされても、精神的には充たされないのである。物質的といふよりも、山川草木水火皆之れ佛祖の賜物と感ずれば、此上もない幸福である。

▼宗教の本當の妙味

結句の『何んぞ馬腹と驢胎とに居せん』といふことで說明すると、馬腹と驢胎とは、畜生道といふ意味に取つてもよく、又自分さへ良ければよいといふ意味にも爲る。

南朝の忠臣藤原藤房卿の授翁宗弼禪師が、前記の詩偈を作つて、師匠の關山國師に呈出せられると、關山國師が、

『此の心何れの處にか在る』

と問はれた。すると授翁が、

『逼塞虛空』

と答へられた。心は非常に大きいが、五尺の身體の爲めに、束縛され勝ちである。併し此の宇宙間のありとあらゆる總てのものが、實は心の現はれである。如來の光明であると觀ずるのである。總てが心の現はれであつたなら、何ものも憎むことは能きないのである。宗教の本當の妙味は此處にある。何宗の心など思はず、何を通じて機に投じても宜しい。算盤の音でもよろしい。虛空に逼塞する心を體驗して貰ひたい。或は基督教からでも、天理教からでも、將た都々逸からでもよろしい。

基督教では『敵を愛せよ』などゝ、愛といふことを非常に喧ましく言ふが、其の博愛の本家たる亞米利加が、黃色を排斥するとは、合點が行かない。日本に永く來てゐた亞米利加人が、本國に歸つて、日本人を何んと評するかといふに、不可といふ。それなら日本人は不親切かといふに、親切だと答へる。何處が好かないのかと尋ねると、日本人は支那、朝鮮と同じく、劣等國民でありながら、優等國民らしい顏をするのが憎らしいといふ。それで博愛を標榜し、正義人道を說いてゐるのである。金には增減があつても、此の大心には少しも上下貴賤の別はない筈ではないか。

ところで關山國師は

『未審何を以てか人天を利益せん』

と問はれた。授翁は、

『行いては到る水の窮まる處、座しては看る雲の起る時』

と答へられた。

これは說明せぬ方が味がある。氣に入るやうに言ふと、何んと言ふか。風流にばかり考へずに、

行く時は何處までも、水の窮まる處までも行く、世界中の人が、皆預金を引出しても、自分は入用でなかつたら、少しも出さぬ。座しては看る雲の起る時と、悠然として騒がない。恁ういふ話は、少しも抹香臭くなく、ペンキ臭くもなく、宗教臭くもないであらう。唯活動すればそれで可いといふのではない。狼狽てゝ人の眞似ばかりするものではない。ヒョロ〳〵ばかりしてゐては駄目だ。精神の修養といふことが必要である。世間の人は、忙しい〳〵といふが、何が忙しいのであるか。些と修養したいが暇がないといふ。其の辯藝妓でも呼ぶ宴會などへは、萬障を繰り合せて出席する。何が繁忙なのだか分り兼ねる。『座しては看る雲の起る時』がなくてはならないのである。

其處で關山國師は、間髪を容れず

『佛祖の深恩如何が報ぜん』

と一歩を進められると、授翁は

『頭天を戴き、脚地を踏む』

と答へられた。手を動かし、足の踏むところ、悉く是れ佛祖の深恩報謝である。

『馬腹驢胎としてか入らざる』

と問はれると、授翁は無言で叮嚀に禮拜された。これは何んで禮拜されたのであるか、學者は何んとでも理窟を附けるがよろしい。授翁宗弼は無言で禮拜された。其處に味がある

關山國師は、此處で呵々大笑して印可し、更に大衆に告げて、

『汝等吾が禪を會せんと要せば、弼上人に參取し去れ』

と言はれた。

南朝の悲運に際し、割腹するより外なかつた藤房卿は、此時

『此の心一度了して曾て失せず、人天を利益す盡未來、佛祖の深恩報謝し難し、何んぞ馬腹と驢胎とに居せん』

と大悟して、爾來出世間に在りても、猶國家の爲めに竭くされたのである。世人も何かの問題の起つた時には、金錢の投機と同時に、此の心性の投機に心懸けられんことを願ふて置く。

◇茶禪一味

▼法源の古道場

鎭西飛錫の序、偶々博多千代の松原崇福寺に往き、大應國師の塔所を拜した。崇福寺は國師が宋域から歸朝せられた時創建された法源の古道場である。大應國師は現代臨濟一派の法脈初傳の高僧であつて、人も知る宋徑山靈堂和尙から兒孫日多の記別を受く。我國現代臨濟宗十四ヶ本山と獨立して、十四派に各々一管長あり、新古の歷史異るとはいへ、現十四派の管長何れも大應流派下の宗師家である。古は禪風二十四流に分れて、蘭菊美を爭ひ、各々芳香を放つて、それ〴〵一流の本山があり、その派下に法孫があつた。けれども今只這箇の一流のみ吾國內に隆盛を極むるのである。

大應國師下に大燈國師、關山國師がある。之れを應、燈、關の三祖といふのである。大燈國師は大事了畢後、五條橋下に二十年乞食非人の群に入つて聖胎長養し、終に大德寺の開山と爲り、關山國師は、美濃伊深山中に牛飼と爲つて、悟後聖胎長養し、勅命七度遂に妙心寺の開山と爲られたが、何れも崇福開山大應國師下の兒孫であつて、崇福寺は現代吾宗門法源の大根本道場と稱して、可なる底の尊むべき歷史を有する禪林である。門に入れば、老松般若を談じ、幽禽眞如を弄して、靜寂の氣人に迫るのである。境內に玄洋社志士の墳墓があり、松林深き處、舞鶴城中から鹽見、花見の二櫓を移轉して佛殿と爲し、小早川隆景の古城門を以て、方丈前の唐門と爲したるなど、坐に其の古が偲ばるゝのである。

▼六百年來の帆風門

方丈椽內にある橫嶽十景の掛札は、大德寺歷代名德の筆を刻したもので、古色蒼然覺えず人を吟賞せしむる。方丈裏面の庭苑は、總て大德寺流の平庭であつて、一隅に帆風門といふ六百年來の門がある。帆風の二字は、大應國師の筆で、雅致高遠言ふ可からず。帆風の二字を揭げて、恩師宋域徑山靈堂禪師を偲び、特に西南の方位宋域に向ひ、此の門に此の額を揭げられた。當時師資の道情こそ、一層有難く感ぜられた。

帆風とは『古帆未だ掛らざる時如何』『掛けて後如何』といふ禪門向上の公案によりて命名されたもので、殊に古帆、掛、未掛の因縁には、靈堂禪師が苦心せられたことは普説にある。此の因縁から大應國師が帆風と書かれたのであらうと、沈思佇立して去來共に兩忘した。萬籟師に導かれ、帆風門を開いて、黒田侯歴代の展墓をした。有名な黒田如水の碑文を讀んだが、碑石の大なる、彷彿として其人の面目を視るやうであつた。銀砂青松の間を逍遙徘徊し、書院から茶室を經て、主人公の丈室に入つたが爐中に微風幽松の響きを聞き、恍として物我相忘れ、寂寞たる天地に、何れの處よりか、天樂の妙音を送り來るかと怪しまれた。

室を松濤といひ、既に松風を吟味し、又帆風に萬感を惹起した。床には法雲和尚法語の一軸を掲げ、瓶裡の寒梅と玉椿とは誰が手すさびであるか、梅香室中に薫じて鼻を撲ち、榾柴を添へ得て、火桶の炭は清かつた。

萬籟師に進められて座に着くと、主人の代りに恭堂和尚が來て、茶を點じて優遇せられ、爐を圍んで、半日の清閑を消し得た。

▼幽寂の境涯

茶席の湯釜のたぎる音は、雀舌とか、遠雷とか、松風とか、種々詩人の形容した詞があるが、併し此の微妙の聲調を嬉しく樂しく聞くといふ趣味を解するには、餘程人世の辛酸を嘗めてからでないと難かしい。

博多に角屋榮太郎といふ人があつた。此の人が投機業に手を出して、七轉八倒の苦海に沈み、妻や子と同棲することが能きぬやうに爲つた時、馬關の中山寺の和尚が、有名な茶人であつたから、友人に誘はれて往つた。

茶室に靜座して、其の和尚の落ち着いた幽寂の境涯を見ると、いつしか自己の煩悶を忘れて、一碗の茶に俗腸を洗ひ去つた。

中山寺から歸つてから、茶道の奥床しさが身に泌みたので、成らぬ中から、一と通りの茶器を調へ、毎日毎晩獨りで立前を遣つて樂んだ。

或る夜のことであつた。餘り淋しいので、起きて湯釜に水を汲み、炭をついで湯を沸し、一と

手前遣つて、一服の茶に心神を淨うした。そして湯釜のたぎる音が、遠雷の如く、松風のそよ吹く如く、秋の夜の蟲の音の如きを聞きながら寢に就いたが、如何にも幽しさが堪へられぬ程であつたから、爾來毎晩、爐に炭を添へて、枕上夢圓ならんとする時、湯釜の松籟の聞ゆるのを無上の樂みとした。ところが友人が夜中に訪ねて來て、

『君は相場師で、如何に暴錢を儲けるからといふて、夜寢るのに炭を起して、湯釜をチン〳〵沸騰らして置くのは、贅澤ではないか』

と言つた。其時榮太郎が答へたには、

『至當な言葉だが、君も知らるゝ通り、失敗して親子夫婦の同棲も能きず、憐れ獨りで淋しく暮してゐる者が、何を樂しみに稼がうぞ。壯年血氣の私なれば、花柳狹斜の巷にも出入したい。或る夜餘りの淋しさに、茶屋へでも往つて、遊興しやうと思ふた時、寧そ湯釜に湯を沸して、松風の音を聞くが、何より手輕の樂しみと、深夜に庭の井戸から水を汲み、不調法な手前ながら、貴人の來客を迎へた心地に爲り、一服飲んで、湯釜の音を琴曲として聞きながら、臥床に入つて眠つた。それからは茶屋に遊び婦人に戯るゝ代りに、炭だけ贅澤ではあるが、毎夜湯釜の音を聞きながら、心靜かに明日の商賣を工夫して眠るのを例とした。元より奢りには相違ないが、婀娜たる美人を樂しむよりか、安直で、高尚である』

と。之れを聞いた友人は、榮太郎の風雅に感じ、それより無二の茶道の友達と爲つたといふことである。

心して聞けば、時計の軋る音にも、汽車の轣轆たる響きにも、人世の眞味は宿るのである。衲は崇福寺松濤室中の湯釜の沸騰る音を聞いて、如何にも嬉しく幽しく感じたのである。

◇南無の解

▼此の世界は諸行無常

南無といふのは、ナムといふ梵音に、南といふ漢字と、無といふ漢字を當て篏めたのであるが、何も此の二字に限つたのではない。文字は什麼でも宜しい。唯音を寫すのであるから、發音さへ

同じであれば差支ないのである。

それでナムといふ意義を譯して見ると、歸命とか、恭禮とか、恐怖、歸依、信從、信順、救我、屈請など、種々の意味を含んでゐるが、其中で歸命を取つて譯すると、歸命の歸は、至也悅也とあつて、遠方から久方振りで歸つて來た、喜ばしい嬉しいといふ意味があり、それから命の方は、業也、招引也、使也、敎也、道也、從也、召也と辭書にある。

其處で歸命といふことは、之れを他力宗の側から言ふと、本願召還といふて、如來樣のお言葉に、信順するといふことに爲るのである。歸命無量壽如來（ナムアミダブツ）といふのは、如は如々不動の義、來は來るで、不動にして來るの意で、又來るが如しである。阿彌陀佛とは、無量壽佛のことで、量られざる命といふことである。然るに世の中に於いて形のある物は、何物とも雖も變遷のないといふのは一つもない。限られたる命のものばかりである。其の世の中で、火に入れても燒けず、水に入れても溺れず、常に無量壽なるは何者かといふに、それは絕大の眞理其者である。畢竟成住壞空の理法に從はぬものは、天下一物もないといふ其中で、毫末も變遷のないものがある。それは何かといふに、絕體の眞理であるといふのである。此の眞理に立ち返らうとするのが、即ち南無阿彌陀佛といふので、阿彌陀佛に歸命するといふことである。此の面目を吾物にしたものが、信仰を得られた人といふので、此の眞理に投入することの能きた人は、洵に幸福のことで、安樂至極といふ譯である。

白隱禪師の粉引歌に『主心お婆々はいくつになりやる。わしは虛空と同いどし』といふことがあるが、禪師は右に言ふ眞理を主心お婆々と名附けたのである。此の根本に立ち返らうとするのが、南無とか、歸命とかいふのである。同じく白隱禪師の歌に『逢ふ時はわかれ路もあり願はくば身に添ふかげとなる友もがな』といふのがある。此の根本に立ち返へる、其の立ち返るべき方法を、吾等衆生に知らしめるのが、菩薩のお慈悲といふのである。之れを禪宗流に言ふても、又根本精神に立ち返れといふのであるが、要するに南無に歸着するのである。信仰の對照物を立て、之れに任するといふ方からいへば、無量壽佛の本命に歸歸するといふことに爲るのである。

それから南無を恐怖の意味に使ふのは、什麼いふ譯からかといへば、生死の險難を恐れて、早

く彌陀の本願に取縋るといふことである。總て佛道に入るものは、先づ無常を知るといふことが、最も早道であるといふのは、此の意味である。然らば如何にして此の險難を超脱し得べきかといふに、それは本命に立ち返る外はないといふのである。

『涅槃經』に、恁ういふ例話がある。

『或る人が、廣い野原を行く、蹤から狂氣した象が追ひかけて來る、隱れやうにも避けやうにも方法がない。不圖見ると、行く手に一つの枯井戸があつた、藤蔓が一本生えてブラ下がつてゐる。危險千萬のことであるが、此場合何んとも仕方がない。此の藤蔓を力とするより外に、賴むべきものは何もない。其處で其の藤蔓につかまつて、井戸の中へブラ下りながら、ズル〳〵と下つて行くと、下の方には三匹の毒蛇が、赤い舌をペロ〳〵出し、大口開いて一と呑みといふ勢ひで待つてゐる。ヤレ怖しやと四邊を見ると、此處には四匹の蛇が鎌首を擧げて、此方を見てゐる。こりや堪らぬと上の方を見ると、白い鼠と、黑い鼠とが、命の綱の藤蔓の根を嚙んでゐる。最早絶對絶命で危し怖しと思ふ瞬間、不圖口を開くと、蜜蜂の巣から蜜の一滴が垂れて、口の中に入り、其の甘露の味ひに、果敢なくも恐怖の念を忘れる』

と書いてある。此の廣い野といふのは世界のこと、象は無常の殺鬼、枯井戸は住家、四匹の蛇は地水火風の四大、三匹の毒蛇は貪瞋癡、藤蔓は人の命、黑白の鼠は晝夜のことで、吾々の此の世界は、所謂諸行無常で、暫くも變化なきを許さぬ。一時も安閑として居られぬ筈のものであるが、お互に目前の快樂に囚はれて、蜜に醉ひ、白い鼠と、黑い鼠とが、日夜吾が壽命を縮めて、藤蔓を嚙んで、此の命を細めて行くのを知らないで、浮れてゐるのであるといふ事を、誡められたのである。

▽愚癡は道理に暗いから起る

三界は猶火宅の如し、久しくとゞまる可き處にあらずと『臨濟錄』にも書いてあるが、此の三界は洵に恐ろしく危險の狀態にある。此の火宅の如き三界が、直ぐに又樂しむべき極樂であることは、それは畢竟本源に立ち返れば、手の甲が直ぐに手の裏といふた樣な譯である。

三毒といふのは、これが抑も迷ひの根本で、無明は迷ひの始まりであるから、理が明かに爲れ

ば、迷ひといふものはなくなる。罣礙する所がなくなるから、『般若心經』に故無有恐怖と爲るのである。

人は能く自分の勝手の慾を起して、滿足が得られないと怒り出す。怒るといふのは不德である。

『白隱廣錄』の中に、

『夫れ人は理に明かなれば怒りなし、理に暗き時は即ち怒る。人の我が意見に逆らふは、畢竟するに我が不德なるが爲め也。我が不德なるを基として、更に怒るは、是れ我に於ては不德を重ぬること也』

といふやうな事が書いてある。愚癡といふことは、道理に暗いから起るのであつて、因果の道理を明らめてゐるものには、愚癡は起るものではない。勝手の慾をばかき、これが思ふやうに行かぬと、腹を立てたり、愚癡を零したりするのは、折角自分は本來佛の德を備へながら、益々佛と遠ざかるやうなもので、洵に殘念千萬氣の毒のことであるが、歸するところは、皆是れ、理に暗きより生ずるのである。

出る息と、引く息と差引がないやうに爲ると、死ぬといふことである。死ぬといふことは、お互に取つて、一番怖ろしいことに爲つてゐるが、唯空しく死んでは不可ない。況んや死んで地獄へ眞逆さまに落ちるのは、更に無風流である。生きながら好い境涯を得るやうに、心掛けることが肝要である。大德寺の宗般老師が、未だ熊本の見性寺に居られた頃、一人の小僧が肺病に罹つて、命旦夕に迫つたので、德雲寺さんが非常に心配して、其の樣子を尋ね

『ヤレ〳〵死ぬのか、死ぬといふことは茶飯を喰ふやうなものぢやが、什麼ぢや死ねるかな？』

と言はれた。それから直ぐに宗般老師も見舞に來て下され、葬式の時には、引導を渡して下されたが、其折は一句言はれた切りで、泣いて了はれた。

天龍寺の滴水禪師は、相國寺の獨圓禪師と、頗る仲が好かつたが、獨圓禪師の病が危篤だといふことを聞かれると、取るものも取り敢ず相國寺へ見舞に行かれた。其時獨圓禪師は、竹陰の一室に臥して、蚊帳を垂れて寢て居られた。すると滴水禪師は蚊帳の中へ入り、獨圓禪師の體に跨つて、顏と顏と觸れるばかりに抱擁して、

『什麼だい病氣は？』

と訊かれると、獨園禪師は

『大に惡るい』

『迚も快癒らぬかい？』

『快癒らぬよ』

『然うか』

と滴水禪師は言つた儘、歸り去られたが、如何にも溫情が溢れてゐると同時に、洵に死其者に對して、光風霽月の如き俤が窺はれて、貴いことではないか。是等の境涯は什麼して得られたのであらうか。

吾々の今日といふものは、前に示した涅槃經にある通り、實に藤蔓につかまつて、井戸の中にぶら下つてゐるやうなものである。これは比喩といふばかりでなく、實際が其通りである。危險であり、不安であり、怖ろしいといへば、これ程怖ろしいことはない。淋しいと思へば是程淋しいことはない。賴りない悲しいと思へば、これ程賴りない悲しいことはない。けれども其時、其折心機を一轉させて、果敢ない藤蔓にぶら下りながら、南無と本源に立ち返つて見るが可い。小さな我を捨てゝ、大我といふて、此身を此儘大眞理に合一させると、臨濟禪師の言はれた如く、此の婆婆が即ち樂園に遊ぶやうに爲るのである。

洋盃に水を入れたとすると、其の水は、汲んだばかりであるから、清く澄みきつてゐるが、四十年も五十年も經過てば、不潔と爲る。吾々の身も心も、種々の滓や妄想で不潔と爲つてゐる。其の汚い水は、一念發起すると共に、南無と大海に投げ込むが可い、然うすると、直ぐに法界無量と同體に爲つて、綺麗な大きな水と爲るのである。

▼本源に立ち返へれば可い

南無とは、根本に立ち返るといふことである。南無に飛び込めば、災厄も煩悶もない。全く災厄も煩悶もないことに爲ると、始めて南無の有難い心持ちに爲る。人間が生れたばかりの時には、欲しいだの、憎いだの、惜しいだのといふ心はない。だから其の心も顏も、洵に綺麗である。そ

れに立ち返れといふのである。或る人は難儀に出遭ふと、何時も母の胎内から出たばかりの時を追想して、禍を轉じて福と心懸けたといふことであるが、頗る面白いと思ふ。

本源に立ち返るには、南無阿彌陀佛でも可く、又南無妙法蓮華經でも可く、無字でも可く、符牒は何んでも構はぬ、唯本源に立ち返りさへすれば可いのである。三毒の念が起つたならば、南無と一念發起せよ。我れといふ塊がなかつた時に立ち返れ。我れといふ五尺の身體に、繫縛せられてゐたのでは、縱令ば大海に投げ込んだ儘の鐵塊の如きもので、錆が附くばかりでは何んの効用もしない。唯其處に一念光明を發すると、煩惱即菩提で鐵塊が艦にも爲つて、人に役立つ事に爲る。此の心で煩惱を菩提と善用するやうに心懸けねばならぬ。

併し油斷すると魔がさす。魔は間で隙間である。隙間があると必ず魔がさす。隙間があると愚癡が起る。水も油斷がなければ、滾々と流れて、何時も清々しくしてゐられる。人間は心に隙間があつたり、ボンヤリして居るから間違ひが起る。何を信仰しやうと、それは人各自由であるけれども、何を信仰するにしても、南無の二字は、決して忘れてはならぬ。甚麼時にも此の二字さへ忘れず、南無と唱へるならば、決して間違ひは起らぬ。

嫁入りの時の心を忘れずば
聟や姑に嫌はれはせじ

といふ道歌があるが、『ア、又佛樣に見放されたか、さもしい心を起しては相濟まぬ』と氣が附くならば、間違ひは起らぬのである。

何事にも慣れると油斷が生ずる。隙間が出來る。親の有難いことも、飯の有難いことも忘れてゐる。伊勢國の或る處の某家に、姉妹二人の娘があつた。兩親は妹の躾方が嚴重であつたので、妹は常に兩親を怨んでゐたが、後他家へ嫁入をして、姑は休め〳〵といふのに、嫁は仕事をさせてくれ〳〵といふやうな有樣であつたから、嫁の評判は頗る好く、家内和合して、世間の模範とされたが、爰に至りて其の妹は、始めてそれは畢竟兩親の躾方が良かつた爲めであると了解が能きて、常に感喜の涙を流して、兩親の恩を拜謝したといふことであるが、油斷すると大恩も忘れ勝ちであるから能く注意せねばならぬ。

根源を忘るゝな、根源に立ち返れ、根源は抑も何んであるか、其の根源に立ち返るといふのが、修養の最も大切なところである。

法然上人が四國へ流された時の樣子は、甚麼風であつたか、日蓮上人の信仰の力は甚麼ものであつたか、何を基として得られたものであつたか、白隱禪師の修行中の苦勞は、何んの爲めであつたか。當時禪師が述懷の歌に、

忘れては寒しとぞ思ふ床の雪を
　拂ふ暇なき人もありしに

といふのがある。皆是れ南無の二字の爲めである。

南無の二字の中には、生れぬ先きの根本に立ち返るといふ、意味のあるのは言ふ迄もなく、同時に昔を思へ、昔を忘れるなといふことも含んでゐる。南無の二字さへ忘れずに居れば、大安樂大歡喜は覺めずして得られるのである。何事か起つた場合、然らざるも南無々々と我れと我れに廻向反省して、法喜禪悅を得られるやう、切に希望するのである。

◇碧巖錄より

▼圜悟禪師のこと

塵中塵、君看取、下二一箭一走三歩五歩、若活成レ群趁レ虎、正眼從來付二獵人一、雪竇高聲云、看レ箭。

これを平易に讀み下すと、『塵中の塵君看取せよ。一箭を下す、走ること三歩五歩、若し活せば、群を成じ虎を趁はん。正眼從來獵人に付す、雪竇高聲に云く、箭を看よ』である。

これは禪門第一の書と言はれてゐる『碧巖錄』の第八十一則にある一齣であるが、識者の爲めには無論說くのではなく、碧巖とはどんな書かといふ未知の人の爲めに、いはゞ老婆心で一言いふのである。本書の標題には、佛果圜悟禪師碧巖錄とあつて、其下に『師澧州夾山靈泉禪院に住して、雪竇顯和尙頌古を評唱する語要』と註してある。傳記の全部ではなく、僅に其の一端を述べると、佛果圜悟共に之れ諡號であつて、佛果は宋の徽宗皇帝から贈られた號、又圜悟は高宗

皇帝の諡し給ふところである。圜悟禪師は、臨濟宗第十世の孫で、諱は克勤、字は無著、彭州崇寧縣に生れ、俗姓を駱氏と云つた。其の生家は儒家であつて、少より師に就きて書を學ぶに、日々千言を計るといふて、常に他生の群を拔いて居つた。或る日のこと妙寂寺に遊んで佛書を讀むで三復し、恰も置き忘れたものを見附け出したやうな樣子で『余は殆んど過去の沙門なり』といはれたのである。これが抑も出家の因緣と爲つた。病に罹り、死に瀕し歎じて言はれるには『朝に道を聞いて、夕に死すとも可なり。諸佛涅槃の正路は文句の中にあらず』と。去つて照覺寺の勝公に相見して、心要を尋ねられたところ、勝公臂を刺して血を出し、『これ曹溪の一滴なり』と言はれた。これが六祖より傳はるところの活き血でござるといふのである。併しこんなことでは無論宗旨が現はれない。又去つて一鉢を手にし、徒步遍歷して大潙の喆禪師、晦堂心禪師等に參じ、廬山の聰禪師に見え、至るところ法器といはれたけれども、最後に龍舒の五祖法演禪師の下に至つた。其時演禪師の榻下に禮して、佛法の大意を問ふ者があつた。演禪師曰く『汝嘗て小蘗の詩を讀みたりや否なや』と。此の詩の兩句は、宗旨上のことに能く似てゐる。詩に曰く『頻りに小玉と呼ぶも、元より無事、祇担郎が聲を認得せんことを要す』と。其の意味は頻りと小玉の名を呼んでゐるけれど、其の名を呼ぶが主ではない。其の聲を認得せしむるを以て要とするのである。禪宗に於いても亦然うである。既に不立文字と立てゐるのは、靈山拈華微笑の些子を傳へんが爲めに外ならぬ。圜悟禪師は此時演禪師の傍に侍立してゐて、之れを聞くと豁然として大悟せられたのである。いふまでもなくこれ迄には參究に參究を積んでゐられた。其處で圜悟が、法演禪師に向つて言はれたには、『今日胸中の物を去却して、目前の機を裹盡し、安んずることを得た』と。法演禪師が圜悟に告げて言はれるには、『如是、如是、吾が宗既に汝を得たり。吾れこれより枕を高うし、身を安んずべし』と。恁うして圜悟禪師は道に入り、一世宗旨を興隆し、紹興五年七十三歳で示寂せられた。

▼雲門の中興雪竇和尚

雪竇和尚は、明州雪竇山の第六世明覺大師で、諱は重顯、字は隱之、俗姓は李氏で、宋の大宗太平興國五年八月を以て、遂州に生れられた。生れて瞑目して眠るやうであつたが、三日目に初

めて目を開いたといふことで、既に此時奇瑞を現はしたのであつた。幼にして普通の小兒の如く戲れ遊ばず、其の七歳の時、或る僧が門前を過ぎたのを見て、袈裟を持つて喜び、梵唄を聞いて、涙を流したといふ事である。父母が其故を問ふたところ、出家に爲りたいと答へられた。けれども父母が、それを許さなかつたので、食せざること累日であつた。其の後父母が死去したので、宿願を成就し、出家して益州普安院仁銑師の弟子と爲られた。時に大慈寺の僧元瑩といふ者が、定慧圓覺經の疏を講じた。雪竇其席に加はつて大義を問ふた。

『吾等本來佛である。何んぞ妄念妄想の中に在りて漂沈せんや』

と。其夜再び大に辯論し、滔々所解を述べて盡きず、遂に元瑩も言句に窮し、謝して言ふには、

『子は敎に滯るものにあらず、聞く南方に諸佛淸淨法眼を得るものがあるから、子それに從へ』

と。元來禪宗は江南の方面に盛んであつたから、行きて石門の聰和尙に相見し、居ること三年、後辭して隋州智門の祚禪師に參し、後明州の雪竇山に移り、大いに宗風を揚げられた。世稱して雲門の中興と稱してゐる。『碧巖錄』は『碧巖集』ともいふてゐる。碧巖の二字は、圓悟禪師の棲まはれた澧州夾山の靈泉院といふ寺の、方丈に掛けてある扁額中の二字で、それを取つて『碧巖錄』と名附けたのである。其の『碧巖集』は素より圓悟禪師の手に依つて成つたものであるが、元來雪竇重顯禪師が、古人百則の公案を、偈頌にせられたものを評唱せられたのであるから、標題下に雪竇和尙頌古とあるのである。其の古人の問答說話を指して、公案ともいひ、古則ともいふのである。其の詩を呼んで頌といふ、詩といつたところで、世間の詩とは違つて、古人の公案に對して、風流の中に眼目を加ふるので、敢て理窟を揑ねず、天然其儘に宗旨を歌ひ出すのである。其の雪竇の頌古は、一冊子と爲つて、世に持て囃された。すると宋の徽宗皇帝の時代に、圓悟禪師が出て、大いに雪竇の頌古を受誦し、一則毎に小序を附け、そして其の本則及び頌の一句毎に短評を加へ、又本則及び頌に批評を加へた。其の批評を呼んで評唱といひ、短評を稱して著語といふ。小序は即ち禪師が、弟子を指導せんが爲めに加へられたもので、之れを垂示といふてゐる。だから『碧巖錄』は、雪竇和尙の集められた本則と頌と、圓悟禪師の垂示と著語と評唱とを合せたものである。

▼三歩と五歩

前述の中『三歩と五歩』といふことに就いて說くが、これは昔藥山和尙といふ大善智識があつたが、其の藥山和尙に、或る一人の雲水僧が、

『平田淺草、麈鹿群を成す、如何か麈中の麈を射得せん』

と質問した。平田淺草とは、日本でいへば、各務ケ原とか、三方ケ原とかいつたやうな廣い野原のことで、其處には何千疋といふ鹿が、群を爲して遊んでゐる洵に良い狩場である。同じ射止めるものならば、麈中の麈即ち鹿の中の頭といはるゝ大鹿を射止めたいと思ふ。それには何うすれば可いかといふ質問である。質問した雲水僧は、自分が群鹿中の頭だといふ勢ひで、其の鹿の頭を、何うして射止めることが能きるかと尋ねたのである。すると藥山和尙は、

『箭を看よ』

と答へた。答へたといふよりは、大光明、大力量を面前にサラケ出したといふた方が可い。藥山和尙が恁う答へるや否な、『僧便ち倒る』とあるから、其の僧は其處へバタリと倒れたのである。

藥山和尙は其樣子を見て、

『侍者此處に死人が倒れてゐる。目障りだから、そちらへ引きずり出せ』

と命ずると、死んだ筈の雲水僧が、起き上つて、ノコ〳〵遁げ出して了つた。

『僧便ち去る』といふところへ、藥山和尙は

『泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん』

と評したが、後に有名な雪竇禪師が

『三歩に活すと雖も、五歩には須く死すべし』

と書き添へた。其の意味は

『三歩は活きられやうが、五歩目には、何うでも死なねばならぬぞ。二重三重は積み重ね得ても、五重目には倒れるぞ』

畢竟最初の中は、幾らか活作略もあるやうだつたが、結局は死物と爲つたといふ程のことで、此の言葉の機關と云ふか、氣合といふか、機會といふか、何れにしても此の言葉を、各々は日常

の上に應用して貰ひたい。禪學とか、禪とか難かしい話は別としても、恁ういふ言葉を、吾々が人間生活の上に味つて見たり、嗅いで見たりしてゐると、世間に能くある慘めな破滅といふことは、少くなるであらう。

▼五歩には須く死すべし

三歩に活したところで、其儘五歩も十歩も、活潑潑地に活きて行かれる者には、他人に迷惑をかけるといふことはあるまい。此の質問を發した雲水僧も、箇を見よと言はれて、バッタリ倒れて、死んだところは、洵に良かつたのであるが、本當に徹底して居らぬから、死人扱ひにされるに至ると、膽をつぶして、ノコ〳〵と起きて遁げ出し、醜態を人前にさらけもといふことに爲つたのである。併し恁ういふことは、世の中にも能くあることで、世間を渡るには、餘り利口では不可ない。馬鹿に爲つてゐるに限るといつて、或る期間は、馬鹿の眞似をして、自分を誤魔化して居つても、世間の人が、本當に馬鹿にすると、其時は怜悧な口答へや、理窟をいひ出すことに爲る。『三歩には活すと雖も、五歩には須く死すべし』といふ語に徹底せぬと、最後は駄目である。行き詰るにきまつてるといふ意味が含まれてゐるのである。譬へば虚榮心の強い人が、自分の實力以上の交際をせん爲めに、こんな風では、他人に笑はれるとか、こんな住宅では、世間に對して肩身が狹いとか云つて、實力以上の堂々たる邸宅を造つたり、立派な服裝をすると、三歩には何うか恁うか誤魔化して、威勢も良ささうに見えるが、五歩目には必ず行き詰つて、我れと我身を苦しむるに至るは、當然のことである。況んや大厦高樓などに棲むと、裏長屋に謙遜して、生活して居つた時とは違ふて、嘗て想像して居つたやうに、樂なものではない。氣持のよい氣の合ふた人ばかりが訪問してくれるといふ譯には行かず、裏長屋に居つた時には、親類も他人顔して訪ねてもくれず、盆正月の挨拶もしなかつた人もあつたに、今度は親類の又々親類の人まで、近い親類顔して訪ねて來る。そればかりではない、寄附金、無心、合力、社會事業などいふことに就いても、富豪のやうな家に棲んでゐれば、富豪のやうな交際をせねばならぬから、常に苦痛と、不愉快とは免れぬ。

▼虚榮の借着は不可

昔から『面の赤からんよりは、語の直きに如かず』といふ語があるが、一時は言葉で誤魔化しても、後に赤面して、赤恥をかくよりか、初めから有るものはあるなり、無いものは無いなりの方が、全く氣樂で、愉快である。

慈雲尊者の語に『今日は今日にてよし、此處は此處にてよし』といふ有難い誡めがあり、又『無門關』といふ書に『春に百花あり、秋に月あり、夏に涼風あり、冬に雪あり、若し閑事の心頭に懸ることなくんば、洵に是れ人間の好時節』とある。京都天龍寺の峨山老師は、常に『人間は恥を知るといふことが一代の修行だ』といはれた。前科數犯といふやうな常習犯罪者は、此の廉恥心の感情が、甚だ薄弱である。恥を知るといふことは、修養の一大事であるが、恥の知り方が、物質的にのみ人格者たる價値を示さう爲め、身分不相應の見榮や、風采を作つて、人中へ出て、其場は貴い人のやうに見せかけても、借り物の衣服では駄目である。西洋のお伽噺に、虚榮心の强い婦人が、夜會のダンスに招かれて、ダイヤの頸飾りを友達から借りて行つた。其夜は貴婦人然として、盛んに踊つてゐたが、踊る拍子に、頸飾りの紐が切れて、幾つかの珠が紛失した。それから其婦人は、紛失しただけのダイヤの珠を、元の通り補充して、貸主に返すと、間もなく行衛不明に爲つた。三四年の後、其の貸した婦人が、借りた婦人に、不圖した所で逢ふと、其婦人は如何にも零落して、憐れな有樣をしてゐたから、其後の樣子を訊くと、

『實はダイヤの頸飾りを辨償する爲めに、殆んど所有品の總てを賣却して了ひ、其の爲め貧窮に貧窮を重ねて、かゝる始末であります』

と語つた。頸飾りを貸した婦人は驚いて、

『それはまア飛んだ御迷惑をかけました。實はあのダイヤは僞物の贋造玉でしたのに、飛んだ御苦勞をかけました』

と、深く詫びたといふ話がある。初めから無い時は、無いまゝで交際したら、こんな恥かしい苦勞はしなくつて可かつたのである。帶がないから、人に笑はれる。家が小ひさいから、近所の人に笑はれる。貧乏だから近所の人に笑はれるといつて、無理な工夫工面をして、實力以上の生活振りをして、あの人はあんなに華美な生活振りだが、内實は借金で首が廻らぬのだと看破された

時は、三歩で笑はれた以上の赤耻であり、五歩には須く死すべしである。

▼心に錦を着た乞食

笑はれるから耻かしいといふ廉耻心、羞耻を善用すれば、向上し發展もするが、惡用されたら、それこそ生涯心の安まる時はない。唯笑はれるから耻かしいといふ一念を、最少し內面に精神的形而上的に、お互に深く感じなければならないと思ふ。世の中には立派な財產家でも、貧乏人に劣る人があり、貧しい賤しい人でも、心の貴い人がある。昔京都の街路を、物貰ひしながら、辛くも露命を繫いでゐた乞食の老婆があつた。名をお龜といつた。或る日のこと、三條通りに來かゝると、財布が落ちてゐたので、それを拾ひ上げた。其時お龜婆々は心中に、落した人は、嘸かし困つてゐるであらう。一刻も早く屆けて遣りたいが、何處の誰れだか分らぬので、何うしたものであらうかと思案にくれてゐたが、不圖考へついて、傍なる物商ふ家に立ち寄り、財布を示して、

『落した人が、必ず此處ら邊りを捜しに見えるだらうから、其時これを渡して下さい』

と懇ろにいふと、其の家の主人は、後に掛り合ひに爲るやうなことがありはしないかと不安に思つたらしく、

『私の家は、此通り商賣が忙がしいから、とても預つて置くことは能きない』

と體よく斷つた。之を聞いて乞食婆々のお龜は、顏に眞心を現はしつゝ

『嘸や落した人が、困つてゐなさるだらうと思ふならば、お前さんも人の難儀當惑を思ひ遣つて、預つて下さい』

と事を分けての賴みに、其商店の主人は、非常に感服して、實に見懸けに寄らぬ感心な者だと、お龜の美しい親切な心に動かされて、快く承諾して預かることにした。すると案の如く程經て、落し主は失望の淵に沈みつゝ、顏青褪めて、落膽の色に蔽はれつゝ、其處此處と捜しもとめてゐるのを見た商店の主人は、呼び止めて尋ねたところ、遺失者に相違なかつたので、財布を渡し、且つお龜のことを、仔細に語ると、落した其人は大いに喜び、早速乞食婆々のお龜の在所を尋ね、禮として金と米とを與へやうとすると、お龜は

『貴方は、妾を賤しい乞食と蔑みて、贈り物を爲さらうとするのでせうが、拾つた財布を、落し主に返すのは、當然の道理ではありませぬか、妾は乞食ではあるが、肚の中まで物貰ひは致しませぬ』

といつて、其の贈り物には手も觸れず、立ちどころに、

物持たぬ袂は輕し夕涼み

と俳句を詠じ、何處ともなく立ち去つたといふことであるが、實に此お龜の如きは、身に襤褸を纏ふとも、心に錦を着てゐるといふべきである。

▽懷中に爆裂彈

人間が正直で、正しい心で、美しい生活をするならば強いものだと思ふ。自分の力で能きないことを能きると言ふたりして、一時は誤魔化して、三歩には活すと雖も、五歩には須く死すべしだ。表面を誤魔化して、二三年は濟ましても、五六年の後には、誤魔化し切れなく爲る。昔嘲に百萬長者と言はれた大商人が、四五年不景氣が續いた爲めに、毎年損失が重り、五千兩程の負債が出來た。其の主人が、一家一門の人を集めて、

『知らるゝ通り、毎年の不景氣にて、損失が打續き、到頭五千兩程の借金が出來た。こゝらで一と先づ張り切つた帆を下して、身代を取り縮め、交際を少くして、賣るべき品物は、惜し氣なく賣り拂つて、五千兩の借金を支拂ひ、そして本當の力を充實したい。然うすれば又商賣發展の方法もあらうから、斷然縮少して、一時も早く借金を支拂ひたい』

といふと。一家一門番頭手代一同が口を揃へて、

『それは不足言らぬこと、御當家などで、五千兩位の借金で、そんな御心配は御無用でございます。これが五萬十萬といふ借金ならばまだしも、三千や五千の借金で、そんな不足言らぬ御量見は、取り越し苦勞といふもので、今更縮少しては、近所界隈へ恥かしいから、今暫く辛抱したら、又取り返しも付きませう程に、唯今の御意見は、取消しに致したい』

と言つた。すると主人は頭を横に掉り、

『いや〳〵兎角貧乏は、早く取り越して、恥かしい思ひを早くして、處分するのが可い』

と言つたとの事であるが、五千兩の借金が出來たのは、五千兩の借金で、即ち五千兩の貧乏である。此儘毎年五千兩宛借金すれば、六年の後には三萬兩の借金が出來る。今三萬兩の借金をした積りで、五千兩の貧乏を處分するやうに、萬事を取締めて改めたならば、心に二萬五千兩の餘裕がある。少しでも借金してゐては、利を見ても進むに勇氣がない。大改革して、總ての遣り口を改めて、無駄事を省いて、五千兩の借金を返濟して了つたところ、兩三年後には從前に數倍して、繁昌の店に爲つたといふ話がある。これは三歩に、徹底的大死した結果、五歩に活現したのである。併しながら眤と貧乏を悚へ、張り切つて、シャボン玉のやうに行つたら可いか、それは衲は知らぬ。又話は違ふが、青年血氣の人が、文藝とか、創作とか、藝術の參考だとか言ふて、カフェーなどに行き、美しい給仕女と懇意に爲り、そして一人の可憐な純眞な少女を救濟するといふやうな慈善心を起したとする。他人に同情して、救濟するには、金が要る。書生や奉公してゐる身は、一ヶ月の學資を誤魔化して、少女を救濟して、虛榮心を滿足したとか、又主人の金品を誤魔化して、一歩二歩は可し、三歩四歩は、言葉の先や、筆の先で、帳簿を誤魔化したものが、末には拔き差しのならぬ惡魔の世界へ足を踏み込んで途方に暮れ、生命懸けで惡事の計畫をしてゐるやうな人も隨分ゐるやうだ。

人問はゞ兎にも角にも言ひ果てん
心が問はゞいかに答へん

で、三歩に活して喜んでも、嬉しくても『獄樂極つて哀情多し』で、愈々五歩六歩の行き詰つた末は苦悶懊惱、死んで社會への大恥さらし、親族一同へまで、永久の恥辱を與へる人の多いのを、衲は遺憾に堪へぬ。他人の愛情や、他人の親切を受くる人にしても、友人の爲替を瞞着したり、主人の帳簿や、店の金を誤魔化したやうな、不純な穢れた金で、親切厚意を受けることは、懷中に爆裂彈を捻ぢ込まれて、喜んでゐるも同樣である。

▼精神的大富豪と爲れ

一家の主婦たる妻君が、虛榮の爲めに、身分不相應な生活をして、華美な服裝を爲し、貴婦人然と構へるので、費用がかゝり、それを苦にして、病氣に爲つて死んだ主人がある。又兩親が餘

りに嚴重過ぎて、話せば叱られる、告げたら小言を言はれると、兢々としながら、一歩一歩魔道へ踏み込み、揚句の果に心中をしたり、自殺したりして親を泣かせ、自身も亦前途に光明ある身でありながら、後の世までも、恥を殘す青年もある。過つて罪を犯したならば、速に懺悔して、悔い改むる勇氣が欲しい、人として神ならぬ身の、過失なしとは言はれぬが、過つたらば、心の底から懺悔して、悔い改めねばならぬ。其時の愉快、罪を悔い改めて免された時の愉快は、其人でなければ想像も及ばぬ。心から悔い改めた人を免さぬのは、罪を犯した本人よりも、又罪が重いといふことが、佛の戒律にある。

死ぬるより外はあらじと思ふ時
振り返り見よ世は花の春

といふ和歌がある。死を以て懺悔するといふことは、洵に尊いのである。キリストの語にも『生命を保たんとする者は之を失ふ、我が爲めに失ふ者は之を得る』とある。虚僞の生命、罪の生命、私心の生命を保たんと思ふ者は、之を失ふといふて居る。

所謂二歩に活すと雖も、五歩には須く死すべしである。而して我が爲めに失ふ者は、之を得るとある。我が爲めといふキリストの我は、我見我慢の我ではなく、絶對の大我、神我であらう。絶對の神の御心に打ち任せることであらう。然れば神の御心、佛陀の大悲の心、大いなる慈愛の御心の爲めに失ふといふことは、妄見、妄執、私の愛着、愛執を絶對の聖き公明正大なる大眞理の爲めに淨化して、私の生命とか、私の愛だとか、私の小さき慾望とか云ふものを神に捧げるといふが、然ういふ大きい心持に爲つた時は、少々の病氣は全快する。又私の愛着、私の慾望で、盲目と爲つた時は、神にも、佛にも見放された人といふのである。

切望淨き正しき宇宙の大道に、身も心も打ち任せ、精神的大富豪、精神的大紳士と爲つて貰ひたい。佛敎では慈悲喜捨といひ、又心身共に捨てる、之を大捨といふて、私心の愛着妄執を捨てるのである。此の喜捨が能きなければ、如何に三歩五歩の活潑な面白いことであつても、最後は取り返しのつかぬ世間へ恥晒しか、狂ひ死にか、空を摑んで、跪き死にかする外はあるまい。親しい夫婦と雖も、衣服の袷のやうなもので、死に別れるか、離別をするか、合せた衣服が二つに

爲る樣なものである。幾億萬圓の財寶を積み上げて、友人を招いたり、招かれたりして、互に羨ましがつたり、羨ましがられたり、喜んだり、何千坪の宏壯な大邸宅に、得意に爲つて居らるゝのは、一寸三歩に活したところだ。殘念ながら大悲大捨の心のない繁榮は、砂上の樓閣か、噴火山上の樂園である。五歩には必ず死すべき運命を有つてゐる。各自の智識や、能力や、掛引や、權謀術策を廻らして、直接間接に罪を造りつゝ、儲けた幾千萬圓の資産も、人々から羨ましがつて貰つたり、欲しさうな顏附してくれる人がなかつたら、定めて淋しいことであらうと思ふ。有る人が、無い人に施すのも慈善事業だが、無い人が有る人の財産を羨ましがつてやるのも、一つの慈善事業であらう。併し有る人が、財産の施し方も、無い人が羨ましがり方も、却々難かしいものである。兎も角有る人も、無い人も、互に永遠に渝らざる如來の御言葉を信じ、上下各自にそれ〴〵が、如來の御姿であると、相互に合掌し合ふて行きたいと思ふ。

◇天地と共に喜べ

▽佛陀大悲の喜び

『どなた樣も大層御喜びでございました。何か知ら御禮は言葉に盡せないと、喜んでおねでした』

『餘りの嬉しさに、兩手を突いて唯泣くばかり』

『あゝ今日は、大勢の人が喜んでくれて嬉しかつた』

『妻や、子供が喜んでくれて嬉しかつた』

『女中や、下男までが、喜んでくれて嬉しかつた』

『なにが！閣下が、御滿足の御樣子で、御喜びでありました』

人としてこんな挨拶や、報告や、樣子を聞いて、心に喜ばぬ者があらうか。

長れ多くも聖上陛下が、龍顏麗しく喜ばせ給ひてと、國家國民が御上の御喜びを喜ぶ時、これぞ國土の喜びといふべき喜びである。

一切衆生が、轉迷開悟して、無所得の心の春を迎へ、法喜禪悅の歡喜踊躍を見て、喜びとする

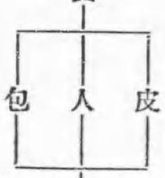
は、佛陀大悲の喜びである。

年末年始、又は中元に、華やかな進物を贈答して、喜びの交換するも禮儀ながら、人を喜ばす心を以て、二人、三人、五人、十人、百人、千人、幾十萬人の公衆を喜ばす心を、互に廣く養ひたいものである。

吾が子を喜ばすのみの喜びは、犬でも猫でも能きる。吾が妻のみを喜ばすことならば、鶴でも燕でも能きるのである。

自分の心の合ふた友達を喜ばすことは、世に盜人といへども、必ずあることである。親を喜ばせ、妻子を喜ばせ、兄弟を喜ばすやさしき心の無い人は稀なるものである。それすら今は、親を喜ばすことは、人間の情の僞善なりとて、先づ吾が妻を愛し、吾が子を喜ばせて、其の餘れる時間に、親を喜ばす傾向がある。動物の情より見れば、それでも可いが、人間の至情ではないのである。又親も、妻子も、家庭をも、暗黑にして、只すら世間の功名富貴にのみ走つて、親を顧みず、妻子を淋しく冷酷にして泣かせて置き、猥りに他人の歡心を買ふて、喜ばさんとする人がある。洵に唾棄すべき行ひといはねばならぬ。喜といふ字は、象形文字で、上部の壴の字は、鼓といふ字の略にて、樂器の大切なるもの故、音樂の意を代表して居る。即ち音樂の絶妙に感じて、思はず口を開きて、笑ふといふ意味より、壴と口とを合せて、喜といふ字が生れたのである。

鼓聲三因



和合出レ聲ヲ

鼓聲を聞きて、笑ふといへば、『大經』に

といふ說がある。喜といふ字から聯想して、靜かに味はふと、面白い眞理がある。

『大經』の鼓聲三因は、皮と、人と、包と三つが和合せねば、聲が出ぬとの比喩で、元來喜の字には、何んの關係もないが、歡の字は、人と和合してよろこぶ。喜の字は、鼓聲を聞いてよろこぶとの意味であるが、偶然にも三因和合して聲を出す、其聲を聞いてよろこぶのが、喜の字とは妙味がある。

天、地、人、三つのものが和合して、春を喜ぶやうな意味に考へて見ても、又よろこびが深い。

▽各階級其々喜ばせよ

君と我れ二た本の木の立つがごと
たゞならぶのみたゞ立てるのみ

では、歡喜は湧き出ない。冷たい鐵柱の如き人が、二人行儀よく並んでも妙味はない。君と我の中へ、言葉といふ花が咲いたり、食物といふ共通の薫りがしたり、衣服といふやうな彩色が、目に見えたりして、人と人との間に、心が通ずるものがあつて、それが心と心に通じて、初めて嬉しさの餘り、喜びに堪へぬとか、此の御親切は、百年生きても忘れぬとか言ふて、破顏微笑喜びの色を表現するものである。然りながら小人物と、大人物の等差は、人を喜ばすことの高尚にして、正義であつて、そして其力が、一人より五人、五人より十人と、多く及ぼす人と、少い人とに依つて決定せられなければならぬ。又喜ぶ人、喜ぶ群衆も、正義の人、高尚の人でなければならぬ。品性の下劣な、人間としての教養も、人間としての修養も、人間としての心懸もない野獸も同樣な群衆群盲に迎合して喜ばれても、それは大人格者とはいはれぬ。それは釋尊の如き、基督の如き、孔子の如き、或はそれに近き人格者でなければならぬ。容易に得られぬことである。それが能きぬとすれば、吾々は能きるなりに、先づ自己の天職、自己の天分、自己の天性に適したことを、唯驀地に進まう。

踏まれてもやがて花咲く福壽草
手折られし袖に薫るや梅の花

幸ひにも梅が、禁裡御所の御庭に植ゑられても、得意に爲つて、枝を伸ばすでもなく、又山間僻地の野末に生ひ立つても、のんびりと枝をぬきんでて、薫り高く咲き匂ふて、無風流な名もなき田舍人に手折られながら、仇せる其人の袖にも薫るやさしさは、大宮人を感歎せしめ、神も佛も喜び給ふ無功德の喜び、無所得の喜びではないか。梅としての立身出世は、宮庭に限ると言つて、悉く全國の梅を、御所へ献上し、移植することは、梅も御庭も兩方とも喜びとはなるまい。同じ福壽草と生れても、野道に生じて、草運の拙さは、空しく馬蹄に踏み躙られて、憐れな枯草

の中から、霜柱の間に頭を出して、美しく天分の花を咲かせて、人を喜ばせてゐるものもある。又縁あつて總理大臣の應接間に、庭師の手から、鉢植にされて、暖爐で燻ぶり、熱くて堪らぬやうな所に、一滴の水さへ、給仕の不實から忘れられて、咲くべき花も咲かずに了ひ、出世して却つて憐れな最後を遂げる福壽草もある。愚なる者は愚で、一人でも多くの人を喜ばせたい。

『賢い人は、賢いなりに、一人でも多くの人を喜ばせて貰ひたい』

『貧しい人は、貧しいなりに、一人でも多くの人を喜ばせやう』

『富める人は、富めるなりに、一人でも多くの人を喜ばせて貰ひたい』

『貴い人は、貴いなりに、一人でも多くの人を喜ばせて貰ひたい』

學者は學者相應に、出家は出家相應に、柿の實の如く、唯赤く爲るだけ赤く爲れば、唯甘く爲るだけ甘く爲れば、必ず人を喜ばすことが能きる。梅の花の如く、咲くだけ咲けば、衆人の喜ぶを望まないでも、衆人自ら其の樹下に集り、其花を吟賞し、其馨りを喜ぶのである。

▼貴き人生の寶玉

水を掬すれば月手に在り
花を弄すれば香衣に滿つ

殊勝覓めざれども、殊勝自ら到るべし。內道德の充實すれば、其人の擧止動作、一々見聞する衆人悉く悅可すべきである。

貴き地位を得たらば、人を喜ばせやう。富める人と爲つたらば、人を喜ばせやう。といふ人があるけれども、貴き高き地位で、衆人に憎惡せられつゝある人があり、富める家庭の主人と爲つて、出入の人々に憎惡せられつゝある人もある。

衷心より、眞心より感謝して喜べる一言を聞くことは、千萬金にも換へ難き人生の寶玉である。

或る名家の主人が、結婚以後妻女の姙娠せる頃から、身を持ち崩し、魔性の女の擒となり、妻女を泣かせて喜び、痛快がり、魔性の女の一顰一笑を伺ふのを無上の喜びとして、妻子を苦しめ泣かしめたが、不治の難病に罹り、手厚き妻女の看護を受けて、愈々臨終の時に、其の貞淑なる妻を拜みつゝ

『噫勿體ないことであつた。私は永年惡魔の夢を見て居つた。今初めて御身の貞淑なるやさしい親切が分りました。永々苦勞をさせました。情願子供の養育を賴む』

と涙ながらに言つたのが、現世の言葉の名殘であつたと。永年心の腐爛れた放蕩をして、妻に惡口雜言した夫が、如何にも滿足して喜び、禮を言つた時、今迄の夫に對する妻としての親切が、寧ろ足らなかつたことを悔い、夫が最後の喜びの一言に、總ての苦悶は、雲の風に拂はれた如き心地がしたと語つたさうである。

衷心から、眞心から、他人の厚意を喜ぶといふことは、洵に貴い人生の寶玉である。だが喜びさへすれば良い寶玉といふのではない。『武王一度怒つて天下治まる』といふこともある。

或る高僧が、未だ沙彌であつた時、師僧の供をして、富豪の信者の家に招かれて、供養を受けたが、珍味の馳走が嬉しさの餘り、一と走り母の家に立ち寄り、

『母上今日は富貴の人の家に招かれ、師匠の御供して法要に參りましたところ、大そうもない馳走があり、母上の御好きのものでありましたから、御喜ばせしやうと持つて參りました』

と包みを開いたところ、母は喜ぶと思ひの外、聲荒らげて

『御前は何の爲めに出家したか、肉身の母親と離れて、沙門の身と爲つたのは、三千世界の衆生を濟度して、餘さず、洩さず、法悅に浸らせ、自他平等に喜ばさうとの行願ではないか、如何にお前が年少であるとはいへ、此母一人が、食物で喜ぶのを見て、親孝行と思ふか、そんな喜ばせ方を、此母は喜びとはせぬ、見下げ果てた出家である』

と叱りつ泣きつ、熱心籠めて教訓した。それで其僧は大誓願を起し、遂に高僧と爲り、天子の御前で、說法する名譽を得るに至つたと。

▽喜ぶも喜ばすも可なり

明治二十年の頃、殺人强盜の或る重罪犯人が、愈々死刑臺上の露と消えんとする時、是非一と目母親に逢ふて、告別をしたいと願ふたので、母親を呼び出して對面させたところ、其の死刑囚の極惡人が、母親に對して別れを惜み、不孝の罪でも詫びるかと思ひの外、眼を瞋らせて

『母親さんお前は忘れたか知らぬが、私が八歳の時、隣の家から、鈴の附いた鍬を盜んで來ると、

私が盗んで來たと知りながら、お前はこれは重寶な物だと喜んだ。今日まで私が惡事をした心の基は、あの鋏を盗んで來て、お前に喜んで貰つたが手初めだ。何故あの時、叱つてくれなかつた。何故あの時盗んで來た鋏で、私の手を酷く叩いて誡めてくれなかつた』

と泣きながら言ひ、死刑に處せられたといふことである。

他人は迷惑しても、小さい狹い個我の自分さへ都合が好ければ、獨り喜ぶといふ、我儘喜びを有つ人の家庭は危險である。

私の慾德を犧牲にし、私の愛情から起る喜びを犧牲にしても、公明を喜び、正義を喜ぶ人の家庭は、貧なりと雖も安樂である。心の大福長者である。

飢ゑた時に、食を與へられた人を喜ぶよりは、人として爲すべき義務、爲すべき善事をつとめさせてくれた人を喜ばねばならぬ。及ばずとも佛陀の喜びを以て、吾人の理想としたきものである。

特に人々の上位にある貴き人、富める人は、喜び方を愼んで、注意せねばならぬ。色を喜べば色來る。酒を喜べば酒來る。遊藝を喜べば藝人來る。犬を喜べば犬來る。珍器書畫を喜べば骨董品來る。名利を喜べば名利來る。耶蘇を喜べば牧師來る。佛法を喜べば僧往來す。『君子は仕へ易うして、喜ばせ難し』といふは此處のことだ。明君は一顰一笑を惜むといふも其事だ。却々喜ぶことが難かしい。梅尾の明惠上人が、松茸を喜ばれたとて、或る時信者の人が、心を籠めて、遠國から澤山の松茸を取り寄せて供養した。ところが明惠上人は、出家沙門の身で、食物を好み喜ぶといふのは、恥づかしき事であるとて、以後生涯松茸を食さなかつたと。人の上たる人、人の師たる人は、喜び好むことにも、細心の注意を要する道理がある。

喜ぶや可なり。喜ばすこと猶可なり、願くば山川草木と共に喜び、鳥獸蟲魚と共に喜び、又喜ばせて初めて毘盧舍那眞法身の大歡喜、大法悅といふべき喜びである。森羅萬象、塵々刹々悉く吾人人類を歡喜踊躍せしむる喜びの顯現である。仁者は山を見て喜び樂み、智者は水を見て喜び樂む、吾等凡俗は、如來大悲の眼を藉りて、縱令惡讐怨敵に對しても、恰も梅花に對し、黃鳥を聞くが如き態度で、長閑な春と共に、喜び迎ふるこそ、天龍八部も皆大歡喜信受奉行すること

であらう。

曾て衲が大阪から嵯峨の草庵へ歸らうとした夜、京都驛から三里の路は、最早汽車も、電車も終つた時刻であつたから、ハタと當惑して人力車を呼んだが、來る車夫もなく、暫く停車場前に佇んでゐたところ、漸くボロ車を引いた車夫が來て、行かうといふて、トボ〳〵と走りつゝ途中蠶の社の前のあたり、人家もなくて、淋しき道に差しかゝつた際、朧月夜に車上の衲と、引く車夫の二人のみ、時計を見れば二時も過ぎてゐて、車夫の姿が憐れに見えるので、四方山の話をしたが、其車夫の言ふには、

『恁うして今夜も、嵯峨まで御供して行き、京都へ歸れば、夜明け近くの四時頃に爲りませうが、どんなに遲く宅へ歸りましても、當年四歳に爲る一番下の女の子が、寢床から這ひ出して、父ちやん歸つたか、くたびれたらうと廻らぬ舌で、言ひ慰めてくれて、喜ぶ顏を見ると、夜通し働いた疲れも忘れます』

と。廣々とした滄海の中に、粟一粒を落したやうな此講話でも、廣い世の中に、縱令一人でも、讀んで喜ばるゝが嬉しいのである。一人でも多く喜んで下さる人があらば、衲は滿足で、喜びに堪へぬ。

◇懷しき京の町

▼思へば恥かしい極み

『滯團着て寢たる姿や東山』といふ京都は、十年の長の年月、衲が嵯峨天龍の雲水として、峨山老師の熱喝嗔拳を蒙り、泣きつ笑ひつした言ふに言はれぬ舊緣のあるところである。衲に饒舌れるといふ欲點があり、充分役位の人々に腕み附けられ、老師からもエグい言を聞かされ、法衣の袖を嚙んで、口惜し泣きに泣いたことは幾度であつたらう。

金鱗城を背後に、衲を乘せた汽車は、黑煙を吐きつゝ、十年の昔衲が足跡を印した京都へ着いたのである。多くの乘客がゾロ〳〵降車する其中に混じて、衲も人形の一人として下車した。

俥を呼んで寺町波多野亭を指して往く、七條、魚の棚、五條、寺町と、雲水時代に行乞して廻つ

た往時馴染の町並は、何んとなく懐しい。施主家の軒下に立ち、工夫三昧に入つて、懲深婆々に呶鳴られ、點心を頼むことすら忘れて、堀川と高瀬川と間違へて、笑はれたこともあり、美しい女を、網代笠の下から見ぬ振りして打ち見遣り、娼樓の行燈に、頭をコキンと打ち附け、目から火が飛び出して、ホイと氣が附いたこともあつた。點心の時、四人一組の雲水が、二升の飯をペロリと片附け、施主家の女中を驚かせたこともあつた。托鉢の歸り路に、大燈國師の塔前に、托鉢袋を尻に敷き、暫時の坐禪を試みて、嵯峨へ戻つたこともあつた。

多くの雲水の中には、口先や形式のみ如何にも修行に熱心なやうに、師家面前を誤魔化し、世間を瞞着した憎むべき似非坊主もあり、又專心に表裏なく修行したが、寺持と爲つて、直ぐ婦人にぼけた輩もあつた抔と聯想は、それからそれへと續いた。忽然俥の梶棒を下され、旅亭の女中が、何か言ふ聲に驚き、初めて吾れに歸つた。

思へば、今の衲は嵯峨の山水と共に清かつた十有餘年前の清淨な雲水境涯とは違つてゐた。身にはゾベラ〳〵と絹の着物を纏ひ、羽二重の法衣、吾妻コートに高帽子、金襴の絡子で、什麼見ても宛然たる役者坊主、息耕老漢に逢ふたら、頭からガミつかれるは疑ひない。口に言ふところは、自己の小長を擧して、他の小短を非難し、豪がりたい、譽められたいといふ自惚の聲ばかり、十有餘年前苦辛したのが有難く、清く美しい雲水の境涯は、停車場から旅亭まで來る俥の上の夢であつた。思へば恥かしい極みである。明日峨山老師の展墓をすることが、何んとなく怖ろしい心地がした。夜將に深うして、四隣寂とすれば、枕上唯鍋燒饂飩の賣聲が、遠くかすれて、淋しく悲しく聞えるのであつた。

▼鐵眼和尚に睨まるゝやうな思ひ

夜は白々と明けた。床の間を見ると、天田五郎の鐵眼和尚が、本師滴水老師の病氣快復を祈つた歌の幅物が掛つてゐた。其和歌は忘れたが、意味は弟子の吾が命を縮めても、本師の命を長からしめよと、深厚なる熱情の溢れたものであつた。これに向ふて、衲が親に對し、師に對し、竭すべきことを竭さなかつたことが思ひ出され、彼の蒼褪めて、太い眉毛の鬼を欺く面相の然かも最も道情の厚かつた鐵眼和尚に睨まれるやうな心地がした。

鐵眼和尚は、會津戰爭の頃、兩親を失ひ、親を思ふの情切實なる心から、西國巡禮を爲し、遂に兩親菩提の爲め、滴水老師の弟子と爲つた人であつた。其の西國順禮日記は、恰も深草の元政上人が、母に仕へて身延山に往かれた日記に似た名文である。斯る閑妄想中に下女は朝餐の膳を運んで來た。朝食を濟ませて、先づ花園の妙心寺へ行き、靈雲の莞爾和尚を尋ね、松岡寛慶師を安東縣鎭江山へ特請すべく交渉し、薄茶一服の供養を受けた。妙心寺中雪江の老松も、四派の松にも變りがなく、綠を添へて綠なるは嬉しかつた。妙心寺中今は一人の知己はなく、唯洛東、洛西の山あるのみであつた。後に聞けば布敎の講習で、幾人か知己が來て居つたとか、逢はなかつたことを遺憾とする。

道を轉じて相國寺專門道場に往つた。獨山和尚近頃新設せる隱寮に大座して、衲を一と呑みに呑却された。呑まれて衲は、獨山々中に一夜を語り明した。鄕の舊知、海雲山月の情に堪へなかつた。衲は東西にきよろつき廻る俗僧であるが、獨山は萬年山中に安座して、來機の人に接する清僧である。動と靜と、說と默と、一言一句、一機一境、一上一下、寒燈を挑げて、互に座忘打盡した。

▼八年目の會見

殘月淸く紙窓を照して寒く、時に洪鐘鳴り、木魚響き、雲衲の讀經の聲も聞えた。枕上時計を見ると午前三時半、早かつたが衲は蹶起洗面し終り、殘月に對して趺坐すること多時、此時の境涯は、知る人ぞ知るのである。讀經後和尚と粥座を共にした。聞く和尚住任以來此の僧堂に投宿した客は、衲が初めであつたと。六時頃俥を呼びて、葵橋畔に林爲亮、山澤鐵五郎氏を訪ふた。談笑數時山澤を帶同して四條大宮町から電車で、嵯峨に至り、天龍僧堂で點心の供養を受け、峨山老師の塔所を拜し、渡月橋の邊り嵐山の麓を散策し、路を萬松洞に轉じて、花より團子樓主人と今昔を語り、三秀院和尚の本堂建築工事を見舞ひて後、再び電車で四條に歸り、東福寺中長慶院和尚を訪ふた。

長慶は、天龍時代ヒコ圭と綽名のあつた有名な願心家で、衲とは古い知心の友であつた。和尚叩門の聲を聞き、履を倒にして飛び出し來つた。一碗の茶を喫するに暇なく、丹波龜岡の聖隣院